愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XVII

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

— 2005 年度 —

愛媛大学埋蔵文化財調査室

２００７

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

―― 2005年度 ――

愛媛大学埋蔵文化財調査室

２００７

序　　文

国立大学法人愛媛大学の敷地は、松山市内および愛媛県内各所に点在し、敷地総面積は464ヘクタールに及ぶ。そのうち、本部事務局と４つの学部が所在する城北団地には文京遺跡、農学部と附属高等学校がある樽味団地には樽味遺跡、国際交流会館がある鷹子団地には鷹子遺跡、教職員宿舎のある北吉井団地には桑原西稲葉遺跡など、数多くの遺跡がある。これまで、愛媛大学では、埋蔵文化財調査室を設置し、校舎建設や営繕工事等の際、埋蔵文化財への影響度をはかるための試掘調査を行い、埋蔵文化財が諸工事で影響を受ける場合には、影響度に応じて全面調査や立会調査の発掘調査を実施してきた。さらに、大学構内における遺跡の有無や精度の高い分布状況を把握する確認調査を実施し、埋蔵文化財の保護に努めている。

こうした調査成果は客観的に資料化した上で、調査報告書にまとめて公開する必要がある。ところが、愛媛大学の場合、出土品の多さと頻繁な発掘調査によって、速やかな報告書刊行を容易に行えない状況にあった。こうした状況を打開するため、2000年以降、小規模調査である試掘・立会・確認調査についての報告と、本格調査の概要報告を併せた『埋蔵文化財調査室年報』を刊行してきた。本書は、その2005年度に実施した埋蔵文化財調査等をまとめた年報である。

本書をまとめるにあたっては、多くの機関・部局・個人の方々から協力を得た。その労に深く感謝するとともに、本書が大学内外の多くの方々に利用・活用されることを祈念します。

平成19年７月30日

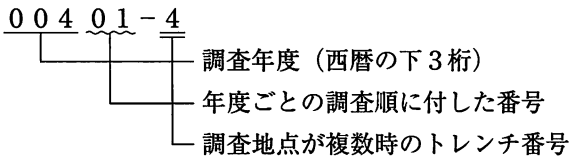
愛媛大学埋蔵文化財調査室長

下　條　信　行

例　　言

1．本書は、愛媛大学埋蔵文化財調査室が2005年度に実施した事業等を報告する愛媛大学埋蔵文化財調査室年報であり、愛媛大学埋蔵文化財調査報告ⅩⅦにあたる。

2．埋蔵文化財調査室では、全面調査・確認調査については、遺跡ごとに調査次数を付しているが、同時に、1975年から始まった大学構内の発掘調査まで遡って、すべての調査に調査番号を与えている。調査番号は、西暦の下３桁の後に各年度ごとの調査順に01からの２桁の通し番号を加えた５桁の番号で表示している。調査番号に加えて、複数の地点（トレンチ）を調査した場合、－の後に地点番号を付して表示している。



3．本書では、遺構番号に冠して、掘立柱建物：SB、竪穴式住居：SC、溝：SD、炉跡・竈：SF、柵列：SA、水田：SS、土壙：SK、柱穴・小穴：SP、自然流路：SR、その他の遺構：SX の記号で遺構の種別を表している。

4．本書で表示した方位・標高数値は、本格調査においては、日本測地系（Tokyo Datum）平面直角座標系第Ⅳ系にしたがっている。ただし、試掘・立会調査、確認調査で座標系が利用できなかった場合は、調査地点周囲の平板測量成果を掲載し、磁北を表示している。

5．土色・遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）『新版標準土色帖』に準拠しているが、本文中ではマンセル記号は省略した。

6．本書に使用した遺構図は、田崎博之・吉田広・三吉秀充・宮崎直栄が作成し浄写を行った。

7．本書に使用した遺物図は、吉田・宮崎・濱田美加が作成し、浄写を行った。

8．本書で使用した写真は、田崎・吉田・三吉が撮影した。

9．本書はⅠ章を田崎・三吉、Ⅱ章を田崎・吉田・三吉・濱田、Ⅲ章を吉田が執筆し、下條信行の指導のもと、田崎が編集を行った。

10．本書に報告した調査に係わる記録類・出土遺物は、愛媛大学埋蔵文化財調査室において保管している。

本文目次

Ⅰ　埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室の事業
1　埋蔵文化財調査委員会 …… 1
2　埋蔵文化財調査室の体制と発掘調査、整理作業 …… 2
3　発掘報告書・年報の刊行 …… 2
4　広報、出土品・調査記録の活用 …… 4

Ⅱ　2005年度実施の発掘調査
00501　（城北団地）生物環境試料バンク改修工事に伴う調査 …… 11
00502　（城北団地）基幹整備（舗装等）工事に伴う調査 …… 20
00503　（城北団地）共通教育講義棟避雷設備設置に伴う調査 …… 25
00504　（東長戸団地）東長戸宿舎内電柱改修工事に伴う調査 …… 27
00505　（東長戸団地）東長戸宿舎内電柱撤去工事に伴う調査 …… 27
00506　（城北団地）事務局構内電柱建替工事（その１）に伴う調査 …… 28
00507　（城北団地）事務局構内電柱建替工事（その２）に伴う調査 …… 31
00508　（城北団地）法文学部屋根付き駐輪場設置計画に伴う調査 …… 32
00509　（樽味団地）農学部附属農業高校暖房蒸気漏修理工事に伴う調査 …… 37
00510　（城北団地）法文学部講義棟周辺環境整備（樹木移植工事）に伴う調査 …… 39
00511　（重信団地）医学部附属病院院内保育所設置計画に伴う調査 …… 40
00512　（城北団地）法文学部講義棟周辺環境整備計画に伴う調査 …… 43
00513　（城北団地）教育学部２号館等空調設備電源工事に伴う調査 …… 47
00514　（城北団地）工学部２号館２階女子便所改修電気設備工事に伴う調査 …… 49
00515　（城北団地）法文学部屋根付き駐輪場設置工事に伴う調査 …… 51

Ⅲ　愛媛大学保管・所蔵の考古資料(2) …… 55

挿図目次

図１　城北団地における2005年度調査地点位置図（縮尺1/3,500）…… 8
図２　樽味団地における2005年度調査地点位置図（縮尺1/2,500）…… 9
図３　東長戸団地における2005年度調査地点位置図（縮尺1/1,500）…… 9
図４　重信団地における2005年度調査地点位置図（縮尺1/3,000）…… 10
図５　00501・00510・00512調査地点位置図（縮尺1/500）…… 12
図６　00501調査遺構配置および土層断面図（縮尺1/50）…… 14-15（折り込み）
図７　00501調査 SC-33遺構実測図（縮尺1/50）… 15
図８　00501調査 SD-32・35・42、SP-36・37・45遺構実測図（縮尺1/50）…… 16
図９　00501調査出土遺物実測図（縮尺１～11：1/4、12・13：1/3）…… 17
図10　00502・00503調査地点位置図（縮尺1/1,000）…… 21
図11　00502調査１～４トレンチ土層断面図（縮尺1/50）…… 22
図12　00502調査出土遺物実測図(縮尺１～３:1/3、４:1/2)…… 22
図13　00502・00503調査周辺のⅡ層の堆積状況（縮尺1/300、1/50）…… 24
図14　00503調査トレンチおよび土層断面図（縮尺1/50）…… 25
図15　00504・00505調査地点配置および土層柱状図（縮尺1/1,000、1/50）…… 26
図16　00506・00507調査地点位置図（縮尺1/1,000）…… 29
図17　00506調査地点周辺の土層堆積状況（縮尺1/500、1/50）…… 30
図18　00507調査土層柱状図（縮尺1/50）…… 32
図19　00508・00510・00515調査地点位置図（縮尺1/500）…… 33
図20　00508調査１～３トレンチ実測図（縮尺1/50）…… 34
図21　00508調査４トレンチ実測図（縮尺1/50）…… 35
図22　00509調査地点配置および周辺土層堆積状況（縮尺1/500、1/50）…… 38
図23　00510調査土層柱状図（縮尺1/50）…… 39
図24　00511調査１トレンチ配置および土層柱状図（縮尺1/500、1/50）…… 41
図25　00511調査２トレンチ配置および周辺土層柱状図（縮尺1/1,000、1/50）…… 42
図26　00512調査１～３トレンチ実測図および土層柱状図（縮尺1/50）…… 45
図27　00513調査配置図および１・２トレンチ実測図（縮尺1/1,000、1/50）…… 46
図28　00513調査２トレンチ出土遺物実測図（縮尺1/1）…… 47
図29　00514調査位置図およびトレンチ実測図（縮尺1/500、1/50）…… 49
図30　00514調査出土遺物実測図（縮尺1/4）…… 50
図31　00515調査１～20トレンチ配置および土層断面図（縮尺1/50）…… 52-53（折り込み）
図32　長谷遺跡位置図（縮尺1/5,000）…… 56
図33　長谷遺跡資料採集地点（縮尺1/2,000、1976年編集松山市都市計画図より作成）…… 57
図34　長谷遺跡採集資料(1)（縮尺1/3）…… 59
図35　長谷遺跡採集資料(2)（縮尺1/3）…… 60
図36　長谷遺跡採集資料(3)（縮尺1/3）…… 61
図37　長谷遺跡採集資料(4)（縮尺1/3）…… 62
図38　長谷遺跡採集資料(5)（縮尺1/2、2/3）…… 63
図39　十亀（1973）報告図(1)…… 66
図40　十亀（1973）報告図(2)…… 67

表 目 次

表１　2005年度埋蔵文化財調査委員会構成 …… 1
表２　2005年度埋蔵文化財調査室の体制 …… 1
表３　2005年度の埋蔵文化財の確認問い合わせと調査依頼一覧 …… 3
表４　2005年度発掘調査一覧 …… 4
表５　埋蔵文化財調査室収蔵の出土品・調査データの利用依頼 …… 6
表６　00501調査出土遺構一覧 …… 14
表７　旧歴史学研究会保管長谷遺跡採集資料 …… 58
表８　長谷遺跡採集遺物観察表 …… 69

写 真 目 次

写真１　公開講座の授業風景 …… 5
写真２　00501調査時の考古学講義風景 …… 5
写真３　00501調査区全景（調査前、北東から） …… 18
写真４　00501調査区中央～南半部のⅢ層上面検出状況（西から） …… 18
写真５　00501調査区南半部のⅣ層上面遺構検出状況（北から） …… 18
写真６　00501調査区中央～南半部完掘状況（西から） …… 18
写真７　00501調査区南半部遺構完掘状況（北から） …… 19
写真８　00501調査 SD-35土層断面（西から） …… 19
写真９　00501調査 SD-42土層断面・石庖丁出土状況 …… 19
写真10　00501調査余掘り壁面のⅣ - ２層と縄文土器出土状況 …… 19
写真11　00502調査地点（南西から） …… 23
写真12　00502調査地点（西から） …… 23
写真13　00502調査１トレンチ（北西から） …… 23
写真14　00502調査２トレンチ（北西から） …… 23
写真15　00502調査３トレンチ（北西から） …… 23
写真16　00502調査４トレンチ（北西から） …… 23
写真17　00502調査４トレンチ西壁断割土層（東から） …… 23
写真18　00502調査４トレンチ西壁南端断割土層（北東から） …… 23
写真19　00503調査地点遠景（南から） …… 25
写真20　00503調査完掘状況（北から） …… 25
写真21　00504調査地点（北西から） …… 27
写真22　00504調査南壁土層（北から） …… 27
写真23　00505調査地点（南西から） …… 28
写真24　00505調査区（北から） …… 28
写真25　00506調査遠景（北東から） …… 31
写真26　00506調査風景 …… 31
写真27　00506調査１トレンチ（北西から） …… 31
写真28　00506調査１トレンチ土層 …… 31
写真29　00506調査２トレンチ（北から） …… 31
写真30　00506調査２トレンチ土層 …… 31
写真31　00507調査地点（南西から） …… 32
写真32　00507調査土層（南から） …… 32
写真33　00508調査１～３トレンチ遠景（南東から） …… 36
写真34　00508調査１トレンチ全景（北から） …… 36
写真35　00508調査１トレンチ南部土層（西から） …… 36
写真36　00508調査２トレンチ全景（北から） …… 36
写真37　00508調査２トレンチ北部土層（南西から） …… 36
写真38　00508調査２トレンチ南壁土層（北から） …… 36
写真39　00508調査３トレンチ全景（北から） …… 37
写真40　00508調査３トレンチ東壁土層（南西から） …… 37
写真41　00508調査３トレンチ南壁土層（北から） …… 37
写真42　00508調査４トレンチ全景（南から） …… 37

写真43　00508調査４トレンチ南壁土層（北から）……37
写真44　00509調査区全景（西から）……39
写真45　00509調査区西壁（東から）……39
写真46　00509調査区東壁（西から）……39
写真47　00510調査地点遠景（北西から）……40
写真48　00510調査地点近景（西から）……40
写真49　00510調査区土層（北西から）……40
写真50　00510調査区完掘状況（南西から）……40
写真51　00511調査１トレンチ遠景（南から）……43
写真52　00511調査１トレンチ土層（南から）……43
写真53　00511調査２トレンチ遠景（南西から）……43
写真54　00511調査２トレンチ土層（北東から）……43
写真55　00512調査１トレンチ遠景（南から）……44
写真56　00512調査１トレンチ（南西から）……44
写真57　00512調査１トレンチ北壁土層（南から）……44
写真58　00512調査１トレンチ東壁南半部土層（西から）……44
写真59　00512調査２トレンチ（南東から）……44
写真60　00512調査２トレンチ北端土層（東から）……44
写真61　00512調査３トレンチ（南東から）……44
写真62　00512調査３トレンチ土層（南から）……44
写真63　00513調査１トレンチ遠景（東から）……48
写真64　00513調査１トレンチ（南から）……48
写真65　00513調査１トレンチ北半部東壁土層（西から）……48
写真66　00513調査１トレンチ南半部東壁土層（西から）……48
写真67　00513調査２トレンチ遠景（北東から）……44
写真68　00513調査２トレンチ（南東から）……48
写真69　00514調査地点遠景（南西から）……50
写真70　00514調査地点近景（南から）……50
写真71　00514調査土層（南から）……50
写真72　00515調査地点遠景（西から）……52
写真73　00515調査１トレンチ（西から）……53
写真74　00515調査２トレンチ（西から）……53
写真75　00515調査２トレンチ SP-4土器出土状況……53
写真76　00515調査３トレンチ（西から）……53
写真77　00515調査４トレンチ（北から）……53
写真78　00515調査４トレンチ北壁土層（南から）……53
写真79　00515調査５トレンチ（西から）……53
写真80　00515調査６トレンチ（北から）……53
写真81　00515調査７トレンチ（北から）……54
写真82　00515調査８トレンチ（東から）……54
写真83　00515調査９トレンチ（西から）……54
写真84　00515調査10トレンチ（西から）……54
写真85　長谷遺跡遠景（南西上から、2006年５月撮影）……55
写真86　長谷遺跡遠景（南西から、2006年５月撮影）……55
写真87　長谷遺跡採集資料①……64
写真88　長谷遺跡採集資料②……64
写真89　長谷遺跡採集資料③……64
写真90　長谷遺跡採集資料④……64
写真91　長谷遺跡採集資料⑤……64
写真92　長谷遺跡採集資料⑥……64
写真93　長谷遺跡採集資料⑦……65
写真94　長谷遺跡採集資料⑧……65
写真95　長谷遺跡採集資料⑨……65
写真96　長谷遺跡採集資料⑩……65

Ⅰ　埋蔵文化財調査委員会と埋蔵文化財調査室の事業

1　埋蔵文化財調査委員会

2005（平成17）年度の埋蔵文化財調査委員会は、7月27日に開催された。議事に先だって、4月1日付けで大学の各種委員会規程が改正され、これに伴って埋蔵文化財調査委員会委員長が学術・評価・企画担当理事である柳澤康信理事に決定されたことが報告された。以下、2005年度の埋蔵文化財調査委員会の構成は表1の通りである。

議事では、まず、2004（平成16）年度の実施事業が下條信行埋蔵文化財調査室長から報告された。2004年度には、城北団地・樽味団地・御幸団地で小規模調査5件を実施し、メディアセンター新営工事に伴う文京遺跡25次調査と総合研究実験棟新営工事に伴う文京遺跡27次調査の出土遺物の洗浄・注記・接合・復元作業、工学部校舎新営（Ⅰ期）工事に伴う文京遺跡12次調査と総合研究実験棟新営工事に伴う文京遺跡27次調査の水洗土壌からの微細遺物選別作業、サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー新営工事に伴う文京遺跡20次調査の出土遺物の実測・製図作業を行った。また、『文京遺跡Ⅳ－文京遺跡20次調査・文京遺跡23次調査－』と『埋蔵文化財調査室年報－2003年度－』を刊行した。発掘資料の利活用に関しては、学内外からの58件の出土品の借用や情報提供の依頼に対応するとともに、2004年10月に『まなびピア in 愛媛大学』の一環として展示会「文京遺跡発　弥生土器からのメッセージ」を開催した。以上の実施事業と会計報告が報告され了承された。2005年度事業計画は、発掘調査、整理作業、発掘調査報告書等の刊行と発送、広報・資料の利活用等の実施事業案、予算案が説明された。委員長から埋蔵文化財調査室の予算決定の流れについて質問があり、今後は予算を決定する前に埋蔵文化財調査委員会で審議することが提案され、事業計画案を含めて了承された。

その他、これまで個人的な活動として進められてきたWeb上での高画質発掘調査データの閲覧・検索方法の開発状況が報告され、今後は調査室事業として進めることが了承された。また、今年度以降、駐車場等

表1　2005年度埋蔵文化財調査委員会構成

部　局	委　員	
委員長	学術・評価・企画担当理事	柳澤　康信
法文学部	法文学部長	湯浅　良雄
法文学部	教授	下條　信行
法文学部	教授	松原　弘宣
教育学部	教育学部長	渡邊　弘純
教育学部	教授	川岡　勉
理学部	理学部長	野倉　嗣紀
医学部	医学部長	橋本　公二
工学部	工学部長	鈴木　幸一
農学部	農学部長	泉　英二
本　部	事務局長	門山　勇
本　部	経営企画部長	山田　勝治
本　部	財務部長	八木　修一
本　部	施設基盤部長	山地　久司

表2　2005年度埋蔵文化財調査室の体制

調査室長	下條　信行	法文学部教授
調査員	田崎　博之	法文学部教授
	吉田　広	法文学部助教授
	三吉　秀充	法文学部助手
教務補佐員	宮崎　直栄	施設基盤部 施設企画課
事務補佐員	渡邉かおる	
技術補佐員	濱田　美加	
	西澤　昌平	
技能補佐員	井手野文江	
	門田　都	
	松本美和子	
	丸岡美智子	
専門員	松原　弘宣	法文学部教授
	村上　恭通	法文学部助教授
	川岡　勉	教育学部教授

への利用が計画されているグリーンゾーンについて、下條埋蔵文化財室長から、グリーンゾーンの決定経緯と範囲、その活用が求められていることが説明された。これについては、柳澤委員長から、敷地が狭隘になっていることからグリーンゾーンを交通対策５ヶ年計画の中で駐車場・駐輪場とする予定となっているが、それは一時的な経過措置であるとの学長の考えが説明された。埋蔵文化財調査委員会として、グリーンゾーンを長期的に守っていくこと、建物の建設予定範囲から除くこと、駐車場等は一時的・経過的なものであることが再確認された。

さて、７月に開催された埋蔵文化財調査委員会で決定されたように、第２回委員会が、2006年１月18日に開催され、2006年度事業計画と予算についての審議が行われた。下條埋蔵文化財調査室長から原案が提案された後、審議が進められ、原案は了承された。また、柳澤委員長から今後の大規模な発掘調査を必要とする工事計画について質問があり、施設基盤部部長から総合情報メディアセンター増築、基幹整備に伴う外構工事等がありうることが説明された。　　（田崎）

2　埋蔵文化財調査室の体制と発掘調査、整理作業

2005年度の埋蔵文化財調査室の体制は、表２に示した通りであるが、総合情報メディアセンター南部分建物新営工事に伴う文京遺跡18次調査の正式報告書刊行に向けての整理作業を田崎、営繕工事などに伴う小規模発掘調査を吉田が主に担当することとした。

また、埋蔵文化財調査室では、毎年度当初、各部局で計画されている掘削を伴う工事について、施設部を通じて問い合わせを行い、埋蔵文化財への影響を判断し協議を求めていくこととしている。こうした手続きが定着している結果として、2005年度には、23件（施設基盤部13、財務部６，法文学部１、農学部１、医学部２）の問い合わせと調査依頼があった（表３）。この中で、計画掘削深度では埋蔵文化財に影響がないと周辺の既往調査の成果から判断されたものについては、発掘調査が必要ないことを回答するとともに、慎重工事を依頼している。

2005年度に実施した発掘調査は、前述の23件の問い合わせと調査依頼の中で、工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶと判断した15件（城北団地11件、樽味団地１件、重信団地１件、東長戸団地２件）である。00501～00515の調査番号をつけ、調査を実施した（表４）。その大部分は、営繕工事や小規模な改修工事に伴う調査である。しかし、00501調査では調査に着手した後に弥生時代～古墳時代の遺構と遺物を包含する城北団地全域での基本層序Ⅲ層が削られることが判明し、急遽、工事対象地域の全域を調査することとなった。

発掘調査報告書の刊行に向けた整理作業としては、総合情報メディアセンター南部分建物新営工事に伴う文京遺跡18次調査の出土遺物の実測・写真撮影の作業を進めた。また、樽味遺跡７次調査、文京遺跡26次調査の出土遺物の洗浄・注記・接合・復元作業を行うとともに、文京遺跡12次調査、文京遺跡27次調査の微細遺物選別作業を実施した。また、学生サークルであった旧歴史学研究会が収集した資料の実測・写真撮影を進めた。　　（田崎）

3　発掘報告書・年報の刊行

2005年度には、年度当初、総合情報メディアセンター南部分建物新営工事に伴う文京遺跡18次調査の正式報告書と、2004年度に実施した小規模調査の報告をとりまとめた『埋蔵文化財調査室年報－2004年度－』の印刷・刊行を計画していた。そのうち、『埋蔵文化財調査室年報－2004年度－』は刊行することができたが、文京遺跡18次調査の正式報告書については、出土遺物の実測・写真撮影が年度末までかかり、報告書の刊行は来年度へ繰り越さざるをえなかった。

また、昨年度刊行した『樽味遺跡Ⅳ』、『埋蔵文化財

表３　2005年度の埋蔵文化財の確認問い合わせと調査依頼一覧

年月日		発	工事名	埋蔵文化財への影響の判断・対応
2005年	5月16日	施設基盤部安全衛生管理室長	（城北団地）防火水槽標識取付工事	慎重工事を依頼。
	6月9日	施設基盤部施設整備課長	（城北団地）生物環境試料バンク改修工事	00501調査として発掘調査を実施
	7月7日	施設基盤部施設整備課長	（城北団地）基盤整備（舗装等）工事	00502調査として発掘調査を実施。
	8月23日	施設基盤部施設整備課長	（城北団地）共通教育講義棟避雷設備設置工事	00503調査として発掘調査を実施。
	8月24日	財務部財務企画課長	（東長戸団地）宿舎内電柱改修工事	00504調査として発掘調査を実施。
	8月30日	財務部財務企画課長	（城北団地）教育学部4号館東外灯設備復旧工事	周辺の既往調査（99602調査等）から、計画の掘削深度では埋蔵文化財に影響ないと判断し、慎重工事を依頼。
	9月8日	財務部財務企画課長	（東長戸団地）宿舎電柱撤去工事	00505調査として発掘調査を実施。
	10月14日	施設基盤部施設整備課長	（城北団地）焼却炉電源工事	周辺の既往調査（00002・00005・00202調査等）から、計画の掘削深度では埋蔵文化財に影響ないと判断し、慎重工事を依頼。
	10月26日	財務部財務企画課長	（城北団地）本部事務局構内電柱建替工事	00507調査として発掘調査を実施。
	10月31日	財務部財務企画課長	（城北団地）本部事務局構内電柱建替工事	00506調査として発掘調査を実施。
	10月31日	法文学部長	（城北団地）法文学部講義棟周辺環境整備に伴う駐輪場上屋根取設工事	２月２月付けで埋蔵文化財調査室長名で工事内容の変更を依頼。協議の上、グリーンゾーンを避ける形で、工事を行うこととなり、00508として試掘調査、00515として立会調査を実施。
	11月17日	施設基盤部施設整備課長	（情報団地）焼却炉ネットフェンス取付工事	周辺の既往調査（00002・00005・00202調査等）から、計画の掘削深度では埋蔵文化財に影響ないと判断し、慎重工事を依頼。
	11月22日	施設基盤部施設整備課長	（城北団地）附属図書館情報基盤整備工事	周辺の既往調査（99316・99902・00305調査）から、計画の掘削深度では埋蔵文化財に影響ないと判断し、慎重工事を依頼。
	12月9日	施設基盤部施設整備課長	（城北団地）法文学部講義棟周辺環境整備工事	協議の上、埋蔵文化財に影響がないように工事内容を変更。ただし、工事地点の一部については00510調査として発掘調査を実施。
	12月12日	医学部長	（重信団地）構内駐車場管理システム設置工事	工事予定地は、団地造成以前は溜め池であった地点であり、計画の掘削深度では埋蔵文化財に影響はないと判断。
	12月12日	施設基盤部施設整備課長	（樽味団地）農学部附属農業高等学校暖房蒸気漏修理工事	00509調査として発掘調査を実施。
	12月16日	施設基盤部施設整備課長	（樽味団地）農学部附属農業高校バックネット改修工事	周辺の既往調査（99905・99712調査等）から、計画の掘削深度では埋蔵文化財に影響ないと判断。慎重工事を依頼。
2006年	1月26日	施設基盤部施設整備課長	（城北団地）工作物等改修工事	周辺の既往調査（99510・99512調査）の結果から、計画の掘削深度では埋蔵文化財に影響はないと判断。慎重工事を依頼。
	1月30日	医学部長	（重信団地）医学部附属病院内保育所設置工事	00511調査として試掘調査を実施。
	2月2日	施設基盤部施設整備課長	（城北団地）教育学部4号館総合授業研究室空調設備電源工事	周辺の既往調査（00108調査）の成果から、共同溝の余掘り範囲での工事と判断。慎重工事を依頼。
	3月10日	農学部長	（樽味団地）農学部テニスコート西側外灯取替工事	周辺の既往調査（樽味遺跡1次Ⅱ区、5次Ⅱ区）の成果から、計画の掘削深度では埋蔵文化財に影響はないと判断。慎重工事を依頼。
	3月20日	施設基盤部施設整備課長	（城北団地）工作物等改修工事	２ヶ所の工事地点のうち、１ヶ所は周辺の既往調査（99911・00001調査）の結果から計画の掘削深度では埋蔵文化財に影響はないと判断。他の１ヶ所は、既存の囲障基礎の再掘削であり、埋蔵文化財に影響はないと判断。慎重工事を依頼。
	3月31日	財務部財務企画課長	（城北団地）本部敷地内電柱建替工事	隣接する既往調査（00506-2調査）の結果から、計画の掘削深度では、埋蔵文化財に影響は生じないと判断。慎重工事を依頼。

表４　2005年度発掘調査一覧

調査番号	調査種別	団地	遺跡	調査原因	調査期間	調査面積（㎡）	調査担当
00501		城北	文京	生物環境試料バンク改修工事	20050621～20050707	78.5	田崎・三吉
00502	立会	城北	文京	基幹整備（舗装等）工事	20050824～20050826	38.6	吉田
00503	試掘	城北	文京	共通教育講義棟避雷設備設置工事	20050824～20050826	12.4	吉田
00504	立会	東長戸	山越	東長戸宿舎内電柱改修工事	20050831	0.3	吉田
00505	立会	東長戸	山越	東長戸宿舎内電柱撤去工事	20051028	0.25	吉田・三吉
00506	立会	城北	文京	事務局構内電柱建替工事（その１）	20051104	0.9	吉田・三吉
00507	立会	城北	文京	事務局構内電柱建替工事（その２）	20051114	0.3	吉田・三吉
00508	試掘	城北	文京	法文学部屋根付駐輪場設置計画	20051115	9.8	吉田・三吉
00509	立会	樽味	樽味	農学部附属農業高校暖房蒸気漏修理工事	20051221	7.8	吉田
00510	立会	城北	文京	法文学部講義棟周辺環境整備に伴う樹木移植工事	20060130	3.2	吉田・三吉
00511	試掘	重信		医学部附属病院院内保育所設置計画	20060207	5	吉田・三吉
00512	試掘	城北	文京	法文学部講義棟周辺環境整備計画	20060221	4.3	吉田・三吉
00513	試掘	城北	文京	教育学部２号館等空調設備電源工事	20060228	2.7	吉田・三吉
00514	試掘	城北	文京	工学部２号館２階女子便所改修電気設備工事	20060228	1.5	吉田・三吉
00515	立会	城北	文京	法文学部屋根付駐輪場設置工事	20060302～20060303	24.2	田崎・吉田・三吉

調査室年報－2003年度－』を、全国の大学･研究機関、文化庁、教育委員会・埋蔵文化財センター、博物館・資料館へ発送した。（田崎）

4　広報、出土品・調査記録の活用

大学構内の埋蔵文化財調査が進むとともに、調査成果に対する学内外からの関心が高まりをみせている。埋蔵文化財調査室では、これに応えるべく、調査成果や埋蔵文化財調査室に関する広報活動を積極的に進めている。

毎年４月に新入生や新規採用職員に広報パンフレット『発掘　愛媛大学』を配布してきたが、2005年度には残部がなく､広報パンフレットを配布できなかった。そこで､改訂版の印刷を2005年度に計画し､刊行した。

また、法文学部公開講座の形をとり、平成17年度愛媛大学公開講座『文京遺跡から学ぶ弥生時代のムラ』を、以下の日程で開催した。

10月８日（土）下條信行「文京遺跡って何だろう、歩いて知ろう」
10月15日（土）三吉秀充「特異な超大型建物」
10月29日（土）吉田　広「倉庫は語る」
11月５日（土）田崎博之「住居を考古学する」
11月12日（土）田崎博之・吉田　広・三吉秀充「討論－大規模集落の時代を考える－」

講座は、当初、受講生30名を募集し講義形式での運営を計画したが､希望者が約10名と少人数であったので、講師と受講生との双方向のやりとりを大切にするという観点から、

①文京遺跡出土の実物資料を、受講生が実際に手に触

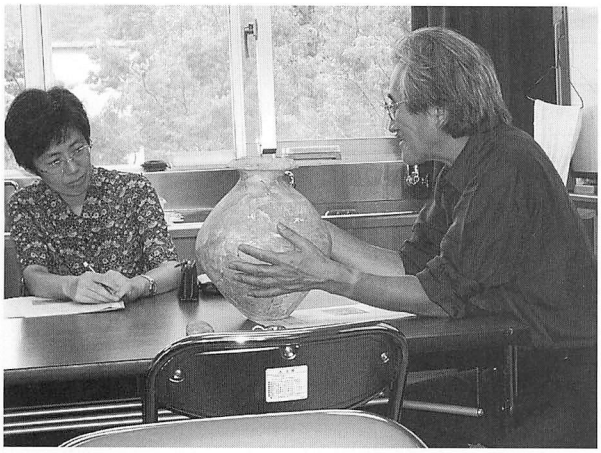


写真１　公開講座の授業風景

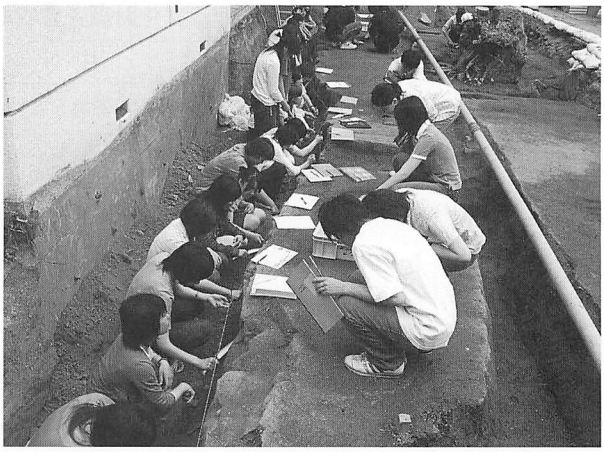


写真２　00501調査時の考古学講義風景

れながら観察する機会を設けること
②各講義時間内に質疑応答の時間を設けたり、毎回受講生へ質問票を配布し最終回で回答すること
とした（写真１）。その結果、講座終了後に行ったアンケートでは、「土器・米等実物をさわってみて、実感できた」、「すべてがめずらしく、興味が湧きました」などの感想が寄せられ、公開講座の継続的な実施が要望された。年度末には、これらアンケートの結果や回答、公開講座の内容をまとめ、平成17年度愛媛大学公開講座記録集『愛媛大学公開講座　文京遺跡から学ぶ弥生時代のムラ』を刊行した。

さらに、城北団地で年度前半期に実施した生物環境試料バンク改修工事に伴う00501調査では、授業期間中でもあり、考古学および埋蔵文化財論の講義の一環として臨地授業を行うことができた（写真２）。こうした遺跡の状況を実地に観察しながら進める授業は、学期末の受講生による授業評価アンケートでも好評であった。

昨年度開設した埋蔵文化財調査室ホームページでは、Web上での埋蔵文化財調査室の調査・研究活動の情報発信を行っている。そこでは、調査室の概要や専門的な報告だけでなく、城北キャンパスや樽味キャンパスの地下に眠る文京遺跡や樽味遺跡など、松山平野を代表する遺跡紹介を行うなど、気軽に閲覧できるよう工夫している。その成果の一部は、マスコミ（愛媛新聞2006年２月15日付け　地域のニュース）で報道され、アクセス数も増加している。

一方、2005年度も、学内外からの出土資料に関する調査や情報提供、借用の依頼が多い。59件の利用依頼があり、それぞれの要望に調整を図りながら個別に対応した（表５）。学内からの依頼は、本学教員の実物教育の教材としての利用、大学院生・学部生の修士論文・卒業論文作成のための資料調査などがある。学外からは、㈶松山市生涯学習振興財団松山市考古館からの出土品の借用をはじめ、他大学の教員・学生や教育委員会・埋蔵文化財調査機関の研究員や調査担当者からの資料調査依頼が多い。こうした利用に加えて、一昨年度からとくに目立ってきたのは、市民からの情報提供の依頼である。それだけ愛媛大学に蓄積されている文京遺跡をはじめとする埋蔵文化財への一般市民の関心が高まってきていることをうかがえる。また、７月23日～25日に総合情報メディアセンターで開催された『戦後60年　戦争資料展』のために、文京遺跡から出土した練兵場時代の銃弾・薬莢などが借用・展示された。弥生時代・古墳時代等の古い時代の出土品だけでなく、こうした資料も含めた埋蔵文化財データの活用形態を考えていく必要がある。　（田崎・三吉）

表５　埋蔵文化財調査室収蔵の出土品・調査データの利用依頼

年	月　日	利　用　者	目　　的	利用内容	利　用　資　料
2005年	4月１日	法文学部・助教授	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡10次調査出土の弥生土器
	4月１日	法文学部・教授	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡10次調査出土遺物
	4月13日	教育学部・非常勤講師	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡出土の遺物（計10点）
	4月20日	教育学部・非常勤講師	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡出土の遺物（計12点）
	4月20日	香川県立歴史博物館・学芸員	研究のため	資料照会	文京遺跡出土の漁網錘
	5月12日	法文学部・教授	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡出土の弥生土器（計７点）
	5月18日	教育学部・学部生	授業の一環としての施設見学	見学	
	5月19日	法文学部・学部生(15名)	授業の一環としての施設見学	見学	
	5月25日	教育学部・非常勤講師	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡出土の弥生土器（計６点）
	6月15日	教育学部・非常勤講師	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡14次調査出土の石鏃(計８点)
	6月22日	教育学部・非常勤講師	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡14次調査出土の石鏃(計８点)
	6月29日	教育学部・非常勤講師	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡出土の石庖丁（計７点）
	7月６日	愛媛県松野町教育委員会・職員	研究のため	熟覧	文京遺跡出土の中世の遺物
	7月15日	法文学部・教授	展示会開催のため資料調査	熟覧	文京遺跡20・23次調査出土の旧練兵場関連資料
	7月22日	法文学部・教授	展示会開催のため	借用	文京遺跡20・23次調査出土の旧練兵場関連資料、展示ケース
	7月25日	工学部・学部生	授業レポート作成のため	文献複写	埋蔵文化財調査室所蔵の調査報告書
	7月30日	西条市教育委員会・職員	施設見学	見学	
	7月30日	今治市教育委員会・職員（２名）	施設見学	見学	
	9月６日	法文学部・学部生	施設見学	見学	
	9月27日	(財)松山市生涯学習振興財団松山市考古館	展示会開催のため	遺物借用	文京遺跡出土の分銅形土製品(計９点)
	10月20日	愛媛県松野町教育委員会・職員	研究のため	文献複写	埋蔵文化財調査室所蔵の調査報告書
	10月15日	法文学部・助手	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡10次調査出土の弥生土器
	10月29日	法文学部・助教授	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡12次調査出土の炭化米
	11月５日	法文学部・教授	授業用の教材として利用するため	借用	文京遺跡出土の弥生土器
	11月14日	法文学部・助手	授業用の教材として利用するため	借用	鷹子・樽味・桑原西稲葉・文京遺跡出土の須恵器
	11月14日	(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター・職員	研究のため	文献複写	埋蔵文化財調査室所蔵の調査報告書
	11月21日	法文学部・教授	研究のため	借用	文京遺跡出土の弥生時代の遺物(計９点)
	11月26日	(財)古代学協会・助手	研究のため	データ提供	文京遺跡20次調査出土の弥生時代の石器製作関連資料
	11月28日	鹿児島県知覧町ミュージアム知覧・学芸員	研究のため	文献複写	埋蔵文化財調査室所蔵の調査報告書

年	月　日	利　用　者	目　　的	利用内容	利　用　資　料
2005年	12月８日	今治市教育委員会・職員	研究のため	文献複写	埋蔵文化財調査室所蔵の文化財関連文献
	12月14日	四国中央市教育委員会・職員	施設見学	見学	
	12月15日	徳島大学総合科学部・助教授	研究のため	文献複写	埋蔵文化財調査室所蔵の報告書
	12月19日	法文学部・大学院生	施設見学	見学	
	12月21日	(財)松山市生涯学習振興財団・松山市考古館・学芸員	展示会の資料借用のための準備	熟覧	文京遺跡27次調査出土の縄文土器
	12月27日	愛光学園・教諭	研究のため	実測・写真撮影	文京遺跡13・20次調査出土の鉄器
2006年	１月４日	今治市教育委員会・職員	研究のため	文献検索	埋蔵文化財調査室所蔵の報告書
	１月11日	一般（松山市在住）	施設見学	見学	
	１月13日	法文学部・助教授	授業用の教材に利用するため	借用	文京遺跡10次調査出土弥生土器８点
	１月13日	法文学部・学生（７名）	施設見学	見学	
	１月21日	愛媛県松野町教育委員会・職員	研究のため	文献検索	埋蔵文化財調査室所蔵の雑誌
	１月24日	愛媛県教育委員会	報告書データベース作成のため	埋蔵文化財データ照会	埋蔵文化財調査室の刊行している調査報告書
	１月25日	法文学部・大学院生	研究のため	文献検索	埋蔵文化財調査室所蔵の報告書
	１月25日	宮内庁書陵部・職員	研究のため	データ提供	文京遺跡の弥生時代調査成果データ
	１月30日	大分県教育庁・埋蔵文化財センター・職員	研究のため	データ提供	文京遺跡の弥生時代調査成果データ
	２月２日	奈良県立橿原考古学研究所・研究員	研究のため	データ提供	文京遺跡出土の弥生時代石器製作関連資料
	２月６日	法文学部・学生	論文作成のため	文献複写	埋蔵文化財調査室収蔵雑誌
	２月９日	放送大学愛媛学習センター・学生	放送大学レポート作成のため	文献複写	文京遺跡シンポジウム資料集
	２月10日	総合情報メディアセンター・助教授	新聞掲載のため	データ画像の転載	文京遺跡 WEB 用の画像データ
	２月12日	宮崎大学農学部・助教授	研究のため	写真撮影・試料提供	文京遺跡11・21次調査出土の縄文土器、土壌サンプル
	２月14日	法文学部・学部生	卒業研究のため	実測	埋蔵文化財調査室保管の須恵器
	２月27日	大阪府教育委員会・職員	研究のため	閲覧	文京遺跡の弥生時代調査データ
	２月28日	法文学部・学部生(２名)	研究のため	図書閲覧	文京遺跡の既往調査の調査報告書
	３月15日	(財)大阪府文化財センター・職員	研究のための資料調査	熟覧・写真撮影	文京遺跡出土の土器焼成失敗品
	３月16日	一般（松山市在住）	施設見学	見学	
	３月17日	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター・助手	研究のための資料調査	実測・写真撮影	文京遺跡出土の分銅形土製品
	３月17日	一般（松山市在住）	施設見学	見学	
	３月20日	一般（松山市在住）	施設見学	見学	
	３月22日	一般（松山市在住）	施設見学	見学	
	３月27日	奈良市立飛鳥中学校・教諭	研究のための資料調査	熟覧	文京遺跡18次調査出土遺物

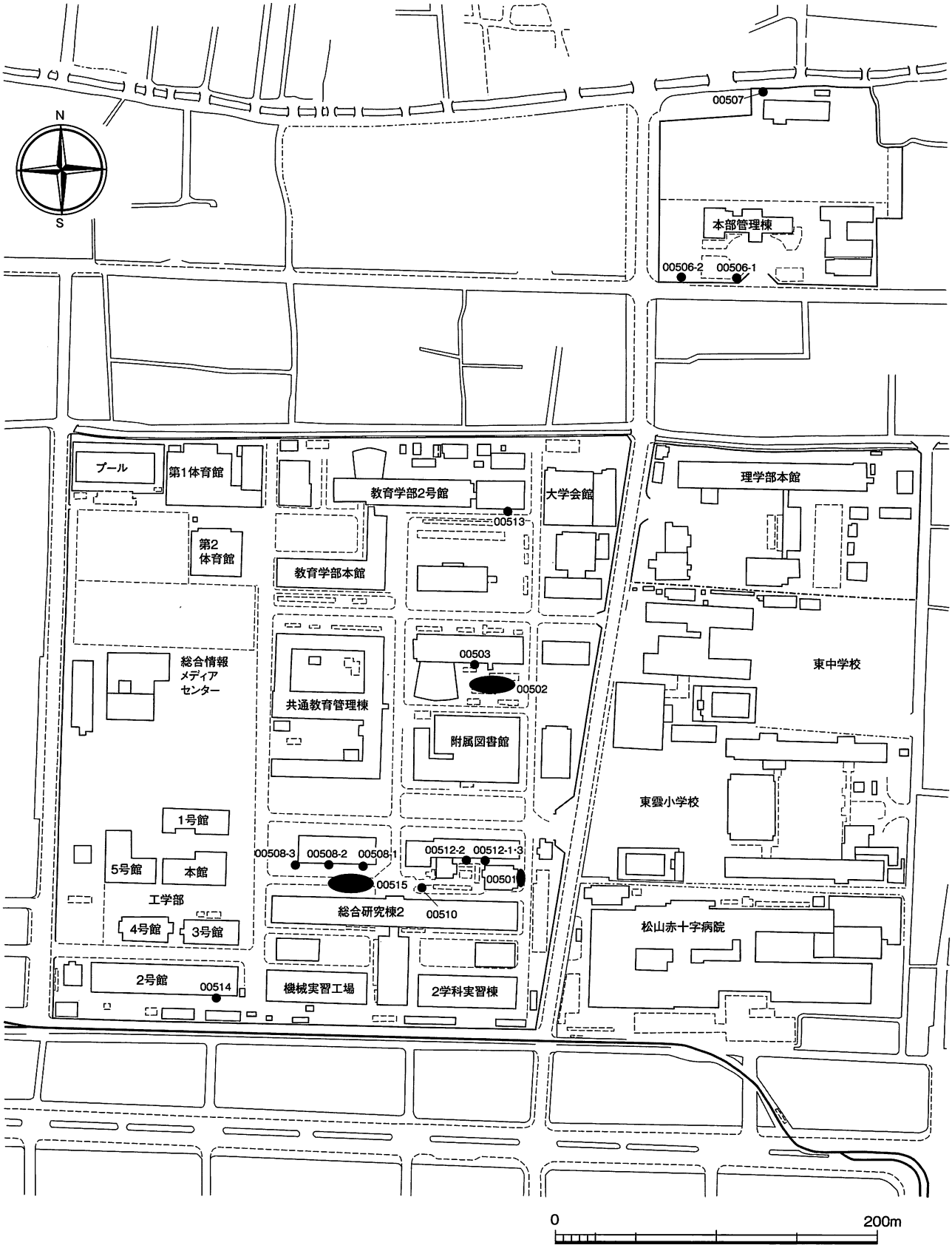


図1　城北団地における2005年度調査地点位置図（縮尺1/3,500）

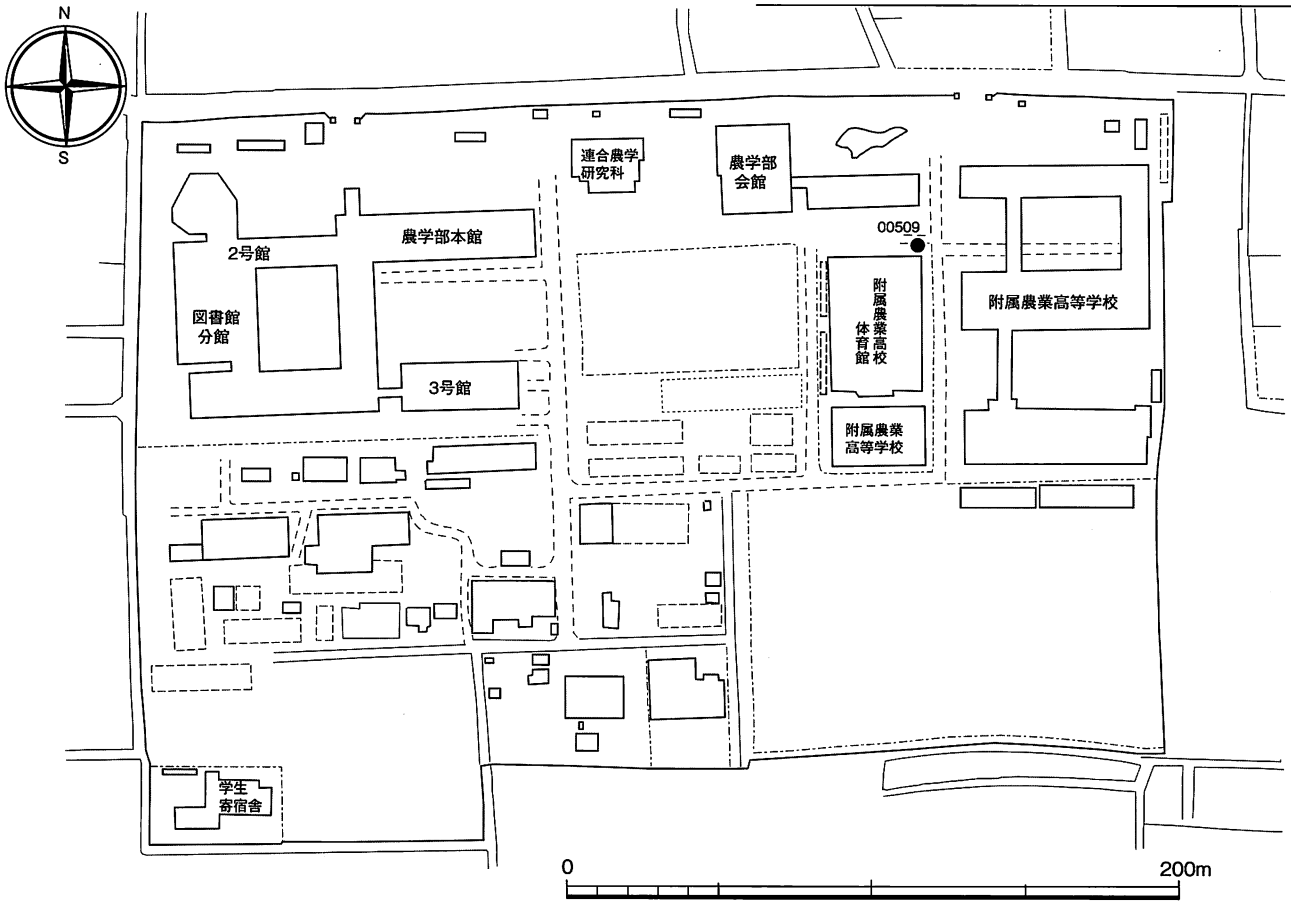


図２　樽味団地における 2005 年度調査地点位置図（縮尺 1/2,500）

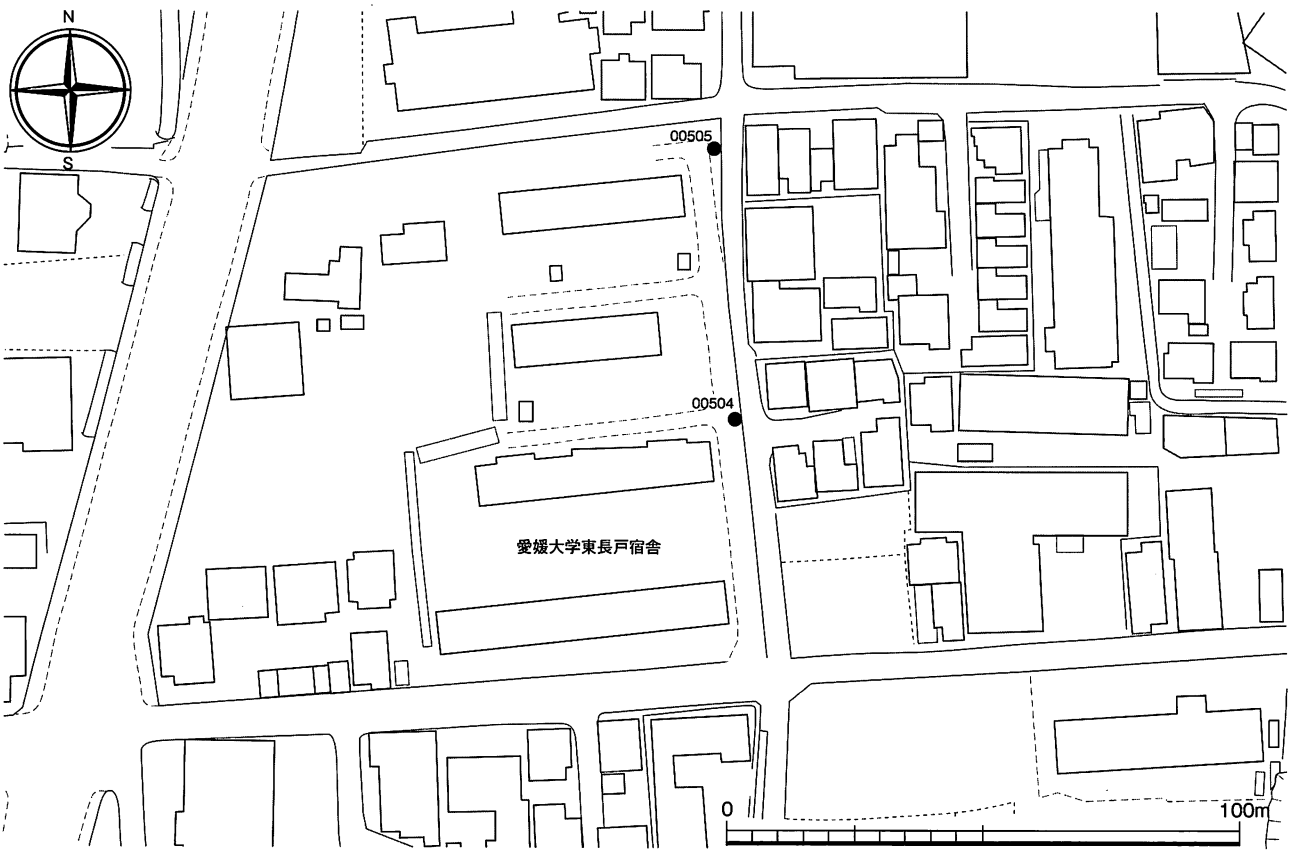


図３　東長戸団地における 2005 年度調査地点位置図（縮尺 1/1,500）

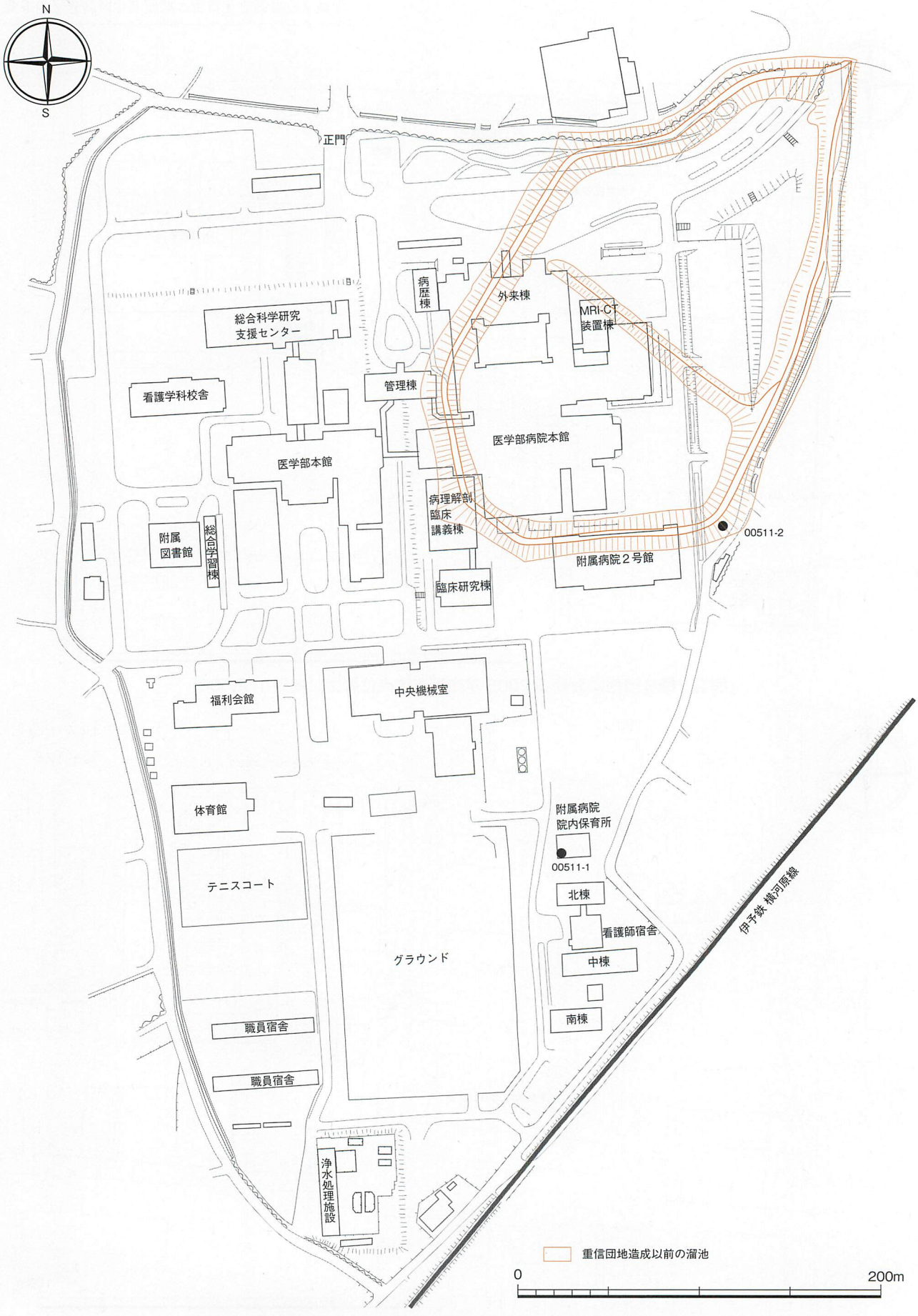


図４　重信団地における2005年度調査地点位置図（縮尺1/3,000）

Ⅱ　2005年度実施の発掘調査

2005年度には、工事によって埋蔵文化財に影響が及ぶと判断した15件の発掘調査を実施した。団地別には、城北団地11件、樽味団地１件、重信団地１件、東長戸団地２件である（図１～４）。

この中で、00502～00515調査は、営繕工事や小規模な改修工事に伴う調査である。ところが、00501調査では、調査を始めると、弥生時代～古墳時代の遺構と遺物を包含する城北団地全域での基本層序Ⅲ層がかなり浅い深度であらわれ、工事でⅢ層が削られることが判明した。そこで、急遽、調査計画を変更し、工事対象地域の全域を調査することとなった。

また、城北団地で実施した00508・00510・00512・00515調査は、法文学部周辺の環境整備に伴う調査である。法文学部周辺は、法文学部本館西側にグリーンゾーンが設定されるなど、文京遺跡の中においても、特に濃密に埋蔵文化財の存在する地区である。そのため、計画当初から施設基盤部と協議を行い、各工事内容（地点・深度）について埋蔵文化財へ影響が及ばないよう工法の調整を行った。その結果、掘削工事12件中、９件は埋蔵文化財に影響の及ばない位置あるいは深度に工事計画を変更できた。以外の工事については、必要に応じて試掘調査や立会調査を実施した。

00501　（城北団地）生物環境試料バンク改修工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　78.5㎡
調 査 期 間　2005年６月21日～７月７日
調査の種別　事前調査
調 査 担 当　田崎博之・三吉秀充
依 頼 文 書　施設基盤部施設整備課長発事務連絡
　　（平成17年６月９日）

１　調査にいたる経緯

2005年３月16日、施設基盤部施設整備課から埋蔵文化財調査室に、城北団地の旧総合情報処理センターを生物環境試料バンクに改修する工事計画について報告があった。施設基盤部とともに、できるだけ埋蔵文化財に影響が及ばないように協議を進め、

①雨水管路の工事と樹木の抜根に際しては発掘調査が必要であること
②大型機械設備のための基礎設置工事範囲については、弥生時代～古墳時代の遺構と遺物を包含する城北団地の基本層序Ⅲ層までが浅く、工事計画の詳細を提示すること
③再度の協議を行うこと

を確認した。

工事の最終的な計画の決定後、５月24日に、再度の協議を行った。大型機械設備のための基礎設置工事範囲は全面的に地表下30cmまで掘削する計画が提示された。しかし、既往の調査成果から、地表下30cmまでの掘削計画ではⅢ層の一部を破壊する可能性がある。そこで、６月３日に再度の協議を行い、大型機械設備のための基礎設置工事範囲は、全域で造成土層を掘り下げ、土層の堆積状況を把握した上で、工事に対応すること、６月21日から10日間の発掘調査を実施することを確認した。

６月21日から発掘調査に着手したが、大型機械設備のための基礎設置工事範囲では、地表下30cmに満たない深度でⅢ層上面があらわれた。また、後述するように、Ⅳ層を切り込む土壙と考えられる縄文時代の遺構を建物余掘り壁面で確認できた。そこで、現地で施設整備課と協議を行い、工事対象範囲の全域でⅢ層を発掘調査し、Ⅳ層については盛土を行うことで保存することとした。

２　調査の記録（表６、図５～９、写真３～10）

今回の調査地点である旧情報処理センターは、城北

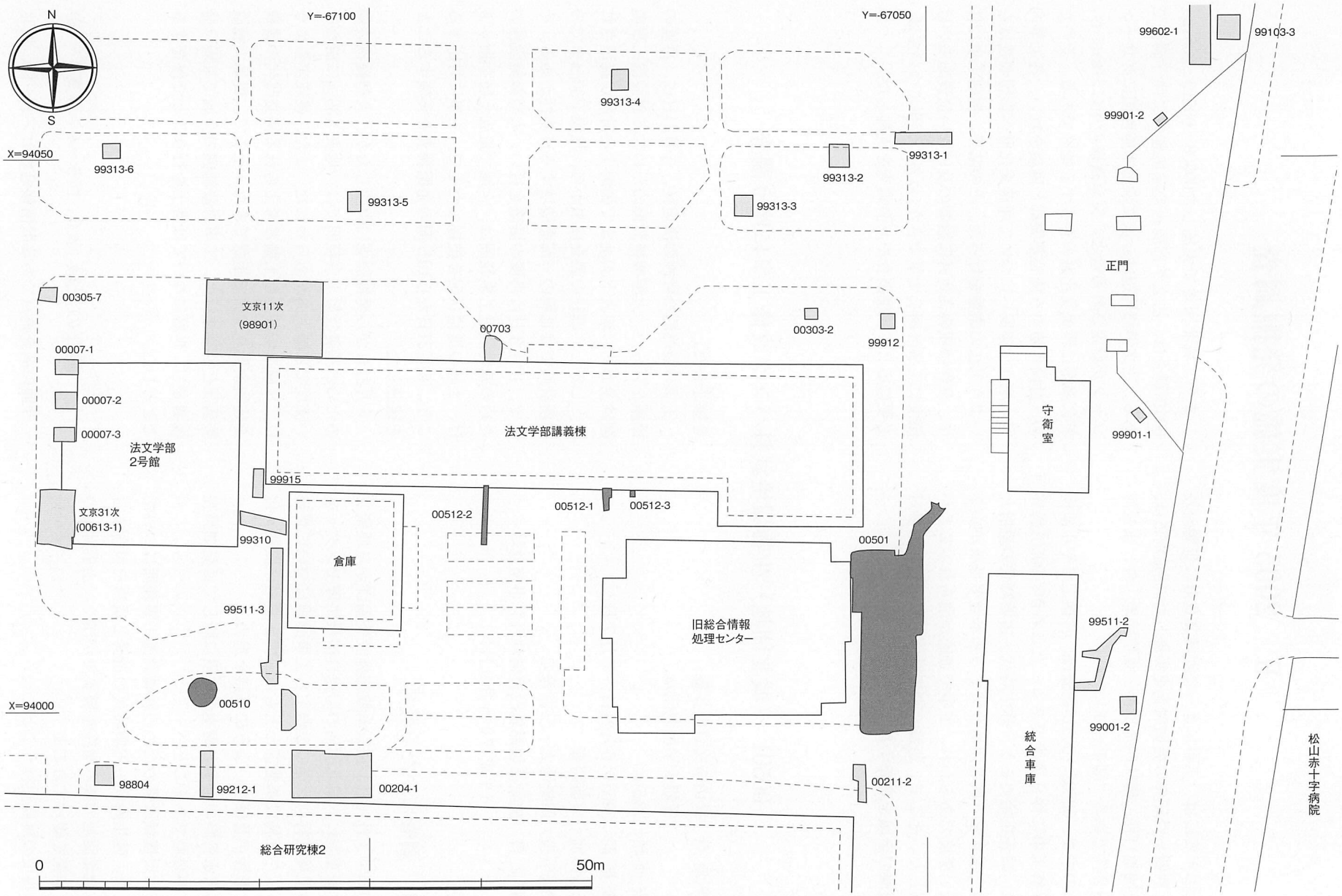


図5　00501・00510・00512調査地点位置図（縮尺1/500）

団地の南東部、法文学部講義棟南東側に位置する（図５）。周辺の既往調査は、ごく小規模な試掘・立会調査ばかりであるが、比較的良好な状態でⅢ層が遺存していることが把握されていた。今回の調査では、前述したように、結果的に雨水管路を含めて旧情報処理センター建物東側の大型機械設備の基礎部分の全域を調査することとなった。

(1) 層序（図６・９、写真10）

調査にあたっては、まず重機で造成土層を除去するとともに、旧情報処理センター建物の余掘り範囲を確認し、その壁面で以下のⅠ～Ⅳ層の堆積状況を観察した（図６）。

Ⅰ層は造成土層。

Ⅱ層は、城北団地全域の基本層序Ⅱ層に対応する城北団地造成前の近世～近代の水田層である。その下層では、Ⅲ層との間に砂礫層が調査区全面にひろがる。砂礫層はラミナが発達し、北東から南西に向かって流れた洪水堆積物である。そこで、水田層をⅡ-１層、下層の砂礫層をⅡ-２層とした。このⅡ-２層とⅢ層の層界部から、中世以降の土師器Ⅲの破片が１点出土している。したがって、Ⅱ-２層の堆積時期は中世以降と考えられる。

Ⅲ層は、城北団地全域の基本層序Ⅲ層に対応する弥生時代～古墳時代の遺構と遺物の包含層である。今回の調査地点のⅢ層は、砂礫混じりの暗褐色シルト土層で、Ⅲ-１・Ⅲ-２層に分層できる。Ⅲ-１層はⅢ層でも上半部にあたり、土壌化がかなり進み、攪拌されている。Ⅲ層の下半部がⅢ-２層で、部分的にシルトや微細砂のラミナ層がみられる。周囲の相対的に高い地点から流れ込む雨水によって堆積した土層と考えられる。Ⅲ-１・Ⅲ-２層の層界は漸移的で、Ⅲ-１層はⅢ-２層が土壌化し、攪拌をうけた上層と考えられる。Ⅲ層からは、遺物が調査区全域で散漫に出土している。古墳後期の須恵器坏や、弥生中期後葉～後期の壺や甕の破片がある。しかし、いずれも小片化・細片化しており、表面の摩滅も著しい。

Ⅳ層は、城北団地全域の基本層序Ⅳ層に対応する縄文時代の遺構と遺物の包含層である。調査区西半部の旧情報処理センター建物の余掘り壁面で堆積状況を確認した。Ⅳ-１～Ⅳ-７層で構成される。

Ⅳ-１層は、Ⅲ層との漸移層である。暗褐色の部分的に土壌化した砂質土層である。余掘り壁面のⅣ-１層中位で土器片が出土した。しかし、弥生土器であり、生物擾乱等でⅣ-１層に混じり込んだ遺物である。

Ⅳ-２層は、余掘り壁の南半部で確認した。にぶい黄褐色砂質シルトで、径0.5～１㎜の角礫が多く混じり、下部ほどその量が多い。南北幅約1.1ｍで、急角度に立ち上がる。下層のⅣ-３・４層を掘り込んだ遺構の埋土部分と考えた。Ⅳ-２層の南側下底面近くから、縄文後期と考えられる深鉢の胴部破片が出土した（写真10）。外面には幅５㎜の条痕が残り、内面は丁寧にナデ仕上げされている（図９-12）。

Ⅳ-３層は黄褐色粘質シルト層。調査区の中央部～北半部に広がり、北に向かって次第に厚くなる。Ⅳ-４層は、砂礫混じりの褐色粘質シルト層で、調査区全域に広がるが、北半部がやや厚くなる。Ⅳ-５層は、暗褐色シルト質砂層で、径３～５㎜の亜角礫が多く混じる。Ⅳ-６層は褐色砂層で、径５㎜前後の円礫が多く混じる。調査区の中央と南端でブロック状にみられる。Ⅳ-７層は灰黄褐色砂層で、径３～10㎜の礫がまばらに混じる。調査区の南端で、北に向かって落ち込む。以上、Ⅳ-３～Ⅳ-７層は調査区の南から北に向かって堆積している。

(2) 出土遺構と遺物

調査区の南半部を中心として、竪穴式住居跡２棟（SC-33･41）、溝３条（SD-32･35･42）、土壙２基（SK-40･48）等が出土した（図６、表６）。ただし、８～10号遺構は欠番である。これらの遺構の埋土をみると、以下の３種に区分できる。

埋土ａ：灰白色砂礫を主体とする。

埋土ｂ：砂礫が多く混じる暗褐色シルトで、にぶい黄褐色シルト小塊が含まれる。

埋土ｃ：砂礫混じりの黒褐色シルトを主体とする。

埋土ａの遺構は、埋土ｂ・ｃの遺構を切り、質はⅡ-２層の砂礫層と共通する。Ⅱ-２層は中世以降に堆積した洪水層と考えられるので、埋土ａの遺構は中世以降に比定できる。埋土ｂ・ｃの遺構は、にぶい黄褐色シルト小塊が含まれるか否かでの区分である。出土遺物は弥生時代の遺物ばかりで、古墳後期の須恵器などは含まれない。弥生時代の遺構と考えられる。

１）竪穴式住居跡（図７・９）

調査区南端部で、SC-33・41の２棟の竪穴式住居跡が出土した。

SC-33　調査区南端部で出土した。Ⅲ層を掘り下げ

表６　00501 調査出土遺構一覧

遺構		調査区	遺構の特徴	埋土の特徴		出土遺物	時期
種別	番号						
SP	1	BZ-21	Ⅲ層上面で確認。余掘り部分で半分を欠く。	埋土ｃ	黒褐色砂質土で、径 0.5mm 前後の角礫が多く混じる。	埋土上部から弥生土器の胴部小片２点出土。	弥生
SP	2	BZ-21	Ⅲ層上面で確認。浅めの小穴。	埋土ａ	やや黄灰色みをおびた暗褐色砂質土で、砂礫が多く混じる。	埋土中から弥生土器の胴部細片３点出土。	中世以降
SP	3	BZ-20	Ⅲ層上面で確認。	埋土ｃ	暗褐色砂質シルトで、砂礫が非常に多く混じる。	埋土中から弥生土器の胴部小片６点出土。	弥生
SP	4	BY-20・21	Ⅲ層上面で確認。非常に浅くⅢ層上面の自然の窪み状。	埋土ａ	やや黄色みをおびた灰色粗砂で、暗褐色砂質土が混じる。	底面近くから弥生土器の胴部小片１点出土。	中世以降
SP	5	BY-21	非常に浅くⅢ層上面の自然の窪み状。	埋土ａ			中世以降
SP	6	BY-21	非常に浅くⅢ層上面の自然の窪み状。	埋土ａ	黄褐色シルトと暗褐色砂質土が混合する。粗砂・礫が多く混じる。		中世以降
SP	7	BY-21	非常に浅くⅢ層上面の自然の窪み状。	埋土ａ	灰色の粗砂に暗褐色シルトが少量混じる。	埋土中から弥生土器の胴部小片１点出土。	中世以降
8～10		欠番					
SP	11	BY-21	Ⅳ層上面で確認。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	12	BY-21		埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	13	BY-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	14	BY-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	15	BY-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	16	BY-21		埋土ｂ	暗褐色砂質シルト。砂礫が非常に多く混じる。にぶい黄褐色シルト塊あり。		弥生
SP	17	BY-21		埋土ｂ	暗褐色砂質シルト。砂礫が非常に多く混じる。にぶい黄褐色シルト塊あり。		弥生
SP	18	BY-21		埋土ｂ	暗褐色砂質シルト。砂礫が非常に多く混じる。にぶい黄褐色シルト塊あり。	埋土中から弥生土器の胴部小片が２点出土。	弥生
SP	19	BZ-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	20	BZ-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	21	BZ-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	22	BZ-21		埋土ｂ	暗褐色砂質シルト。砂礫が非常に多く混じる。にぶい黄褐色シルト塊あり。		弥生
SP	23	BZ-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	24	BZ-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	25	BZ-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	26	BZ-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	27	BZ-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	28	BZ-21	非常に浅く自然の窪みに近い。	埋土ａ	灰白色砂礫。		中世以降
SP	29	BZ-21		埋土ｂ	暗褐色砂質シルト。砂礫が非常に多く混じる。にぶい黄褐色シルト塊あり。		弥生
SP	30	BZ-21		埋土ｂ	暗褐色砂質シルト。砂礫が非常に多く混じる。にぶい黄褐色シルト塊あり。		弥生
SP	31	BZ-22		埋土ｂ	暗褐色砂質シルト。砂礫が非常に多く混じる。にぶい黄褐色シルト塊あり。		弥生
SD	32	BY-21、BZ-20・21	本文で報告。				中世以降
SC	33	BY・BZ-21	本文で報告。				弥生後期中葉～古墳前期
SP	34	BZ-21	SC-33 の上面で検出。	埋土ｂ	暗褐色砂質シルト。砂礫が非常に多く混じる。にぶい黄褐色シルト塊あり。		弥生
SD	35	BY・BZ-21	本文で報告。				弥生後期前葉
SP	36	BY-21	立柱痕跡あり。	埋土ｃ	砂礫が多く混じる暗褐色シルトで、にぶい黄褐色シルト小塊が含まれる。		弥生
SP	37	BY-21		埋土ｃ	砂礫が多く混じる暗褐色シルトで、にぶい黄褐色シルト小塊が含まれる。		弥生
SP	38	BZ-22		埋土ｃ	少量の砂礫が混じる黒褐色シルト。		弥生
SP	39	BY-21	SC-33 に切られる。	埋土ｂ	暗褐色シルトで、黄褐色シルト小塊が多く混じる。	埋土中から弥生土器の胴部小片が１点出土。	弥生
SK	40	BZ-21	SC-33 に伴う土壙。本文で報告。				弥生後期中葉～古墳前期
SC	41	BZ-20	本文で報告。				弥生中期後葉
SD	42	BY-20・21、BZ-20	本文で報告。				弥生中期後葉
SP	43	BZ-23	Ⅳ層上面で確認。	埋土ｂ	暗褐色シルトで、にぶい黄褐色シルト小塊が点々と混じる。砂礫を少量含む。		弥生
SP	44	BZ-21	SC-33 床面で検出。SC-33 の柱穴か。後世の小穴に切られる。	埋土ｂ	砂礫混じり暗褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトの小塊が混じる。		弥生後期中葉～古墳前期
SP	45	BY-23	Ⅳ層上面で確認。	埋土ｃ	砂礫混じりの黒褐色シルト。		弥生
SP	46	BY-23	Ⅳ層上面で確認。	埋土ｂ	少量の砂礫が混じる暗褐色シルト。にぶい黄褐色シルト小塊が多く混じる。		弥生
SP	47	BY-23	Ⅳ層上面で確認。	埋土ｂ	少量の砂礫が混じる暗褐色シルト。にぶい黄褐色シルト小塊が多く混じる。		弥生
SD	48	BZ-21	本文で報告。				弥生
SP	49	BY-21	SC-33 を切る。	埋土ａ	灰褐色砂質土。		中世以降

図６　00501調査遺構配置および土層断面図（縮尺1/50）

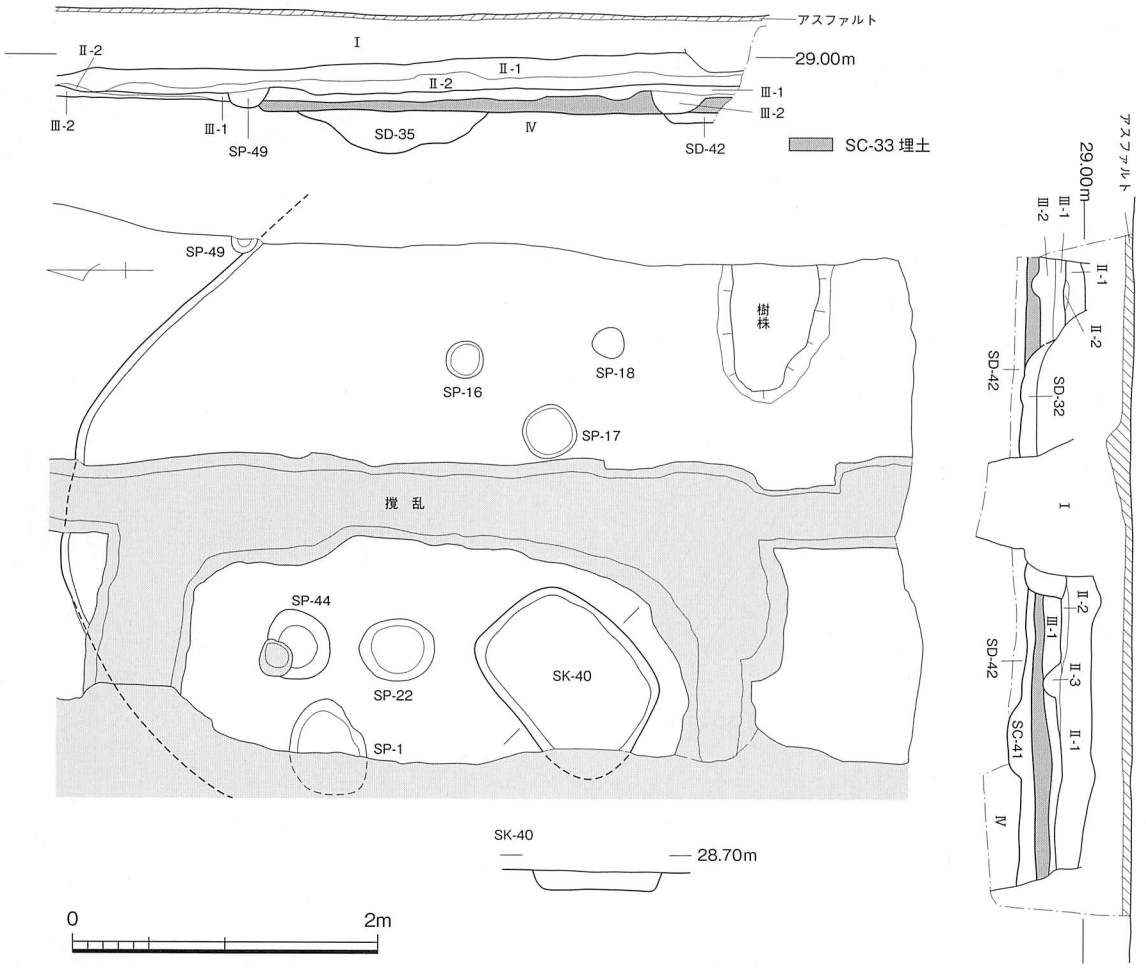


図７　00501調査 SC-33遺構実測図（縮尺1/50）

ると、Ⅳ層を掘り込む、緩やかにカーブする掘り形を確認できた。掘り形内部の底面はほぼ平坦であり、隅丸方形の住居跡と考えた。調査区内で南側の掘り形を確認できなかったので、一辺５ｍほどの規模が推定される（図７）。SD-35・42を切る。埋土は暗褐色砂質シルトに砂礫が非常に多く混じり、どの部分も均一である。後述するように、SK-40はSC-33に伴う土壙と考えられ、床面で確認できた小穴の中で、位置関係からSP-44が柱穴である可能性が考えられる。

埋土中や床面近くから散漫に遺物が出土している。弥生中期後葉の甕（図９-１）や壺の口縁部破片、弥生後期前葉の甕の口縁部破片、弥生土器の胴部小片、脚付き鉢と考えられる破片（図９-２）、サヌカイト石片などがある。図９-１は、口縁部が「く」字形に屈曲する口縁部の小片である。口縁屈曲部には刷毛目調整が残り、煤が付着する。２の脚部内面には指頭痕が不明瞭ながら残る。身部の内面は丁寧なナデ仕上げ。外面は荒れが進み、調整不明。

以上、SC-33からは、弥生時代の遺物ばかりが出土している。しかし、これまで文京遺跡で出土した弥生中期～後期前葉の竪穴式住居跡には、一辺５ｍほどの隅丸方形の住居跡はない。弥生後期前葉に比定できるSD-35を切っていることから、弥生後期中葉～古墳前期の時間幅で、SC-33の時期を考えておく。

SC-41　SC-33を精査中に、調査区南端部の壁際がSC-33の床面よりも８㎝ほど低いことに気がついた。調査区南壁の土層を確認したところ、SC-33の埋土の下に砂礫が多く混じる暗褐色シルトを確認できた。にぶい黄褐色シルト小塊が混じる。この土層の底面はほぼ平坦であり、竪穴式住居跡の埋土部分と判断し、SC-41とした。しかし、既設管路による攪乱溝を挟んだ北側では、褐色砂質土層はみられず、東側も上層から掘り込まれたSD-32で破壊され、SC-41の形状や規模は不明である。

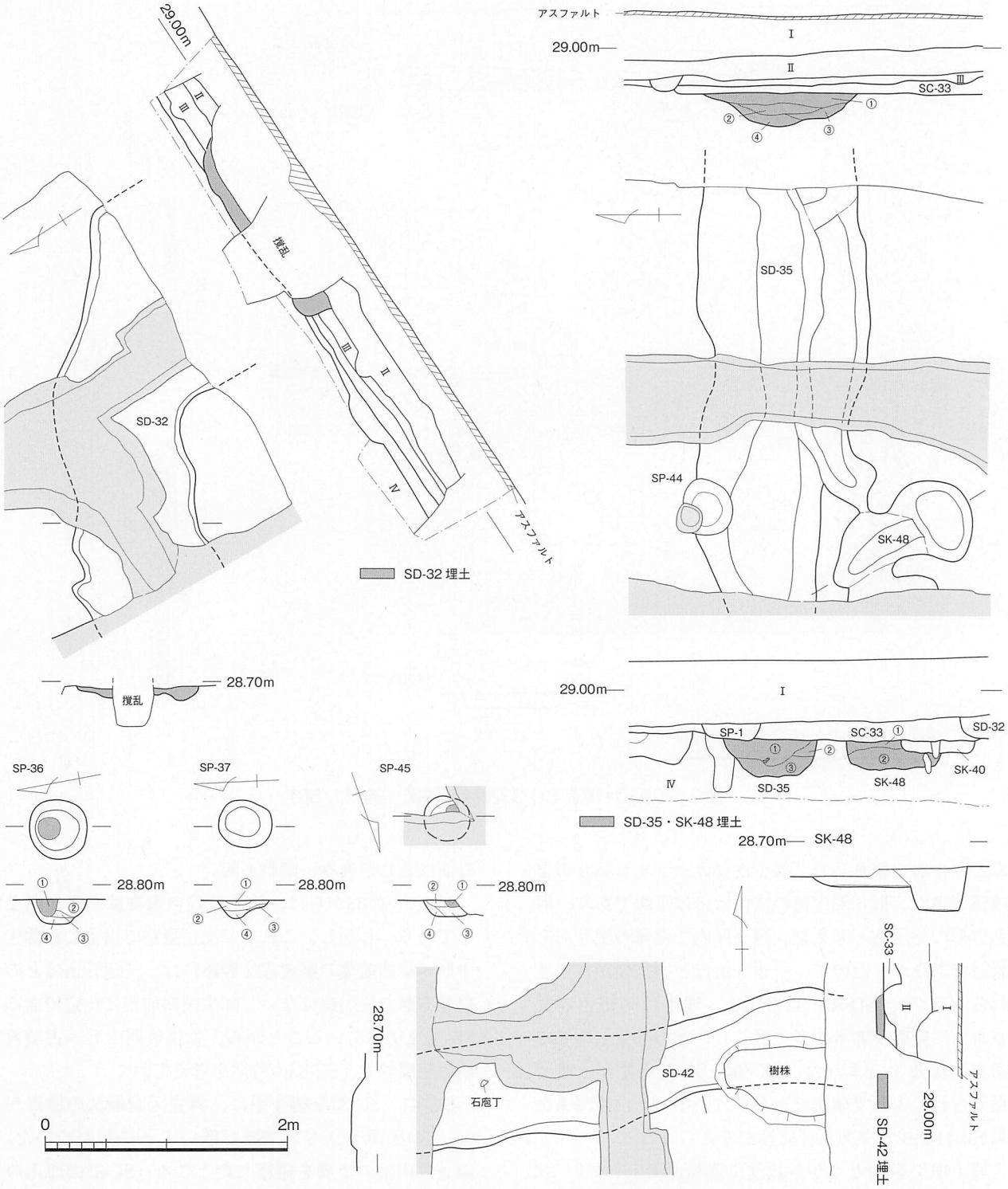


図８　00501調査 SD-32・35・42、SP-36・37・45遺構実測図（縮尺1/50）

SC-41の埋土部分と考えられる土層からは、弥生土器の胴部小片が出土。弥生中期後葉の壺の口頸破片（図9-3）がある。口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ、口縁端面に波板状の凹線文を３条巡らす。

以上の出土遺物と切り合い関係から、SC-41は弥生中期後葉の住居跡と考えておく。

2）溝（図８・９、写真８・９）

SD-32・35・42の３条の溝が出土した。いずれも調査区の南端に位置する（図８）。

SD-32　調査区南端で出土した南東から北西に向

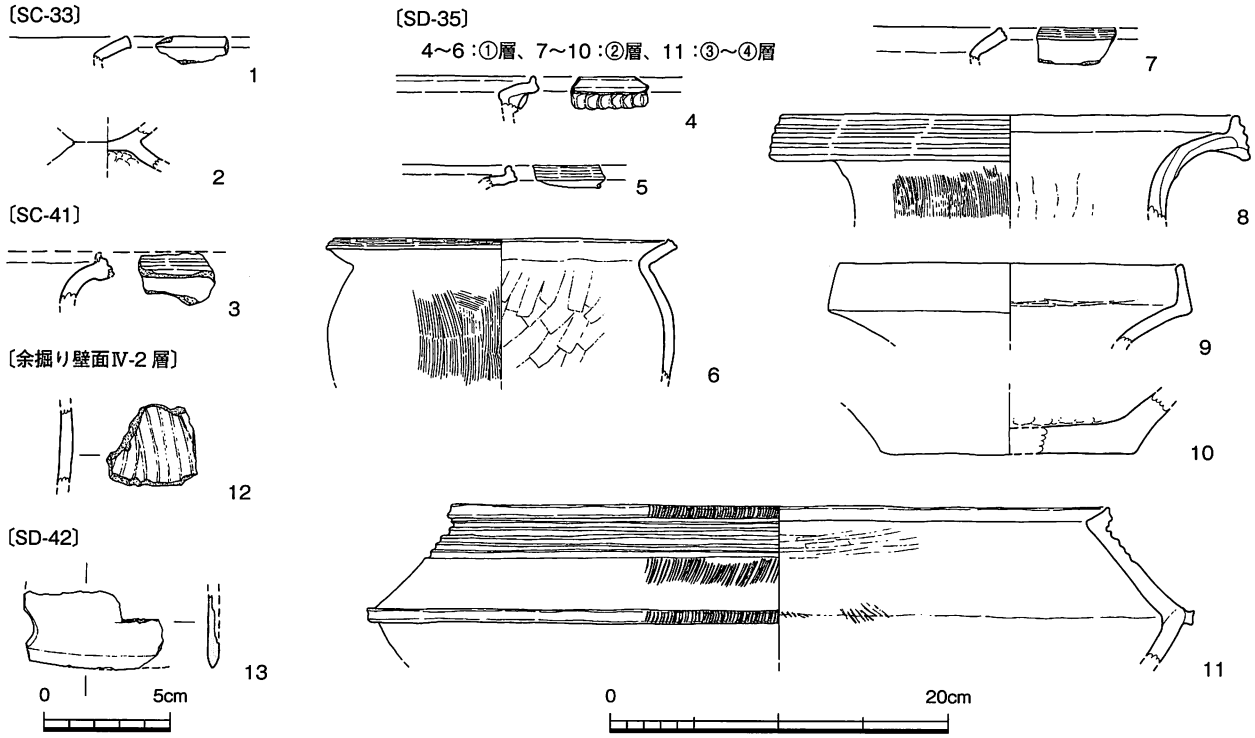


図９　00501調査出土遺物実測図（縮尺1～11：1/4、12・13：1/3）

かってのびる溝である。Ⅲ層上面で検出した。幅１～1.15m、検出面からの深さは５～10cmを測る。細かく蛇行し、溝底にはかなりの凹凸がある。埋土は、灰黄褐色の砂礫層で、粗砂・小礫が多く混じり、暗褐色砂質シルトやにぶい黄褐色シルトの親指先大の小塊が非常に多く含まれる。

SD-32では、埋土中から弥生土器の胴部小片が８点出土しているが、埋土はⅡ-２層と共通するので、中世以降の溝と考えた。

SD-35　調査区南端に位置する東西方向にのびる溝である。SC-33の床面で確認できた。SC-33に切られる溝である。幅1.2～1.37m、深さ27cm前後を測る。溝の南半部は低いテラス状となる。埋積状況を調査区東壁面で観察した。埋土は大きく上部と中～下部に区分できる。埋土上部である①層は、暗褐色シルト層で、部分的に粗砂・細砂の薄いラミナ層がみられる。中～下部は灰色系の砂礫層で、②～④層に分層できる。②層は小礫・粗砂のラミナが互層堆積する。③層は粗砂と細砂のラミナが互層堆積する。④層は小礫・粗砂のラミナが互層堆積する。②～④の埋積状況から、SD-35には旺盛な流水があったことが推定できる。

SD-35からは、比較的多くの遺物が出土している。埋土上部の①層から出土した遺物には、弥生中期後葉～後期前葉の壺や甕の小片、花崗岩の扁平な亜円礫を利用した砥石がある（図９-４～６）。４～６は甕。４は、口縁屈曲部に粘土を貼り付け、爪で刻目を密に施す。口縁端部を上方に摘み上げる。５は、口縁端部を上方に折り曲げ、端面に沈線状の凹線文を２条巡らす。６は、「く」字形口縁で、口縁端面に２条の擬似凹線文を巡らす。胴部の外面は刷毛目調整、内面はヘラ状工具でケズリに近い非常に強い掻き上げ調整を施す。４・５は弥生中期後葉、６は弥生後期初頭～後期前葉に比定できる。

埋土中～下部の②～④層の砂礫層からは、比較的大形の土器片が出土。壺や大型脚台付き鉢など、弥生中期後葉～後期前葉の遺物が出土している（図９-７～11）。７は、「く」字形口縁の甕。口縁端面に２条の擬似凹線文を巡らす。８は、口縁端部を拡張させ、端面に４条の波板状の凹線文を巡らす。口縁部周辺は横ナデし、頸部外面には刷毛目調整、内面には指頭圧痕が残る。９は、複合口縁の壺である。内外面ともにナデ仕上げ。複合口縁内面にはヘラ状工具で接合部を押さえ付けた痕跡が残る。10は壺の底部破片。11は、大型脚台付き鉢である。口縁下に先端が丸い棒状工具で沈

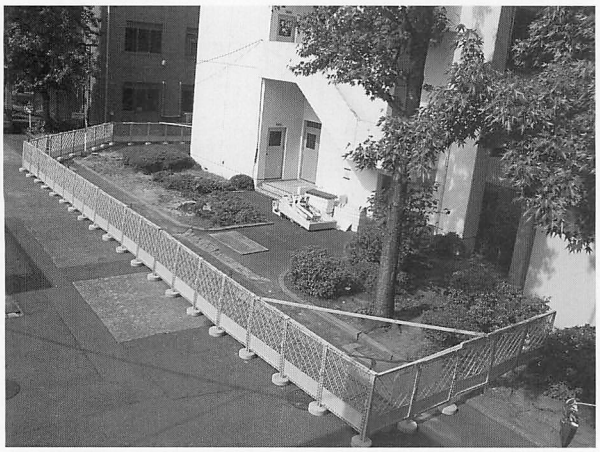


写真３　00501調査区全景（調査前、北東から）

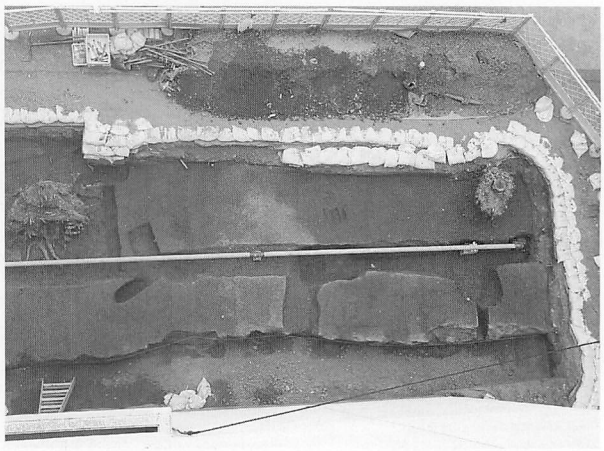


写真４　00501調査区中央～南半部のⅢ層上面検出状況（西から）

写真５　00501調査区南半部のⅣ層上面遺構検出状況（北から）

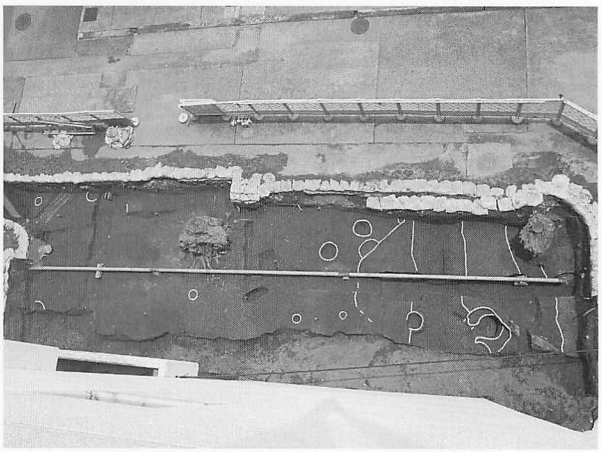


写真６　00501調査区中央～南半部完掘状況（西から）

線文を巡らし、その下方に短斜線文をヘラ状工具で施文する。また、口縁端面と体部中央屈曲部の突帯にもヘラ状工具で細い斜線文を施す。体部内面にはヘラ状工具によるナデ痕跡、屈曲部には刷毛目工具を押さえ付けた痕跡が部分的に残る。

以上の出土遺物から、SD-35は弥生後期前葉の溝と判断できる。

SD-42　SC-33床面で検出した溝である。SD-35とは、１～２ｍほどの間隔をあけて、ほぼ平行して東西にのびる。埋土は砂礫混じりの暗褐色砂質土である。調査区南壁の土層を観察すると、SD-42と同質の土層堆積がSC-41下層にみられる。SD-42の南肩は調査区外にあるものと判断した。溝幅は1.7ｍ以上となる。

SD-42の溝は、それほど深くなく、北肩沿いに一段深くなっている部分でも、深さ８～12㎝である。

埋土中からは、弥生土器の胴部小片３点、石庖丁破片１点（図９-13）が出土している。13は、両刃の磨製石庖丁。片岩製で、側部に抉りを入れている。SD-35とほぼ平行していることから、同時期の溝と考えた。

３）土壙（図８）

SK-40・48が出土した。このうち、SK-48はSD-35と一連の遺構で、SD-35に伴う給排水の施設と考えられる（図８）。

SK-40　調査区南端に位置する。SC-33床面で検出した。SD-35を切る。一部を建物建設時の余掘りで破壊されているが、長径1.2ｍ、短径0.88ｍ、深さ12㎝ほどの隅丸方形の土壙である。暗褐色の砂質土やシルト質土で埋まる。埋土中から弥生土器の胴部小片が７点出土した。SC-33の床面中央部のやや北西寄りに位置し、遺構の軸方向がSC-33とほぼ一致することから、SC-33に伴う土壙と考えた。

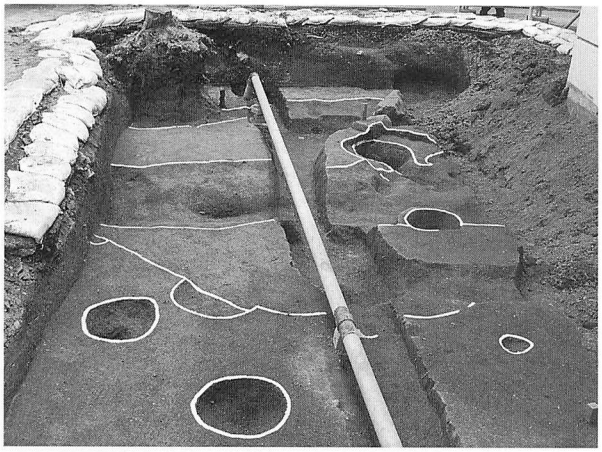


写真７　00501調査区南半部遺構完掘状況（北から）

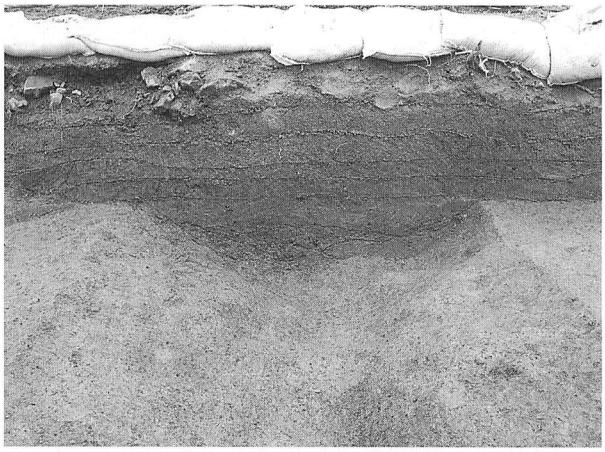


写真８　00501調査 SD-35土層断面（西から）

写真９　00501調査 SD-42土層断面・石庖丁出土状況

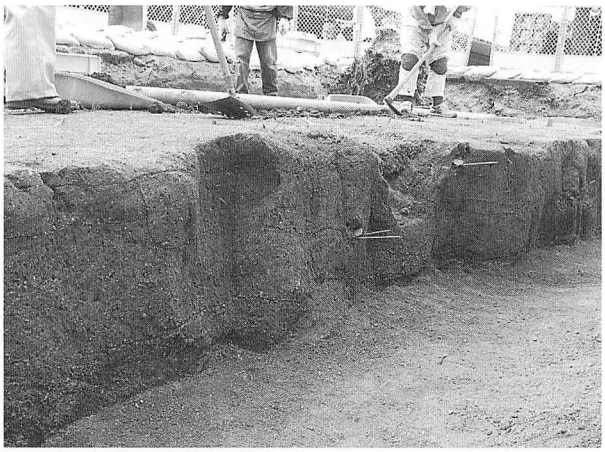


写真10　00501調査余掘り壁面のⅣ - ２層と縄文土器出土状況

SK-48　SD-35の南側に連結する不整形の土壙である。長径1.3mを測り、SD-35とつながる北半部は細長く深さ13cm、南半部は不整な楕円形で深さ36cmを測る。埋土上部は、目の細かい砂層、下部は粗砂・小礫が堆積し、いずれにも薄いラミナ層がみられる。埋積状況は、SD-35下部と共通するので、SD-35に伴う遺構と考えた。埋土下部の砂礫層から弥生土器の胴部小片が２点出土している。

４）その他（図８、表６）

以上の遺構に加えて、立柱痕跡をもつ柱穴などが出土している。調査区中央部のSP-36と、北部に位置するSP-45では、立柱痕跡を確認できた。しかし、これらと掘立柱建物や柵列などを構成する小穴は確認できていない。また、SP- ２・４～７・13～15は、Ⅲ層上面で検出した小穴であるが、非常に浅くⅢ層上面の自然の窪み状である可能性が高い。以外の小穴については、遺構一覧を参照されたい（表６）。

３　調査のまとめ

今回の調査では、調査区南半部で集中して弥生時代の竪穴式住居跡・溝などが出土した。とくに、最下層で確認できたSD-35では、旺盛な流水痕跡が確認できるとともに、SK-48を付属させている。時期的には弥生後期前葉に比定できる。しかし、こうした旺盛な流水痕跡を残す溝は、これまで文京遺跡で発見されている弥生中期後葉～後期の溝では特異である。SD-35・SK-48に平行してのびるSD-42も含めて、周辺に水田や畠が営まれていた可能性を考えておきたい。（田崎）

00502 （城北団地）基幹整備（舗装等）工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　38.6㎡
調 査 期 間　2005年８月24日～26日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　吉田広
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設基盤部施設整備課長発事務連絡
　　（平成17年７月７日）

1　調査にいたる経緯

今年度は、城北団地の基幹整備事業として、構内各所で駐輪場や休憩所などの整備が計画されている。その中で、まず、

①教育学部２・３号館と教育学部４号館の間の駐輪場

②附属図書館と共通教育講義棟の間の休息所

の整備計画が、埋蔵文化財調査室に提示された。施設基盤部と協議し、①については、掘削深度を浅くとることで、埋蔵文化財に影響が及ばないように工事計画を変更することとなった。一方、②については、周辺の既往調査（99405、00305-4･5）の成果から、現地表（道路舗装面）下90cm前後で、遺物包含層である城北団地基本層序のⅢ層、あるいは旧河川内の堆積層が現われることが考えられたので、１m前後の掘削を計画している４ヶ所について発掘調査を実施することとし、調査期間などの調整を進めた。

2　調査の記録（図10～13、写真11～18）

調査地点は、附属図書館と共通教育講義棟に挟まれた地点の計４ヶ所である。調査順に東側から１～４トレンチとした（図10、写真11・12）。１・３トレンチでは植栽に伴う150cm四方の深度100cmの掘削、２・４トレンチではシェルター基礎設置に伴う300cm四方の深度95cmの掘削が計画されている。

(1) １トレンチ（図11、写真13）

発掘調査を開始し、造成土のⅠ層を掘り下げていくと、トレンチ北半部で東西方向に走る管路があらわれた。施設基盤部と協議したところ、管路の一部については撤去できないことがわかり、工事計画範囲を南側にずらすこととなった。その結果、調査範囲は、北側を除いて、南北約２m、東西約4.5mの範囲となった。

表土層のⅠ層の下層、標高28.40m以下に、城北団地基本層序のⅡ層があらわれた。以下27.96mまで掘り下げたが、同様の土層が続く。このⅡ層は、Ⅱ-①～Ⅱ-⑥層に分層できる。Ⅱ-①層は黄褐色砂質土で、しまりはやや弱い。Ⅱ-②層は黄褐色砂質土。Ⅱ-③層は、にぶい黄褐色粘質土で、１㎜前後の砂粒を含み、粘性・しまりがあり、鉄分の沈着が著しい。ただし、トレンチ内でも北側に偏り、南壁西寄りではみられず、Ⅱ-④層上面に鉄分が沈着する。Ⅱ-④層は暗灰黄砂質土。Ⅱ-⑤層は、にぶい黄色粘質土で、粘性・しまりがある。Ⅱ-⑥層は暗灰黄色砂質土。

１トレンチでは、造成土のⅠ層に含まれる攪乱部から中世土師器細片・近現代陶磁器片が出土したにすぎない。Ⅱ層からの出土遺物はない。

(2) ２トレンチ（図11、写真14）

１トレンチの南西側に位置する。約３m四方の調査区である。造成土のⅠ層を除去すると、水田層のⅡ層があらわれ、標高28.15mまで続く。Ⅱ層では、１トレンチのⅡ-①～Ⅱ-④層と対応する土層を確認できた。ただし、Ⅱ-③層は部分的にしかひろがらない。

Ⅰ層の攪乱土中から、中世の土師器細片が出土したのみである。

(3) ３トレンチ（図11、写真15）

１トレンチの西側に位置する。南北約２m、東西約3.2mを測る調査区である。造成土のⅠ層を掘り下げると、建物のコンクリート基礎があらわれた。その下部では、標高28.00mまで水田層のⅡ層が続く。Ⅱ層では、１トレンチのⅡ-①・②・④・⑤層と対応する土層を確認できた。

３トレンチからの出土遺物はない。

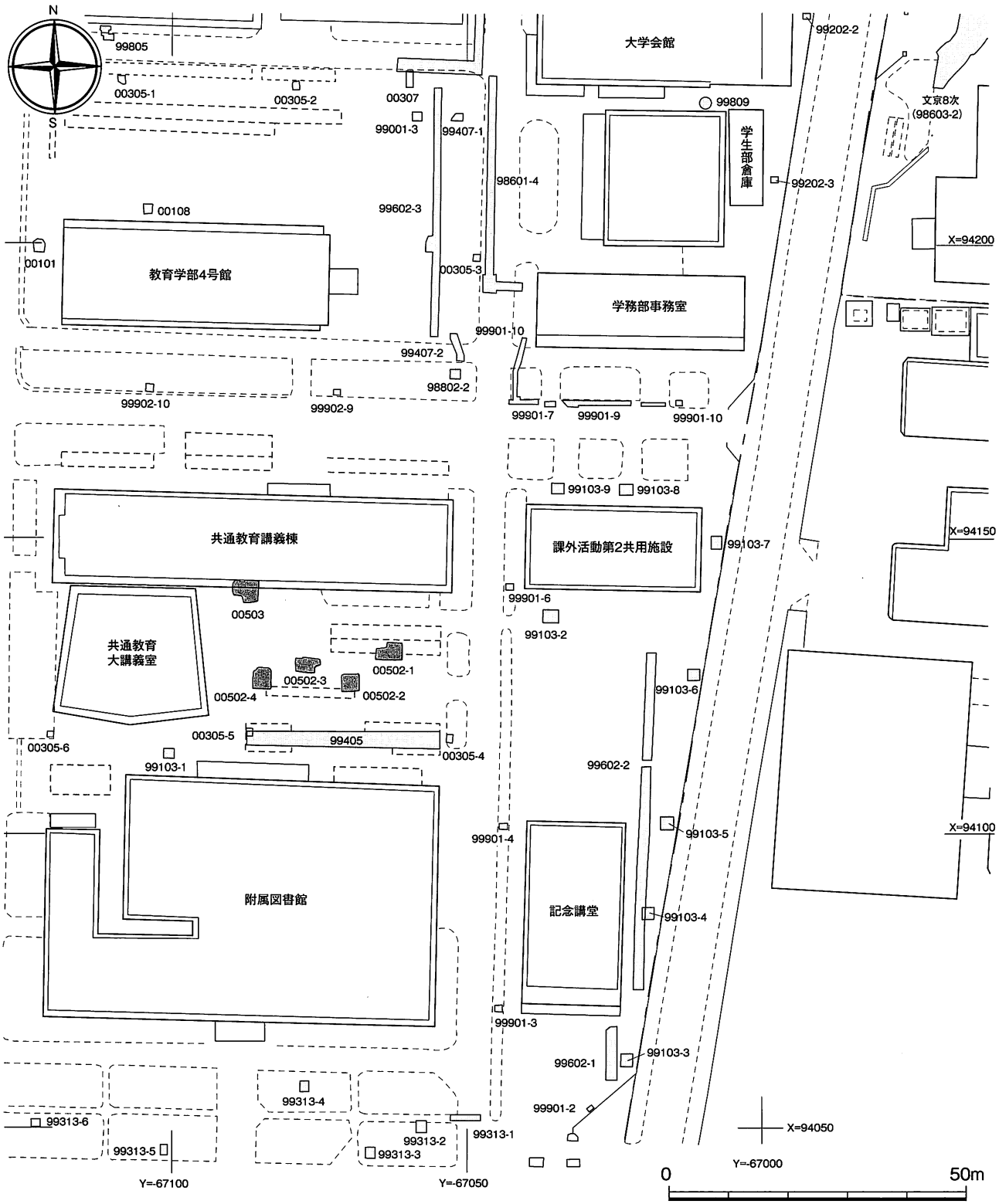


図10　00502・00503調査地点位置図（縮尺1/1,000）

(4) 4トレンチ（図11・12、写真16～18）

3トレンチの西側に位置する。北側がやや不整形な約3m四方の調査区である。トレンチ北半部では、3トレンチと同様に建物基礎があらわれた。厚さ50～80cmの造成土のⅠ層の下層は水田層となる。トレンチの西壁沿いに深掘り部分を帯状に設定して、より下層の堆積土層を確認した。

4トレンチでも、1トレンチのⅡ-①～Ⅱ-⑥層に

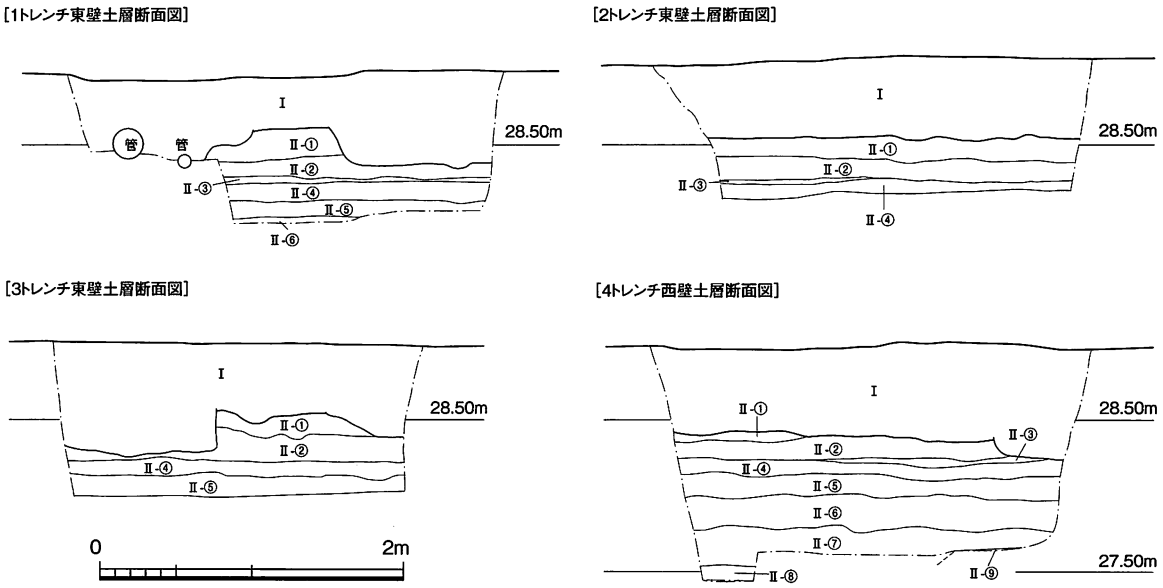


図11　00502調査１～４トレンチ土層断面図（縮尺1/50）

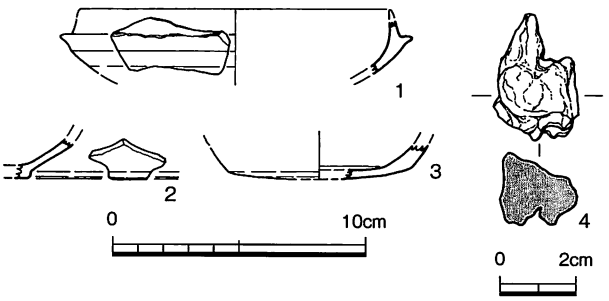


図12　00502調査出土遺物実測図（縮尺1/3、1/2）

対応する土層を確認できた。ただし、Ⅱ-③層は部分的にしか広がらない。Ⅱ-⑥層は、厚さ約20cmであることが把握できた。１トレンチで確認したⅡ-⑥層よりもしまりがある。また、上面に薄く鉄分が沈着するとともに、層中にも明確ではないが、鉄分の沈着が水平に幾筋か認められる。その下層は、厚さ15～25cmのⅡ-⑦層となる。暗灰黄色砂質土で、砂質が強い。Ⅱ-⑦層の下層では、Ⅱ-⑧層とⅡ-⑨層を部分的に確認できた。Ⅱ-⑧層は黄褐色砂質土で、砂質がやや強く、しまりはやや弱い。Ⅱ-⑨層は、2mm以下の砂粒からなる黄灰色砂層。部分的な嵌入の可能性もある。

４トレンチからは、Ⅱ層の時期を推定できる遺物が出土している（図12)。Ⅱ-④層の出土遺物には、中世土師器の細片と備前焼擂鉢の破片がある。Ⅱ-⑤層からは、古代から中世の土師器２点が出土し、うち１点が図12-３である。遺存状態は良くないが、底面に回転ヘラ切り離しの痕跡が認められる。図化できなかったもう１点は、回転糸切り離し痕をもつ底部小片である。また、Ⅱ-⑤～Ⅱ-⑦層の掘り下げ中に出土した遺物として、弥生土器・須恵器・土師器・土師質土器・鉄滓がある。しかし、いずれも小片や細片である。このうち、図12-１は須恵器で、古墳後期後半の坏身の受け部破片である。短い受部を辛うじて残し、口縁部を欠く。立ち上がりは比較的高いようで、底部回転ヘラケズリの範囲も広い。図12-４は鉄滓で、表面の凹凸や空隙はあまり顕著でない。現重量13.6ｇ。他に、造成土Ⅰ層の攪乱土層から、須恵器・土師器の細片が出土し、１点が図12-２である。須恵器坏で底部は台状である。古代以降に位置づけておきたい。

３　調査のまとめ

これまでの調査成果からは、城北団地の北半部では、東から西へ流れる自然流路が埋没して谷状の窪地が形成され、さらに埋積され比較的平坦な地形面が形成されていく過程が捉えられている。今回の調査地点は、その谷状の窪地の南側の肩部付近に位置する。調査では、城北団地基本層序のⅡ層にあたる水田層があらわれ、調査地点一帯は谷状の窪地内にあることを確認できた。しかも、Ⅱ層は厚く、水田層が累積している状況を確認できた。Ⅱ-①・Ⅱ-②層は、層序関係から、城北団地西半部の文京遺跡18次調査Ａ区のⅡ-１層に

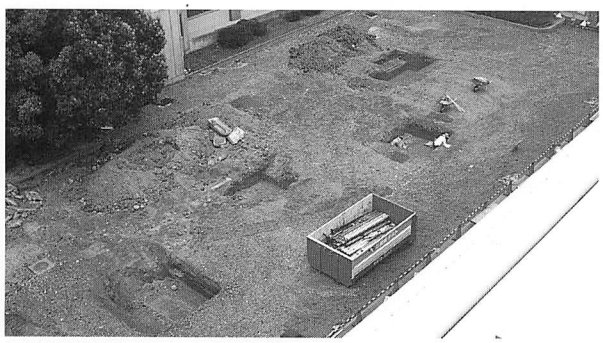


写真11　00502調査地点（南西から）

写真12　00502調査地点（西から）

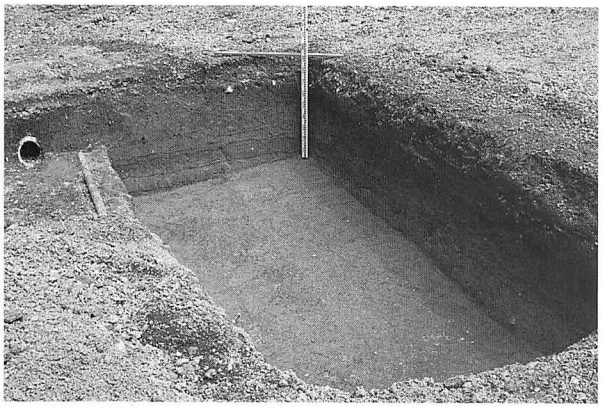


写真13　00502調査１トレンチ（北西から）

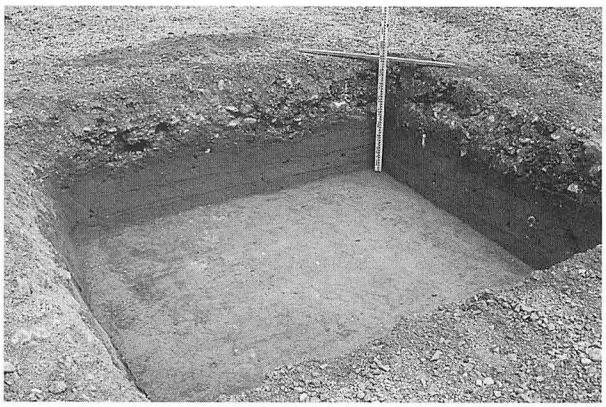


写真14　00502調査２トレンチ（北西から）

写真15　00502調査３トレンチ（北西から）

写真16　00502調査４トレンチ（北西から）

写真17　00502調査４トレンチ西壁断割土層（東から）

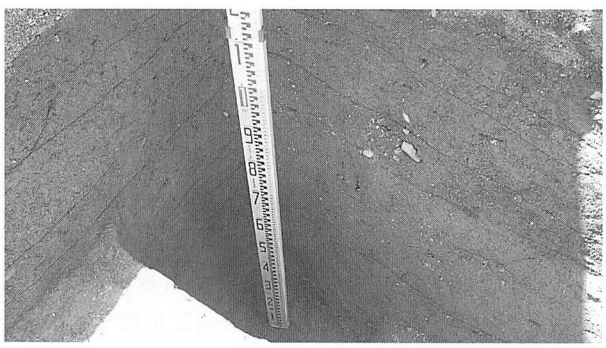


写真18　00502調査４トレンチ西壁南端断割土層（北東から）

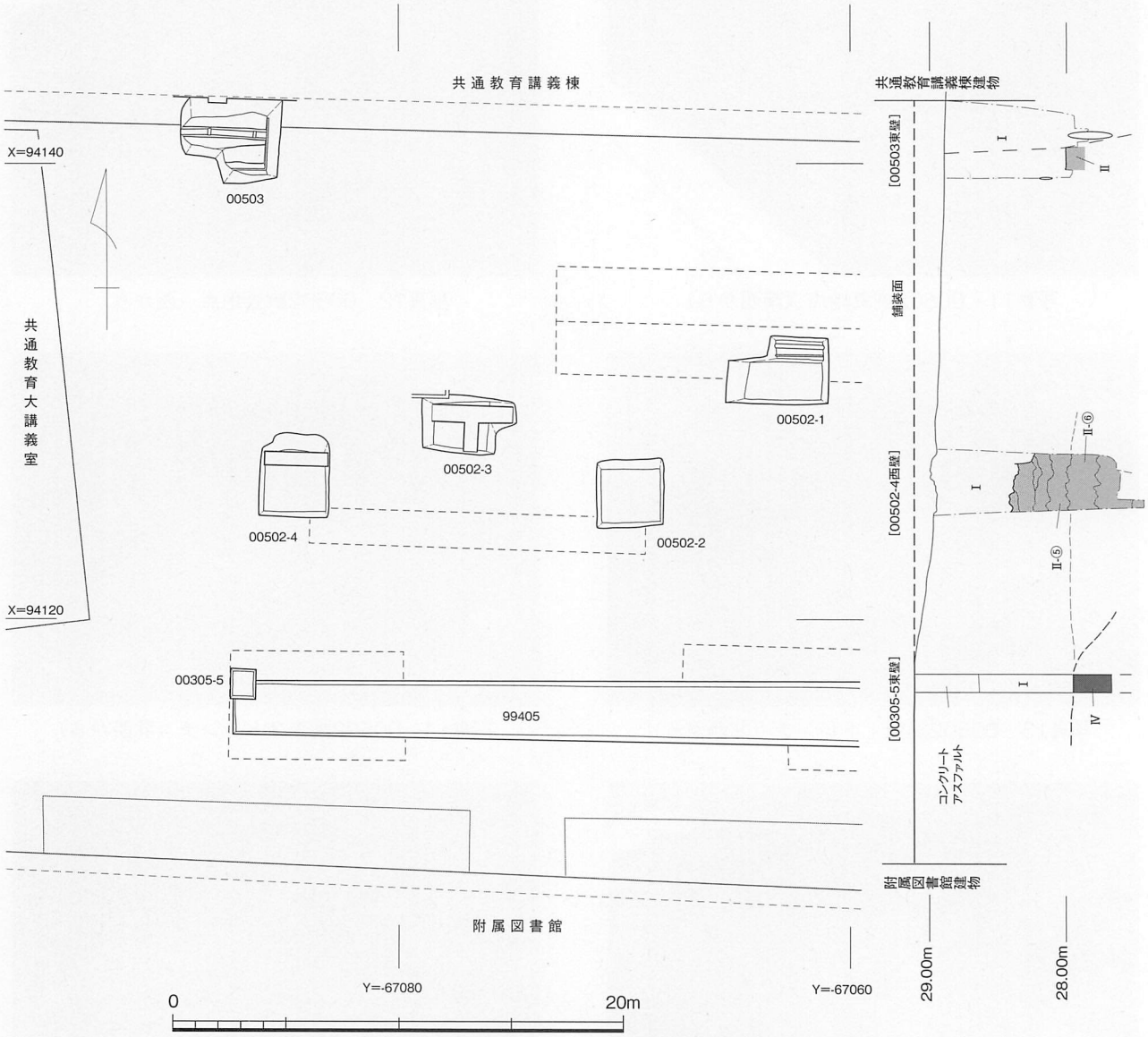


図13　00502･00503調査周辺のⅡ層の堆積状況（縮尺1/300、1/50）

対応し、近世～近代の水田層と考えられる。一方、Ⅱ-④層からは中世後半の備前焼が出土し、その上に部分的に堆積するⅡ-③層は中世後半以降に限定され、中世に遡る水田層である可能性を残す。Ⅱ-⑤層はシルト質が強く層厚がある。Ⅱ-⑥層も、砂質であるものの、しまりがある。そして、鉄分の沈着層が複数みられ、さらに細分できる可能性をもつ。Ⅱ-⑤層以下は、出土遺物も中世以前に限られるようで、Ⅱ-⑤・Ⅱ-⑥層は中世以前に遡る水田層である可能性が高い。とくに、４トレンチの南約８ｍに位置する00305調査５トレンチでは、Ⅱ-⑥層とほぼ同じ標高で、城北団地の基本層序Ⅳ層のにぶい黄褐色シルトが認められ、Ⅱ-⑥層は谷状の窪地内に営まれた水田層と考えられる（図13）。こうした水田が営まれた地形環境の点から言っても、とくにⅡ-⑥層は中世以前に遡る水田層である可能性が高い。

なお、Ⅱ-⑦層以下の土層は、Ⅱ層の中に含めて報告したが、いずれも砂質が強い。自然流路の最上層部分にあたる堆積物である可能性が高い。

以上、中世以前に遡る水田層としては、Ⅱ-⑤・Ⅱ-⑥層が考えられ、さらにⅡ-③・Ⅱ-④層も中世後半から近世の水田層である可能性を指摘できる。（吉田）

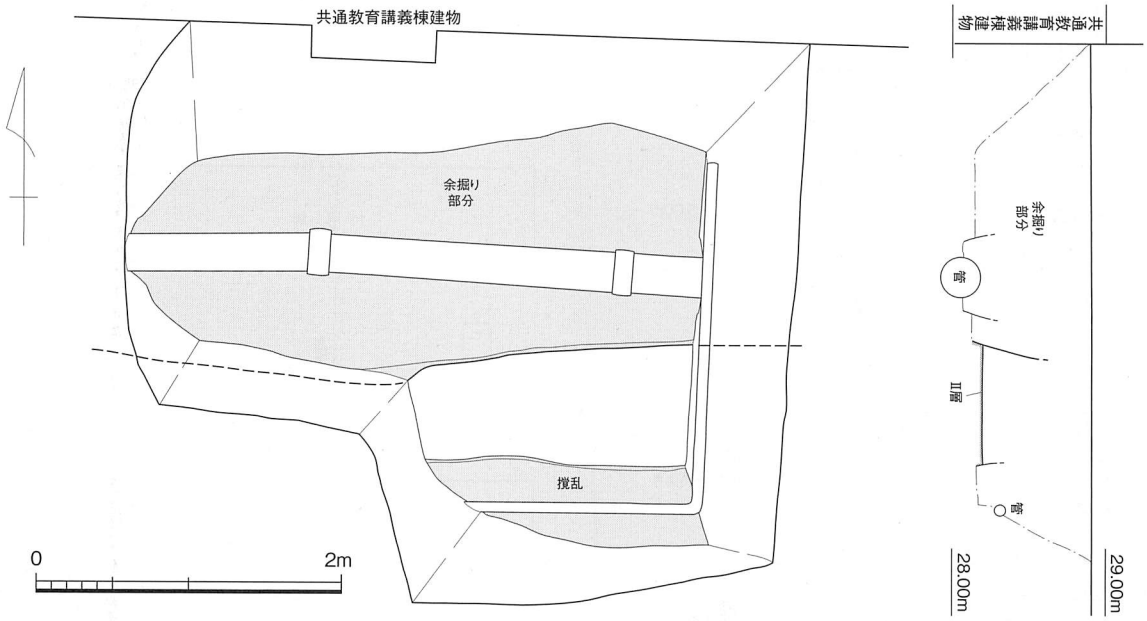


図14　00503調査トレンチおよび土層断面図（縮尺1/50）

写真19　00503調査地点遠景（南から）

写真20　00503調査完掘状況（北から）

00503　（城北団地）共通教育講義棟避雷設備設置に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　12.4㎡
調 査 期 間　2005年８月24日・25日
調査の種別　試掘調査
調 査 担 当　吉田広
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設基盤部施設整備課長発事務連絡
　　（平成17年８月23日）

1　調査にいたる経緯

城北団地の基幹整備事業の一環として、附属図書館と共通教育講義棟の間に休息所が設置されることとなり、立会調査（00502調査）を実施した。ところが、工事が着手され、舗装アスファルトを撤去する過程で、共通教育講義棟避雷設備が破損し、接地極を再埋設する必要が急遽生じた。

避雷設備の埋設工事では、地表下165cmまでの掘削が必要であり、当然、埋蔵文化財に影響が及ぶと判断された。そのため、施設基盤部と協議を行い、避雷

設備の埋設場所を共通教育講義棟建物余掘り範囲内に収めることで、埋蔵文化財の保護を図ることとし、余掘り範囲を確定するために試掘調査を実施することとした。

2　調査の記録

（図10・14、写真19・20）

調査地点は、共通教育講義棟南側のほぼ中央にあたる（図10、写真19）。

調査に着手し、造成土のⅠ層を掘り下げていく過程で、講義棟建物にほぼ平行して雨水管があらわれた（写真20）。この雨水管を検出した高さで精査したところ、管路の南側30cm前後の位置で、攪乱を被っていない城北団地基本層序のⅡ層を確認できた。そこで、調査区壁面を精査し、雨水管が講義棟建設時の余掘り範囲に埋設されていること、余掘り範囲は建物壁から２ｍ前後であることを確認できた（図14）。

また、Ⅱ層は幅70cm前後の帯状にあらわれ、それより南側は別の攪乱部分となっている。この攪乱部分は、かつて設置されていたポンプ室建設時のものと推測される。

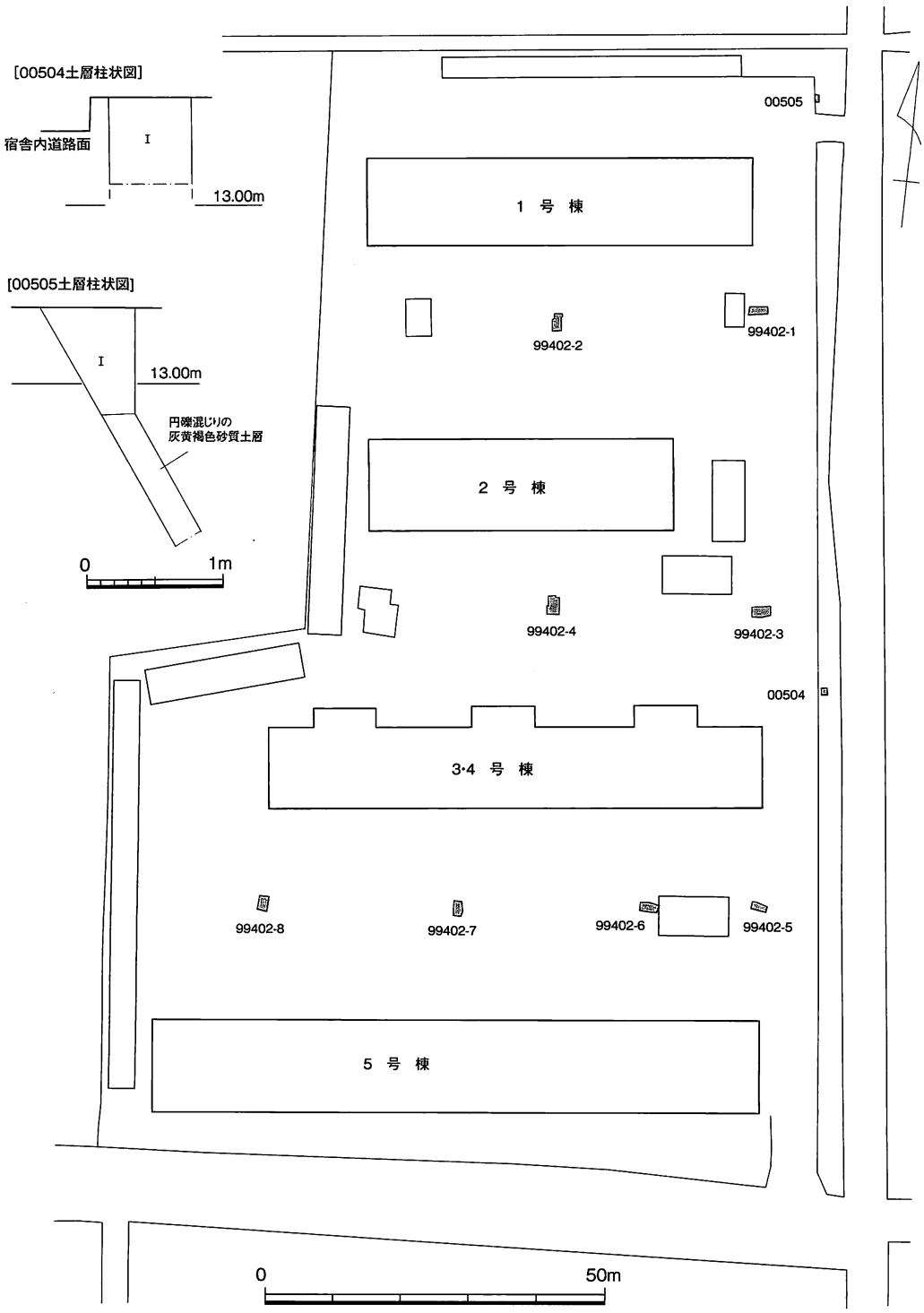


図15　00504･00505調査地点配置および土層柱状図（縮尺1/1,000、1/50）

3　調査後の対応

今回の調査では、共通教育講義棟の余掘り範囲が建物外壁から約２ｍであることが特定できた。この結果を現地で施設基盤部に伝え、避雷設備の埋設場所の変更が行われた。（吉田）

写真21　00504調査地点（北西から）

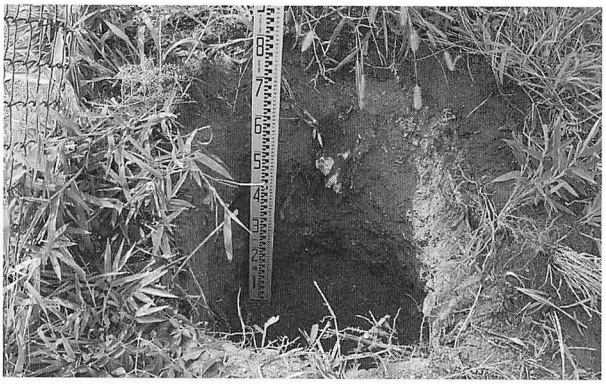


写真22　00504調査南壁土層（北から）

00504　（東長戸団地）東長戸宿舎内電柱改修工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市東長戸４丁目３番１号
　　愛媛大学東長戸団地
調 査 面 積　0.3㎡
調 査 期 間　2005年８月31日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　吉田広
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　財務部財務企画課長発事務連絡
　　（平成17年８月24日）

1　調査にいたる経緯

東長戸団地内の電柱について経年劣化があることが判明し、㈱四国電力から自社負担による改修工事が申請されてきた。工事では、現地表下約75㎝まで掘削を行い、設置棒を打ち込む。これまで東長戸団地内では、99402調査を実施し、団地北東側からのびる微高地上には遺物包含層、その南側には自然河川があることを確認できている。今回の工事地点は、団地東辺中央に位置し、遺物包含層あるいは自然河川に及ぶ可能性が考えられた。そこで、立会調査を実施することとした。

2　調査の記録（図15、写真21・22）

調査地点は、東長戸宿舎３号棟東側の植栽中である。植栽部は、西側の宿舎内舗装面より約25㎝高く、これから約65㎝の掘削を行った。掘削範囲内においては、造成土のⅠ層が続き、以外の土層は確認されなかった。

3　調査後の対応

調査位置・土層を記録して、以後の慎重工事を依頼し、調査を終えた。　（吉田）

00505　（東長戸団地）東長戸宿舎内電柱撤去工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市東長戸４丁目３番１号
　　愛媛大学東長戸団地
調 査 面 積　0.25㎡
調 査 期 間　2005年10月28日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充
依 頼 文 書　財務部財務企画課長発事務連絡
　　（平成17年９月８日）

1　調査にいたる経緯

東長戸団地北側の水路工事が行われるに伴って、㈱西日本電信電話から団地内の電柱支柱が不要となるため撤去の申し込みがあった。斜めに現地表下140㎝ま

写真23　00505調査地点（南西から）

写真24　00505調査区（北から）

で埋設された支柱の引き抜き工事である。

東長戸団地内では、99402調査の成果から、団地北東側からのびる微高地上には遺物包含層が分布し、その南側に自然河川が流れていることを確認できている。今回の工事地点は団地北東部の微高地上にあたり、支柱の撤去工事で、遺物包含層が破壊される可能性が考えられる。そこで、立会調査を実施することとした。

2　調査の記録（図15、写真23・24）

調査地点は、東長戸宿舎１号棟北東側、団地の北東隅部の花壇内である。電柱の撤去工事は、埋設上部を掘削することなく、斜めに埋設された方向に抜き取られ、電柱部分がぽっかりと斜めに開いた状態となった。径30～40cmの斜め坑が約200cm続く格好である。

限られた土層の確認ではあるが、現地表下約80cm、標高約12.80ｍまでは造成土のⅠ層、それ以下は大小の円礫が多く混じる灰黄褐色砂質土層であることを確認できた。灰黄褐色砂質土層のしまりはやや弱い。99402-1調査区で認められた遺物包含層である極暗褐色シルトの存在は確認できなかった。

3　調査後の対応

調査位置・土層を記録して、以後の慎重工事を依頼し、調査を終えた。　（吉田・三吉）

00506　（城北団地）事務局構内電柱建替工事（その１）に伴う調査

調 査 地 点　松山市道後樋又10番13号
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　0.9㎡
調 査 期 間　2005年11月４日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充
依 頼 文 書　財務部財務企画課長発事務連絡
　　（平成17年10月31日）

1　調査にいたる経緯

事務局構内に設置されている電柱の老朽化に伴う建て替え工事の連絡が㈱西日本電信電話から財務部財務企画課にあり、埋蔵文化財調査室に工事計画が提示された。工事では、仮設電柱を設けた後に電柱を撤去し建て替えることになる。この場合、電柱の撤去・建て替えは既に攪乱の及んでいる土層内の掘削に留まるが、仮設電柱の設置では埋蔵文化財に影響がおよぶ可能性が高い。そこで、㈱西日本電信電話・財務部と協議の上、立会調査を実施することとした。

2　調査の記録（図16・17、写真25～30）

調査地点は２ヶ所である。調査順に、東側を１トレンチ、西側を２トレンチとした（図16、写真25）。調査では、オーガによって掘り上げられた土層を確認していった（写真26）。そのため、層境の把握と深度は概略の値に留まっている。

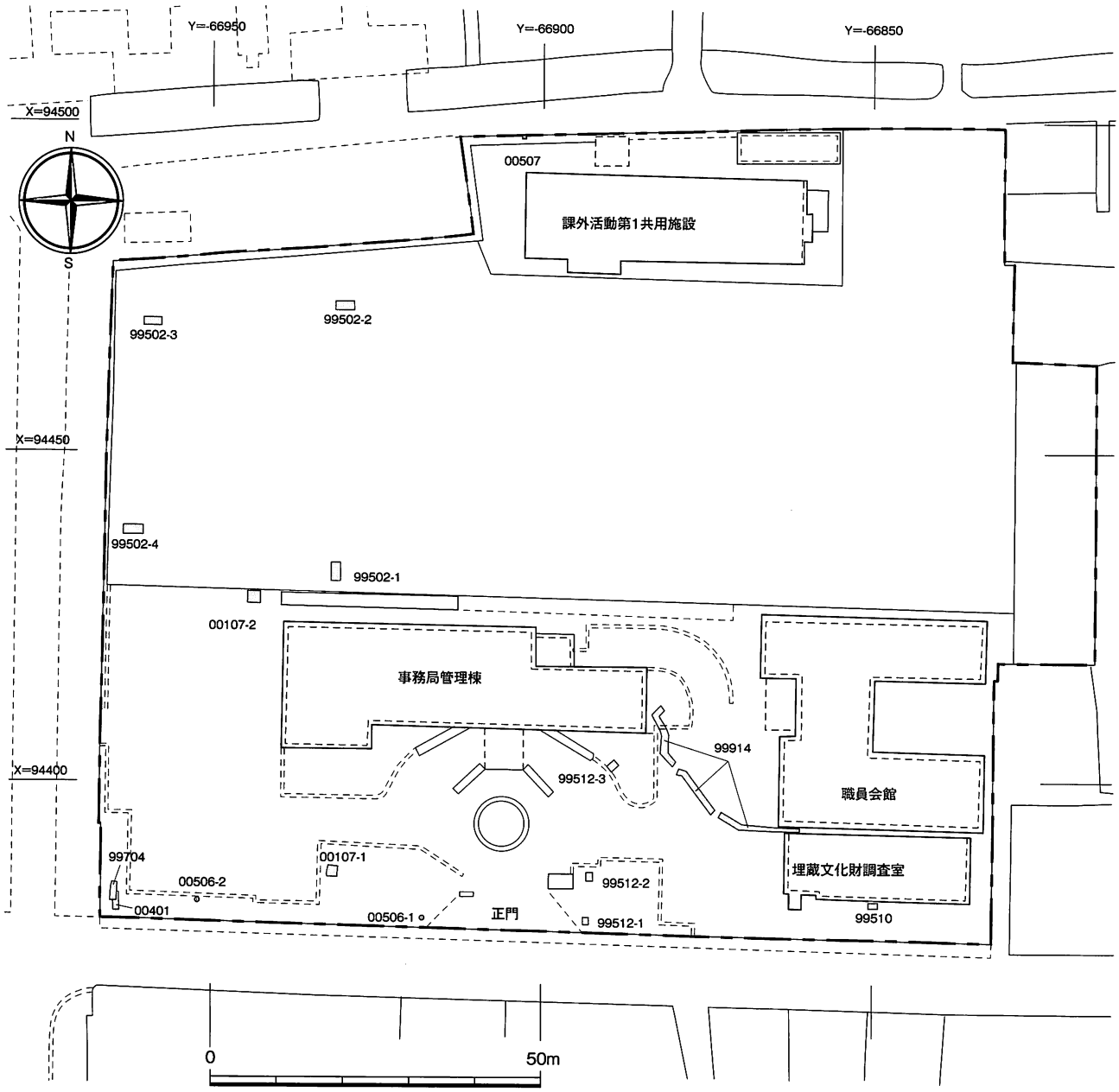


図16　00506･00507調査地点位置図（縮尺1/1,000）

(1)　1トレンチ

調査地点は、事務局正門の西側にあたる。人力で地表下110cmまで掘り下げた後に、オーガによる掘削が始まる。オーガ掘削は径約75cmの円形である（写真27）。造成土のⅠ層の下は、地表下2.4mまでにぶい黄色の砂質土層が砂層に、さらに砂層が砂礫層に変化していく堆積状況を確認できた。一連の堆積層と考え、上層から①～③層とした。

①層は、表土層直下のにぶい黄色砂質土層である。径3㎜以下の砂粒･砂礫からなり、しまりはやや弱い。地表下約160cmまで続く。②層は、にぶい黄色砂層で、1㎜以下の砂粒からなり、若干砂質土を含むものの、しまりはやや弱い。層厚は50cm前後。③層は、にぶい黄色砂礫層で、径1～10㎜の粗砂と礫を主体として、径20cmまでの塊石が混じる。下部ほど塊石の混じりが多く、砂礫の粒度も粗くなる（図17、写真27・28）。

いずれの土層からも出土遺物はない。

(2)　2トレンチ

調査地点は、1トレンチから西へ34m離れた地点で、

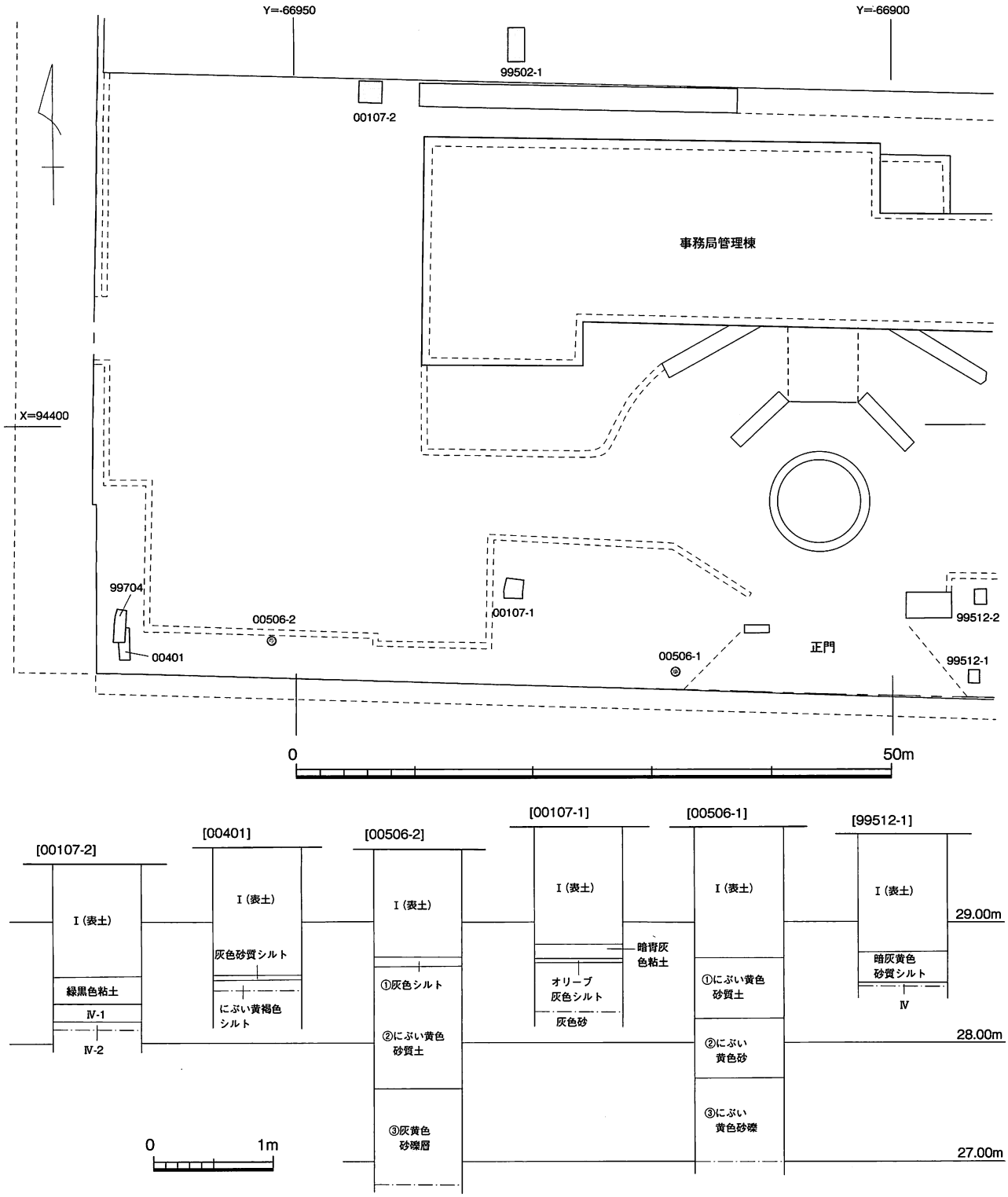


図17　00506調査地点周辺の土層堆積状況（縮尺1/500、1/50）

事務局敷地の南西隅付近にあたる。人力で地表下90cmまで掘り下げた後、オーガによる掘削を始める。オーガ掘削は径約75cmの円形である（図17、写真29・30）。

地表下70cmまでは、真砂土であるⅠ層が続く。Ⅰ層の下層では、厚さ約10cmの灰色シルト質土層があらわれ、さらに下層はにぶい黄色砂質土、そして灰黄色砂礫層が続く。上層から①～③層とした。

写真25　00506調査遠景（北東から）

写真26　00506調査風景

写真27　00506調査１トレンチ（北西から）

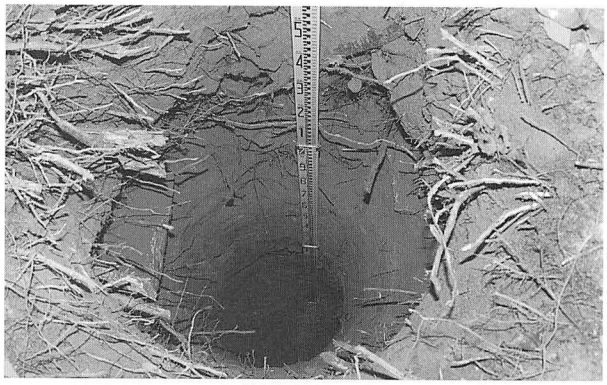


写真28　00506調査１トレンチ土層

写真29　00506調査２トレンチ（北から）

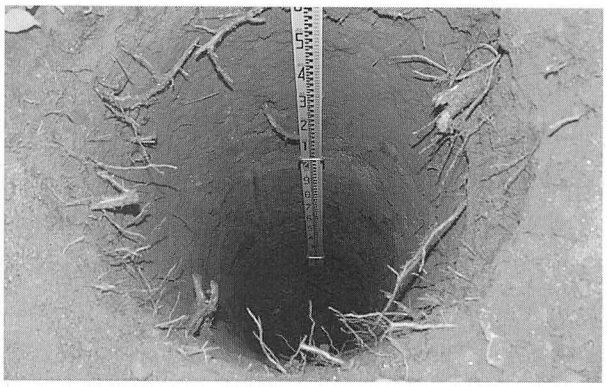


写真30　00506調査２トレンチ土層

3　調査後の対応

調査位置・土層を記録して、以後の慎重工事、特に既存電柱の引き抜き工事に際しての注意を依頼して、調査を終えた。（吉田・三吉）

00507　（城北団地）事務局構内電柱建替工事（その２）に伴う調査

調 査 地 点　松山市道後樋又10番13号
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　0.3㎡
調 査 期 間　2005年11月14日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充
依 頼 文 書　財務部財務企画課長発事務連絡
　　（平成17年10月26日）

写真31　00507調査地点（南西から）

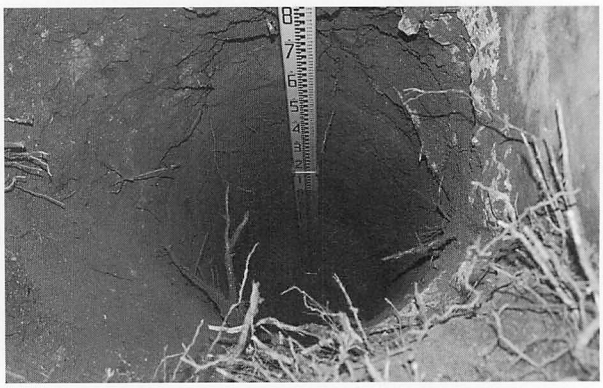


写真32　00507調査土層（南から）

1　調査にいたる経緯

事務局構内の北部にある課外活動第１共用施設の北側の電柱が老朽化しており、建て替えが㈱四国電力から申し込まれた。工事は、現在建てられている電柱を撤去し、西側約１ｍに新規に電柱を設置する計画である。財務部財務企画課・㈱四国電力と協議を行い、土層の確認を行う立会調査を実施することとした。

2　調査の記録（図16・18、写真31・32）

調査地点は、課外活動施設北側門扉の東、自転車置場との間の狭い植栽部の、北側囲障に接した地点である（写真31）。人力で地表下約60㎝までの掘削が行われ、オーガ掘削に移った。

地表下95㎝までは造成土のⅠ層で、その下層は径２㎜以下の灰黄～黄灰色の砂礫層となる。さらに地表下1.5ｍからはグライ化した青灰色の砂質土混シルト層となる。径２㎜以下の砂礫が多く混じり、やや粘性をおびる（図18、写真32）。いずれも流路内堆積とみられるが、遺物は出土しておらず、時期の詳細は不明である。

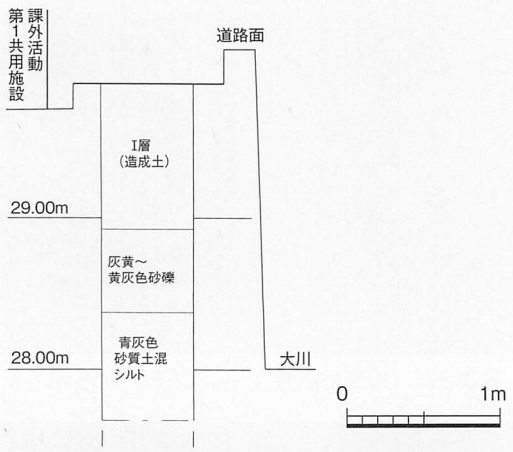


図18　00507調査土層柱状図（縮尺1/50）

3　調査後の対応

調査位置・土層を記録して、以後の慎重工事を依頼し、調査を終えた。　（吉田・三吉）

00508　（城北団地）法文学部屋根付き駐輪場設置計画に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　9.8㎡
調 査 期 間　2005年11月15日
調査の種別　試掘調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　法文学部長発事務連絡
　　（平成17年10月31日）

1　調査にいたる経緯

城北団地における自転車駐輪場の整備が進む中、法文学部では駐車場に屋根付き駐輪場を設ける計画がた

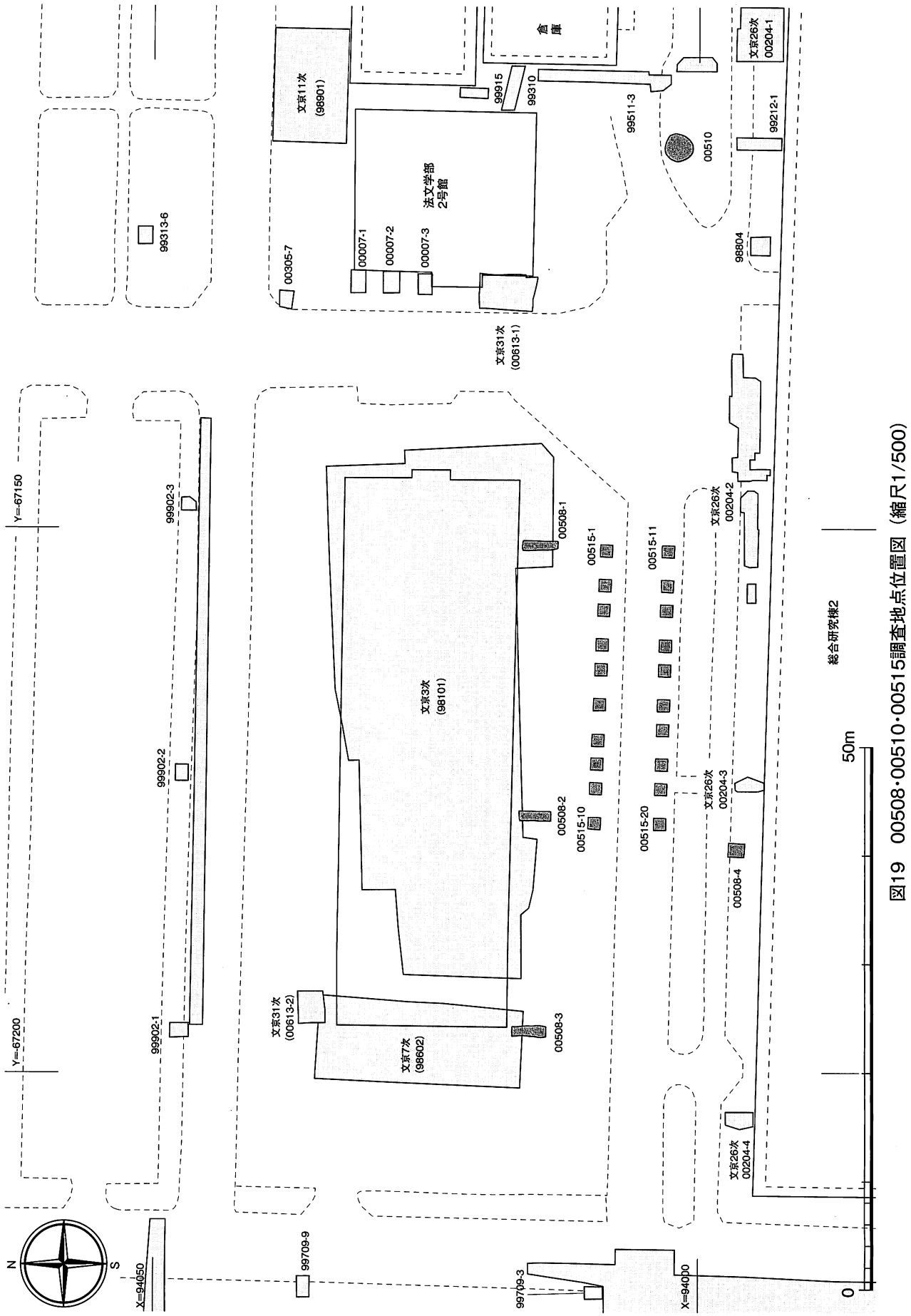


図19　00508・00510・00515調査地点位置図（縮尺1/500）

てられた。

埋蔵文化財調査室では、先の駐輪場を整備するにあたって、法文学部本館西側がグリーンゾーンとして遺跡の現状保存を図っている地区であること、グリーンゾーン外にも濃密な遺跡の広がりが予想されることから、掘削工事の回避を求め、舗装工事のみに留めた経緯があった。

当初、埋蔵文化財調査室に提示された工事計画は、法文学部本館と総合研究棟2（旧工学部本館）の建物と平行して屋根付き駐輪場を設置するものであった。その場合、屋根基礎設置をそれぞれの建物建設時の余掘り範囲に収めることが考えられた。総合研究棟2（旧工学部本館）側は、00204（文京26次）調査Ⅰ～Ⅳ区の成果から、余掘り範囲を特定できる状況にあった。

しかし、建物際に大型樹木があり、新しく設置する最南部の駐輪場に屋根をかけるという計画変更が浮上したため、その基礎設置が可能な地点を特定する必要が生じた。また、法文学部本館については、余掘り範囲を示すデータがない。

そこで、試掘調査を行い、余掘り範囲と土層の堆積状況を確認することとした。

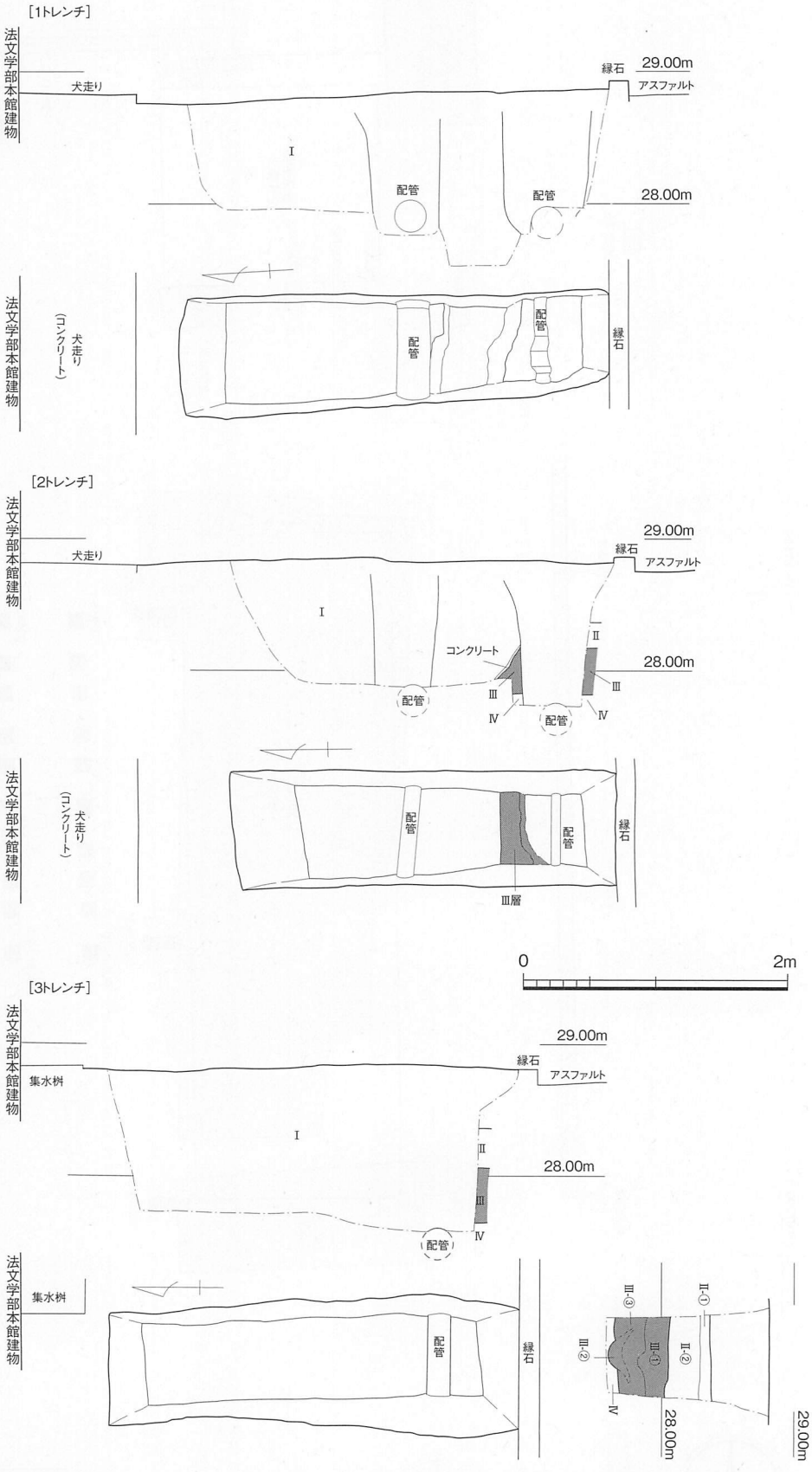


図20　00508調査1～3トレンチ実測図（縮尺1/50）

2　調査の記録

調査地点は、法文学部本館南側に3ヶ所（東から1

～３トレンチ）、総合研究棟２建物西半部の北側に１ヶ所（４トレンチ）である（図19、写真33）。

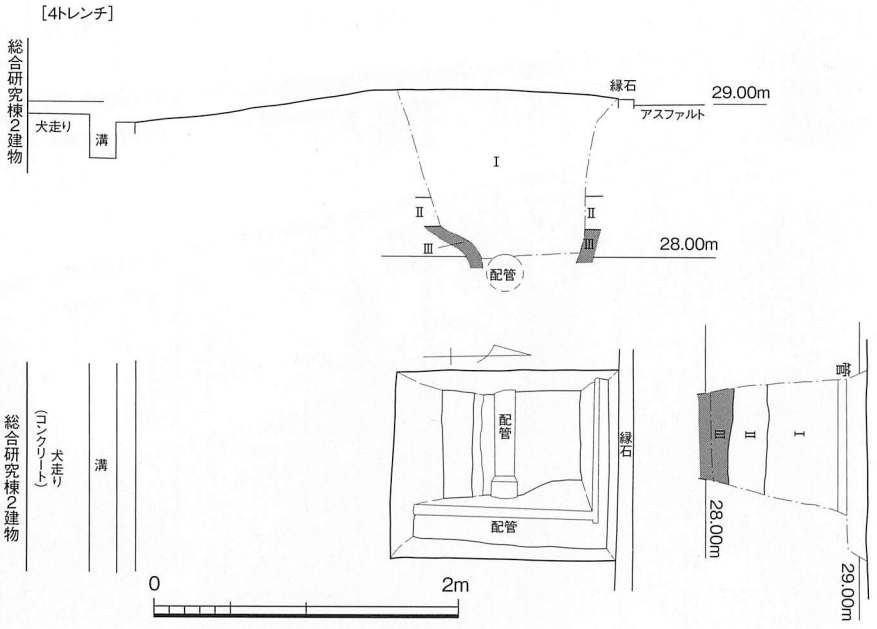


図21　00508調査４トレンチ実測図（縮尺1/50）

(1) １トレンチ

（図20、写真34・35）

１トレンチは、法文学部本館建物の南東角から西に約６m、建物外壁から約1.2m離して設定した。しかし、余掘り範囲が特定できなかったため、トレンチの南端を縁石近くまで延長して、南北約3.3m、東西0.9～0.7mを調査することとなった（写真34）。しかし、地表下90cmまで掘り下げたが、建物に平行して設置された配管があらわれるとともに、造成土のⅠ層が続き、攪乱の及んでいない城北団地基本層序のⅡ層以下の土層は確認できなかった。余掘りはさらに南にのびると考えられる（図20上段、写真35）。

(2) ２トレンチ（図20、写真36～38）

２トレンチは、１トレンチから西に約25m離れた地点に設定した。調査範囲は、建物外壁から約1.6m離れた南北約3.0m、東西約0.9mである（写真36）。

２トレンチでも、１トレンチと同様、建物に平行して設置された配管があらわれたが、地表下65cmまで掘り下げた時点で、南側配管の北側で城北団地基本層序Ⅲ層を確認できた。コンクリートで擁壁状となっている。また、トレンチ南端の壁面でも基本層序のⅡ～Ⅳ層があらわれた。Ⅱ層は灰黄褐色砂質土、Ⅲ層は暗褐色砂質土、Ⅳ層は黄褐色砂質土である。Ⅲ層は厚さ35cm前後を測り、遺構埋土である可能性も考えられる（図20中段）。

以上の調査結果から、余掘りは建物外壁から3.5mまで及んでいると判断できる。また、２トレンチからは、攪乱層から弥生土器片２点が出土している。

(3) ３トレンチ（図20、写真39～41）

３トレンチは、法文学部本館南西角から南に0.65m離れた地点に設定した。文京遺跡７次調査（調査番号：98602）の調査範囲の再確認の意味をもつ。

地表下45cmまで掘り下げた時点で、トレンチ南端で基本層序のⅡ層を確認できた。余掘り範囲は建物外壁から3.5mとなる。調査では余掘り範囲を1.25mまで掘り下げて、Ⅱ層以下の堆積状況を確認した。

Ⅱ層は、標高28.36m以下で、上下の①・②層に区分される。Ⅱ-①層は、厚さ10cm前後のオリーブ褐色砂質土で、５㎜大以下の砂礫・炭化物をやや含み、シルト質土がやや混在し、しまりがある。Ⅱ-②層は、25cm前後の厚さをもつ黄褐色砂質土で、５㎜大以下の砂礫をやや含み、シルト質土がやや混在し、しまりがある。Ⅲ層は、暗褐色砂質土で、厚さ約40cmに及ぶ。上部15～20cmは径２㎜大までの砂礫をやや含み、砂質が全体にやや強い（Ⅲ-①層）。下部は、径１㎜以上の礫をほとんど含まず、粘性は低いものの、シルト質に近い土質で、５㎜大の炭化物粒を含む（Ⅲ-③層）。この間に、黄褐色シルトの１～３cm大のブロックを混在させる単位が一部ある（Ⅲ-②層）。下部に落ち込みを伴い、柱穴等の遺構埋土の可能性が高い。Ⅳ層は、縁石上端から約115cmであらわれた。砂礫をほとんど含まない黄褐色シルト層で、粘性をおび、しまりがある（図20下段、写真41）。

３トレンチでは、攪乱層から弥生土器片５点が出土している。

写真33　00508調査１～３トレンチ遠景（南東から）

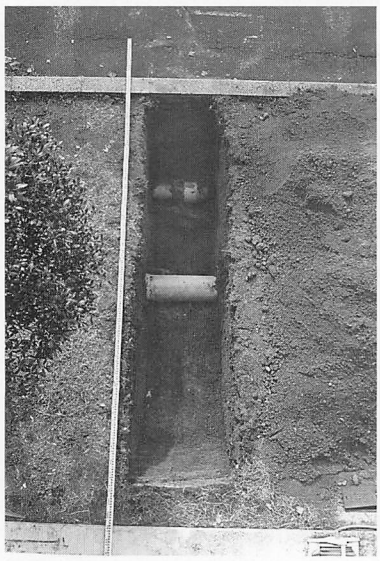


写真34　00508調査１トレンチ
全景（北から）

写真36　00508調査２トレンチ
全景（北から）

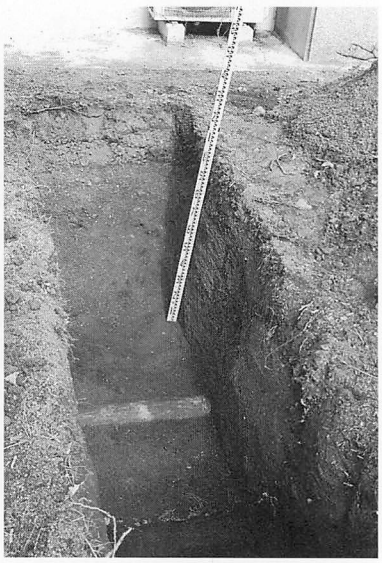


写真37　00508調査２トレンチ
北部土層（南西から）

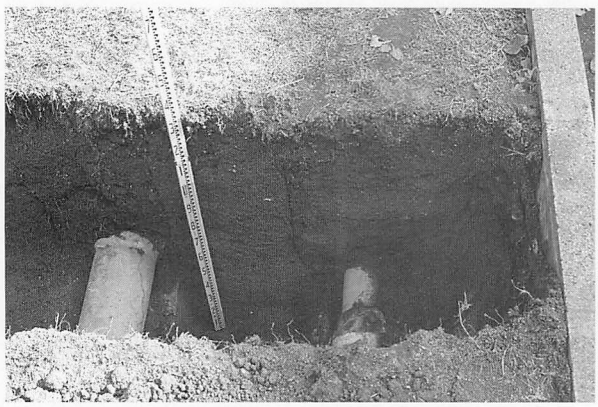


写真35　00508調査１トレンチ南部土層（西から）

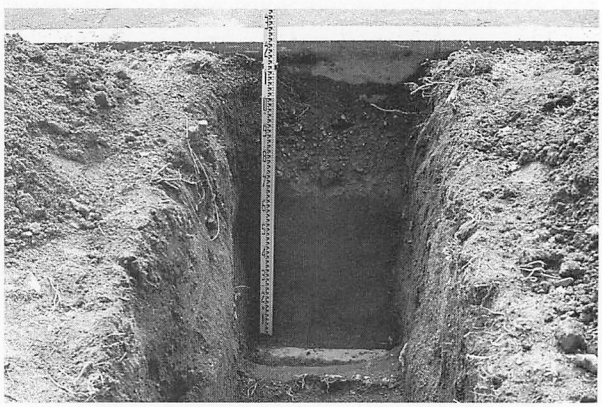


写真38　00508調査２トレンチ南壁土層（北から）

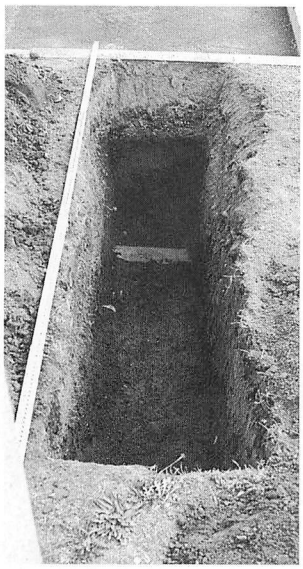


写真39　00508調査３トレンチ全景（北から）

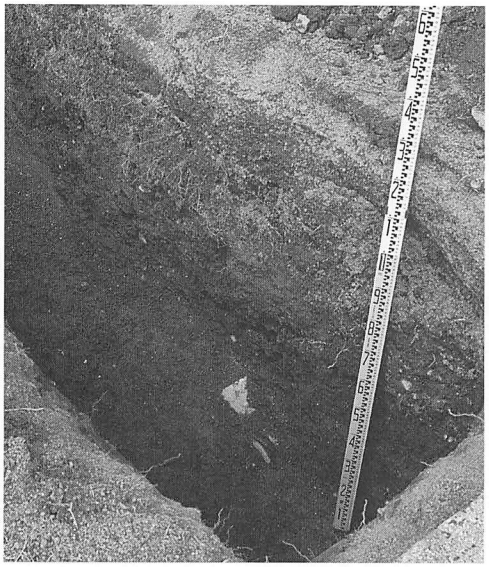


写真40　00508調査３トレンチ東壁土層（南西から）

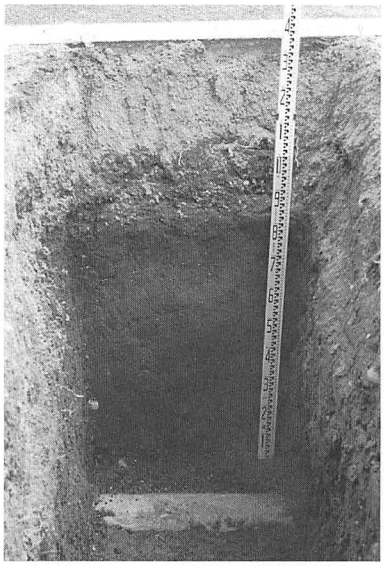


写真41　00508調査３トレンチ南壁土層（北から）

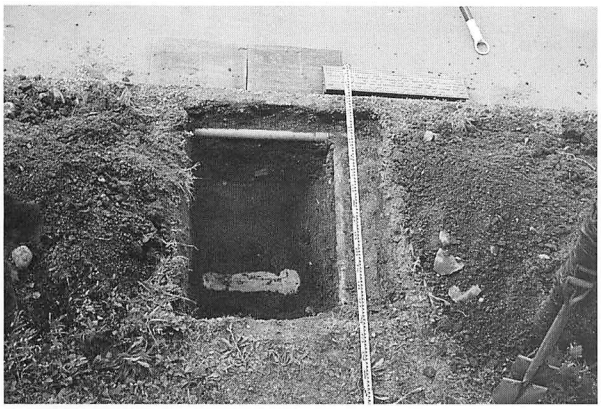


写真42　00508調査４トレンチ全景（南から）

写真43　00508調査４トレンチ南壁土層（北から）

(4)　４トレンチ（図21、写真42・43）

総合研究棟２（旧工学部本館）建物の西半部北側に位置する南北約1.5m、東西約1.25mのトレンチである。文京遺跡26次調査Ⅲ区の西側約５mの地点にあたる。

既設の雨水管路にあたり、管路の掘り形の壁面で土層堆積状況を確認した。地表下約65cmで基本層序のⅡ層があらわれた。にぶい黄褐色砂質土層で、径３～５mm大の角礫が多く混じり、粘性をややおびる。その下層は、地表下85cmから砂礫がほとんど混じらない黒褐色シルト質土のⅢ層となる（図21）。

3　調査成果のまとめ

法文学部本館南側に設定した１～３トレンチでは、想定していたより広く、建物外壁面から南3.5mまでが余掘り範囲となっている。基本層序のⅢ層を確認できた2・3トレンチでは、Ⅲ層はかなりの層厚をもち、遺構埋土の可能性が高い。周辺の既往調査の成果ともあわせ、濃密に遺構が分布しているものと判断される。

また、総合研究棟２（旧工学部本館）建物北側の４トレンチでは、地表下80cm以下には良好な状態でⅢ層が遺存していることを把握できた。（吉田）

00509　（樽味団地）農学部附属農業高校暖房蒸気漏修理工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市樽味３丁目５番７号　　愛媛大学樽味団地

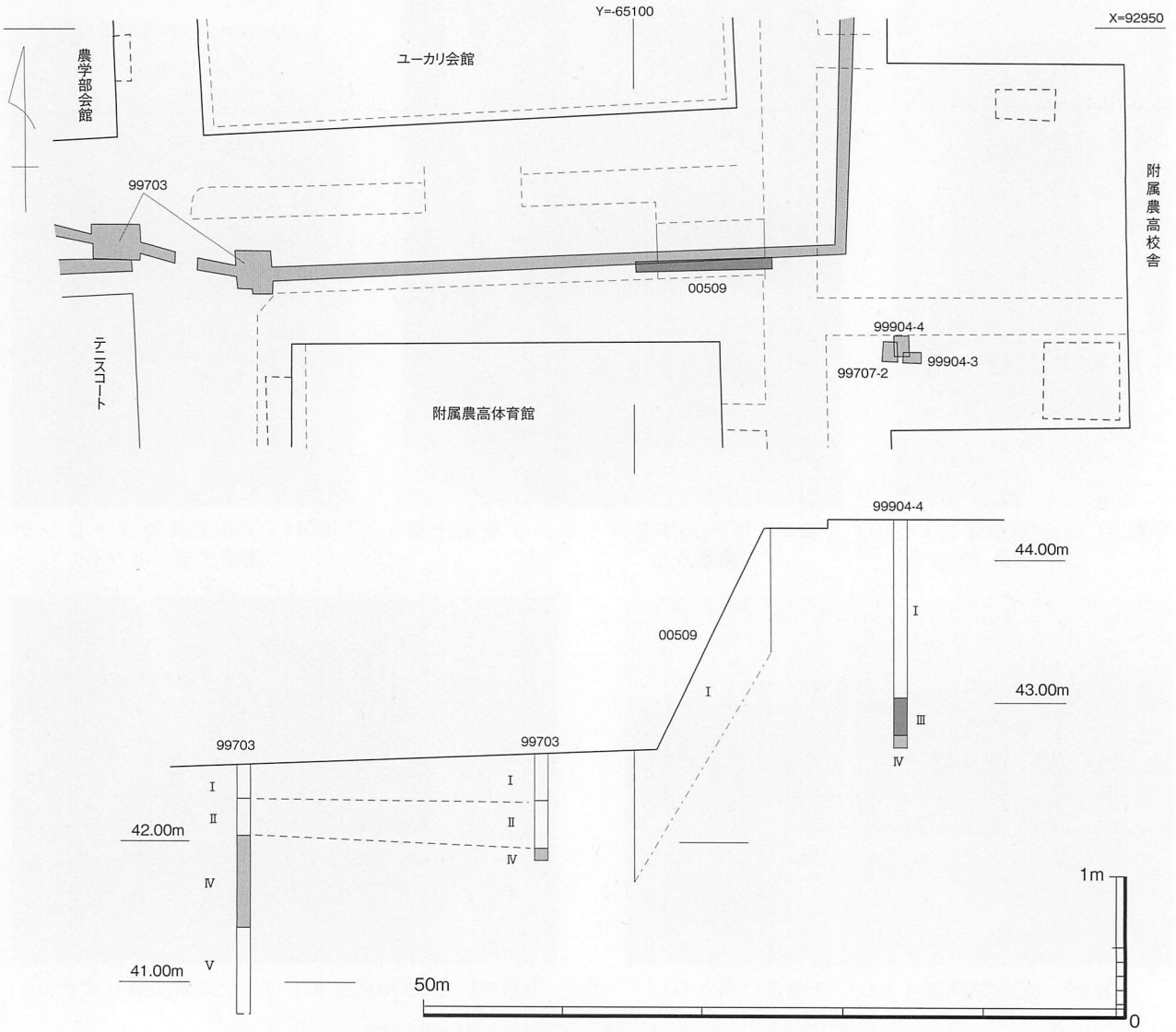


図22　00509調査地点配置および周辺土層堆積状況（縮尺1/500、1/50）

調 査 面 積　7.8㎡
調 査 期 間　2005年12月21日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　吉田広
調 査 補 助　宮崎直栄
依 頼 文 書　施設基盤部施設整備課長発事務連絡
（平成17年12月12日）

1　調査にいたる経緯

樽味団地の附属農業高校への暖房配管について、高校体育館北側での蒸気漏れが判明し、既設管上部の掘り形内に新設管を埋設する計画が埋蔵文化財調査室に報告された。計画されている掘削深度は地表下80㎝で、周辺の調査成果から、埋蔵文化財への影響が考えられたので、立会調査を実施することとした。

2　調査の記録（図22、写真44～46）

調査地点は、附属農業高校体育館北東側のスロープ部で、高位の東側道路部分は標高44.25m、低位の西側で道路部分は標高42.68m、傾斜度約14度である。調査区は、西端を配管桝とし、スロープを登り切った地点を東端とし、東西9.8m、南北幅0.8mを測る（図22、写真44）。

調査区西端では、現地表下95㎝・標高41.73mで既設管路があらわれた（写真45）。既設管は、ほぼスロープの傾斜にそって東に延び、調査区東端で現地表下90㎝・標高43.35mに位置する（写真46）。そして、全域

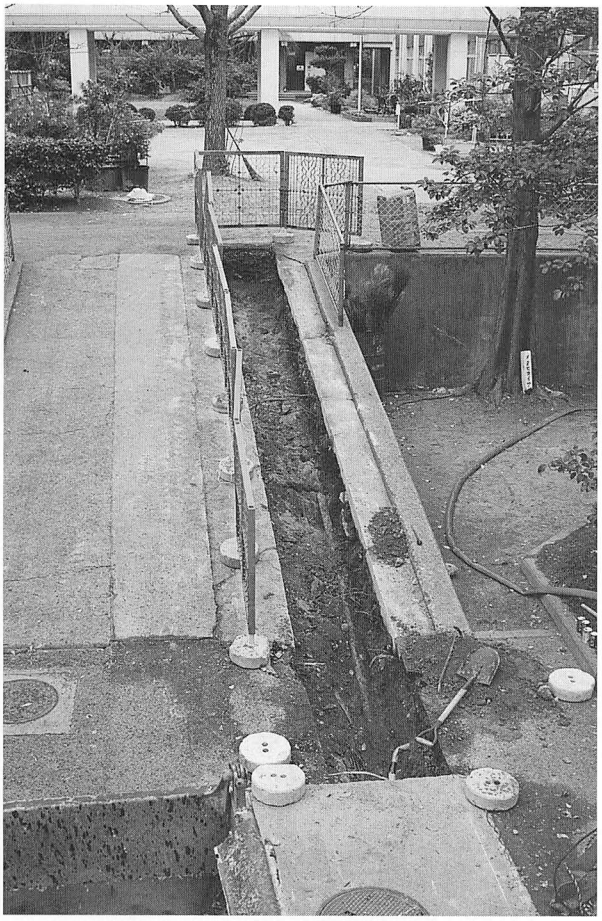


写真44　00509調査区全景（西から）

写真45　00509調査区西壁（東から）

写真46　00509調査区東壁（西から）

において、掘削範囲は表土層内にとどまっていることを確認した。

当初、周辺調査成果から、調査区西側で樽味団地基本層序Ⅳ層が、東側で同基本層序Ⅱ層かⅢ層があらわれることが予想された。しかし、未攪乱層は存在せず、掘削範囲内は既設管路の掘り形内あるいはスロープ造成時の盛り土とみられる（図22）。

今回の調査では、遺物は出土していない。

3　調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して、調査を終えた。（吉田）

00510　（城北団地）法文学部講義棟周辺環境整備（樹木移植工事）に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　3.2㎡
調 査 期 間　2006年１月30日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充
依 頼 文 書　施設基盤部施設整備課長発事務連絡
　　（平成17年12月９日）

1　調査にいたる経緯

法文学講義棟周辺の環境整備の一環として、法文学

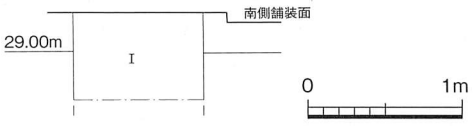


図23　00510調査土層柱状図（縮尺1/50）

写真47　00510調査地点遠景（北西から）

写真48　00510調査地点近景（西から）

写真49　00510調査区土層（北西から）

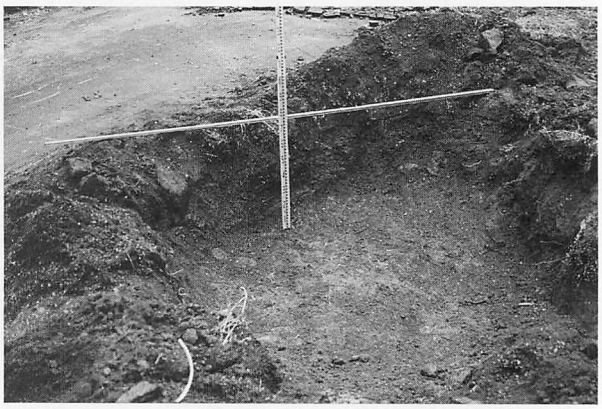


写真50　00510調査区完掘状況（南西から）

部２号館南側の植栽中にあるモミジを抜根することとなり、立会調査を実施することとした。

2　調査の記録（図23、写真47～50）

調査地点は、法文学部２号館と総合研究棟２（旧工学部本館）の間の植栽部に位置する（写真47・48）。

樹木抜根に伴い、樹木周辺を環状に地表下約60cmまで掘り下げたが、造成土のⅠ層が続く（図23、写真49）。抜根後、樹木下部についても確認したが、やはり掘削はⅠ層内に収まっていた（写真50）。

Ⅰ層から近代以降の陶磁器や瓦が出土したのみである。

3　調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して、調査を終えた。

（吉田・三吉）

00511　（重信団地）医学部附属病院院内保育所設置計画に伴う調査

調 査 地 点　東温市大字志津川
　　愛媛大学重信団地
調 査 面 積　5.0㎡
調 査 期 間　2006年２月７日
調査の種別　試掘調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充
依 頼 文 書　医学部長発事務連絡
　　（平成17年１月30日）

1　調査にいたる経緯

医学部では、附属病院院内保育所設置が計画され、

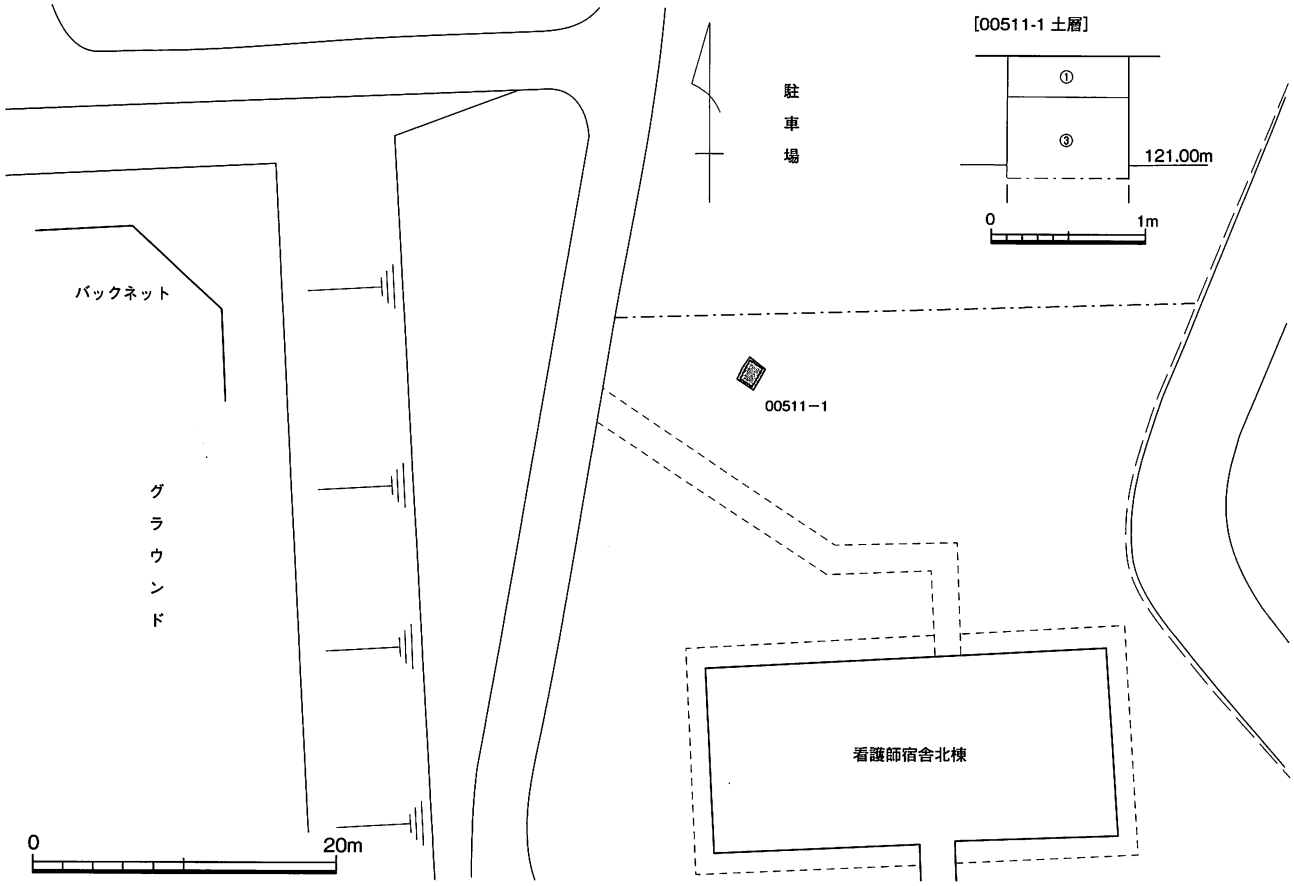


図24　00511調査１トレンチ配置および土層柱状図（縮尺1/500、1/50）

看護師宿舎北側と附属病院２号館東側駐車場南端部の２ヶ所が候補地としてあげられていることが報告された（図４）。建設工事に伴う掘削深度は地表下80cmである。

看護師宿舎北側は、最も近接する既往調査地点（99210調査-4・5トレンチ）からでも100m以上離れ、周辺の詳細は不明とせざるを得ない。一方の附属病院２号館東側駐車場南端部も、南西約50mの地点で調査がなされているが、その間には1.5～２mの段差があり、既往調査成果と直接比較するのは難しい。しかも現状では、候補地点東側構外へ地形的に連続し、北側から延びる微高地上に位置するとも見え、病棟周辺とは異なる埋蔵文化財の状況が予想された。以上から、両候補地点で試掘調査を実施し、調査結果に基づいて施設基盤部が工事計画を進めることとなった。

２　調査の記録（図24・25、写真51～54）

両候補地点について、各１ヶ所のトレンチを設定した。看護師宿舎北側が１トレンチ、附属病院２号館東側駐車場南端部が２トレンチである（図24・25）。

(1) １トレンチ（図24、写真51・52）

１トレンチは、看護師宿舎北側の植栽内で、樹木の間を縫って設定した。宿舎北棟から約20m北、西側道路から約10mに位置し、北東－南西方向に長く、約1.5×1.2mを測る（写真51）。

表土層の①層は真砂土層で、27cmの厚さがある。その下は、重信川による扇状地を構成する礫層である③層が、掘削範囲内の現地表下80cmまで続く。小指先大の円礫から、人頭大あるいは一抱えもあるような塊石からなり、黄灰色砂質シルトが混じる。上部10cm程度はややしまりがないが、以下は非常によくしまっている（図24、写真52）。出土遺物は、表土層から近現代陶磁器片が若干出土しているのみである。

(2) ２トレンチ（図25、写真53・54）

重信団地東北部の駐車場南側、ちょうど附属病院２号館の東に位置する植栽内に設定したトレンチであり、東約５mは構外の道路となっている。北西－南東

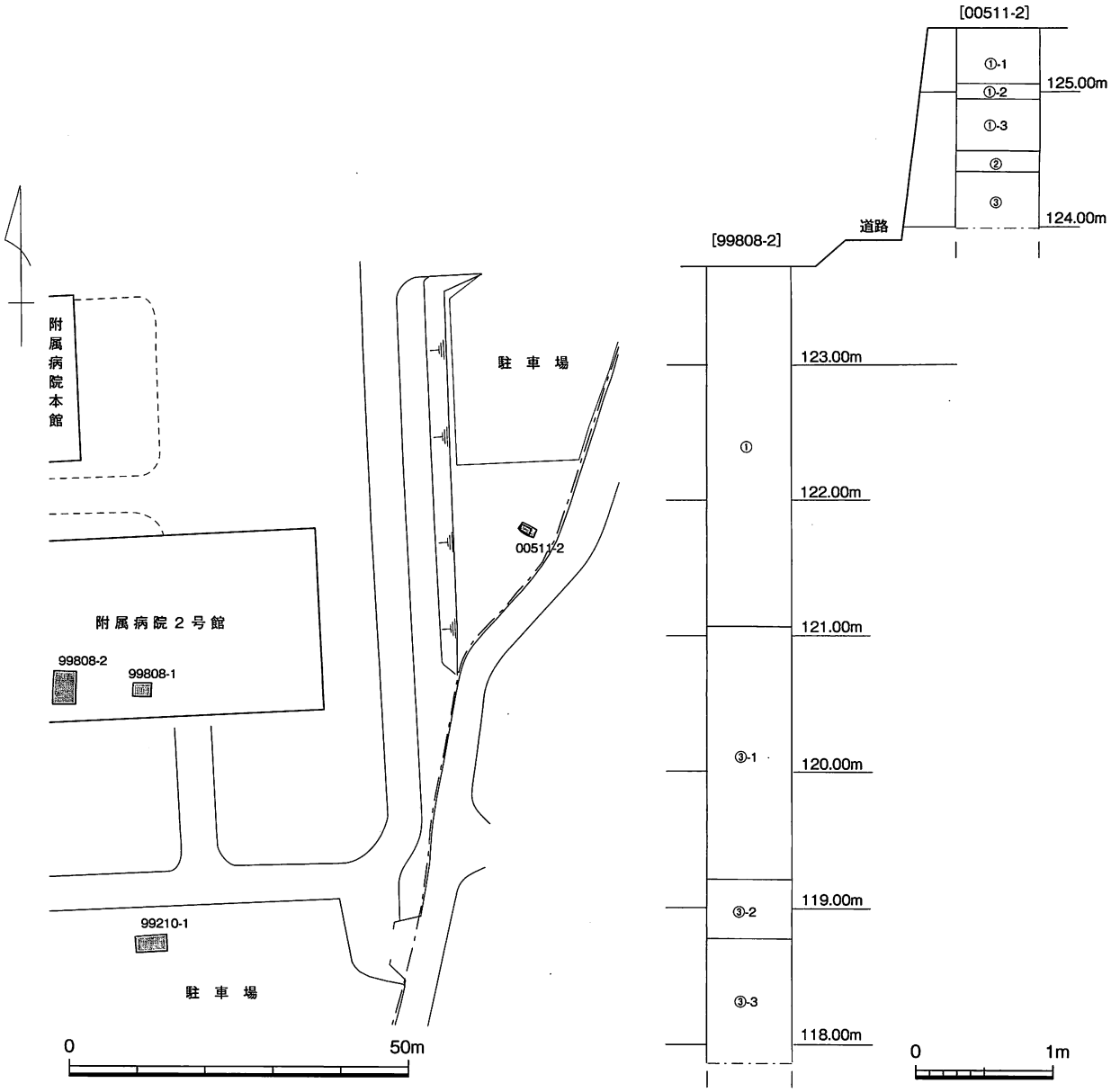


図25　00511調査２トレンチ配置および周辺土層柱状図（縮尺1/1,000、1/50）

方向に長く、約2.5×1.2mである（写真53）。

表土層である①層は①-1～①-３層に分層できる。①-1層は、拳大未満の円礫を多く含む黄灰色砂礫土で、厚さ約40cm。①-2層は、厚さ約10cmの真砂土層。①-3層は、小指先大から人頭大までの円礫層。しまりはやや弱く、厚さ約40cm。現地表下約90cmから15cm前後は、鉄分の沈着により一部黄褐色を呈する暗緑灰色シルトの②層である。重信団地造成前の水田層とも考えられるが、狭いトレンチ内でも厚さが一定せず、詳細は不明である。これ以下、現地表下約150cmまでは、重信川による扇状地を構成する礫層の③層が続く。調査地点では、拳大未満の円礫からなり、しまりは弱い（図25）。出土遺物は、表土層から近現代陶磁器片が若干出土したのみである。

3　調査のまとめ

１トレンチでは、現地表下30cm前後の表土層直下で、重信川扇状地を構成する礫層があらわれた。これより約100m北の99210調査地点では、１mをこえる表土層の下に、団地造成前の水田層が確認されており、団地南西部の99211-4調査地点でも同様である。

２トレンチでは、表土層の①層の下層に②層、さらに重信川扇状地の礫層である③層が続く。南西に70m

写真51　00511調査１トレンチ遠景（南から）

写真52　00511調査１トレンチ土層（南から）

写真53　00511調査２トレンチ遠景（南西から）

写真54　00511調査２トレンチ土層（北東から）

離れた99808-2調査地点では、現地表下約260cmの表土層である①層直下で③層となり、上位の円礫層（③-1層）、褐色シルト層（③-2層）、下位の円礫層（③-3層）と、現地表下約580cmまで続く（図25）。この中で、今回の調査で確認できた②層のシルト層は、遺構・遺物とも確認できなかったが、なお埋蔵文化財を包含する可能性を残している。　（吉田・三吉）

00512　（城北団地）法文学部講義棟周辺環境整備計画に伴う調査

調査地点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調査面積　4.3㎡
調査期間　2006年２月21日
調査種別　試掘調査
調査担当　吉田広・三吉秀充
依頼文書　施設基盤部施設整備課長発事務連絡
　　（平成17年12月９日）

1　調査にいたる経緯

法文学部周辺の環境整備で、法文学部講義棟南側の自動販売機接地極埋設に伴う工事が提示された。地表下75cmまでの掘削と、径14mmの接地棒打ち込み工事である。掘削計画深度では遺物包含層である城北団地基本層序のⅢ層に及ぶと判断できたが、掘削地点が法文学部講義棟に近接し、建設時の余掘り内に収まることも予想された。そこで、工事に先立って、法文学部講義棟建設時の余掘り範囲を確認する試掘調査を行い、その結果に基づき、埋蔵文化財に影響が及ばない範囲で掘削工事を行うこととした。

2　調査の記録　（図26、写真55～62）

写真55　00512調査１トレンチ遠景（南から）

写真56　00512調査１トレンチ（南西から）

写真57　00512調査１トレンチ北壁土層（南から）

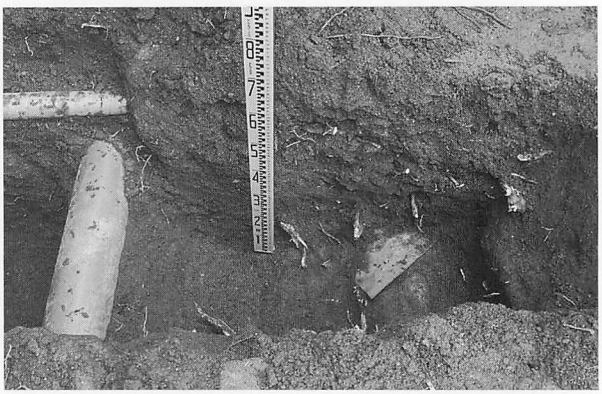


写真58　00512調査1トレンチ東壁南半部土層（西から）

写真59　00512調査２トレンチ（南東から）

写真60　00512調査２トレンチ北端土層（東から）

写真61　00512調査３トレンチ（南東から）

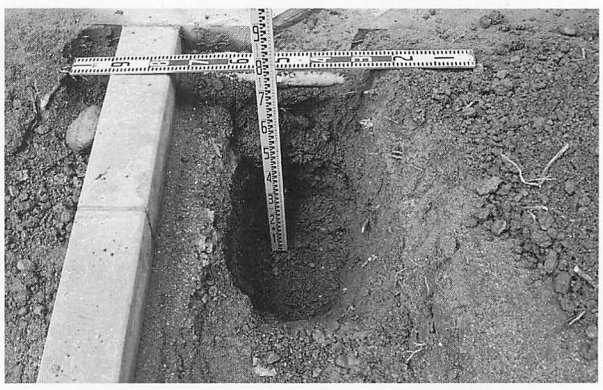


写真62　00512調査３トレンチ土層（南から）

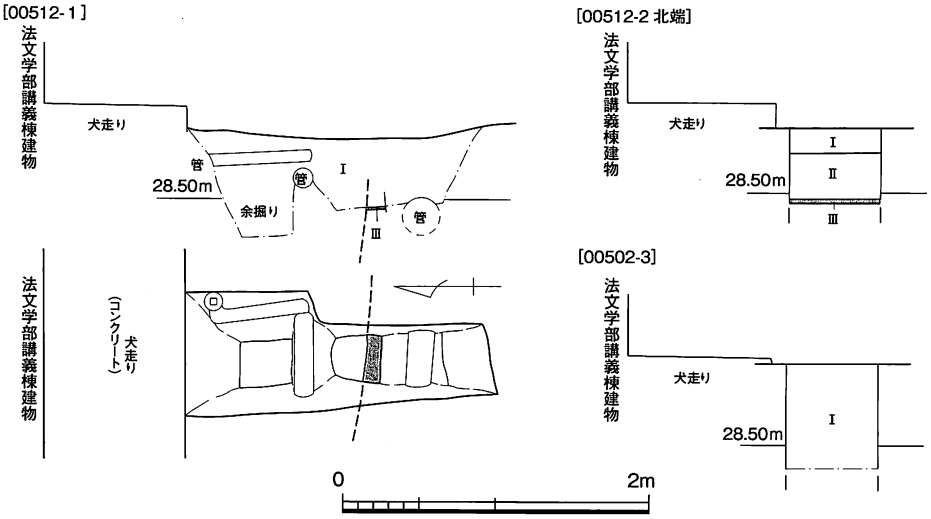


図26　00512調査１～３トレンチ実測図および土層柱状図（縮尺1/50）

接地極が埋設される地点は２ヶ所である。調査にあたっては、施設基盤部と協議の上、まず建物余掘り幅を特定するため、講義棟南側のほぼ中央に１トレンチを設定し、その結果に基づき東側埋設地点を決定することとした。

ところが、１トレンチから西へ約10.5mの地点で並行して行われていた法文学部講義棟から外灯基礎への電線管埋設工事で、１トレンチとは異なる状況が観察され、急遽この電線管埋設部についても調査を行うこととし、２トレンチとした。したがって、残る東側接地極埋設部も、１トレンチと同様な状況とは確定できず、これも調査対象とし、３トレンチとした。

(1) １トレンチ（図26、写真55～58）

調査地点は、法文学部講義棟南側、玄関スロープより約３m東の地点である（写真55）。余掘り範囲を確認するため、講義棟建物周囲の犬走り部分に接した位置から、幅50cm前後・南に約２mの長さを予定したが、東辺北側の浅い地点で管路があらわれ、この西側に調査区を設定し直した（写真56）。

講義棟建物と平行する管路が２本埋設されていたが、その間で攪乱を被っていない土層として、建物沿いの犬走り部分から南に1.2mの地点、深さ65cm、標高では28.45mの位置で、城北団地基本層序のⅢ層を確認した。Ⅲ層は粘性があり、やや薄めのにぶい黄褐色シルトで、砂礫は混じらない（写真58）。したがって、１トレンチ地点では、建物沿いの犬走り部分から南に1.2mまで講義棟建設時の余掘りが及んでいると判断した（図26）。

遺物は、Ⅰ層から中世土師器の細片１点が出土しているだけである。

(2) ２トレンチ（図26、写真59・60）

講義棟から外灯基礎への電線管埋設工事で、基本層序のⅡ層が所々で認められた（写真59）。とりわけ、北端の犬走り部分の直下においてもⅡ層がみられ、１トレンチでの余掘りとは異なる状況が予想された。

造成土のⅠ層は薄く、現地表下15cmでⅡ層があらわれる。Ⅱ層は、にぶい黄色シルト質土で、３㎜以下の砂礫をやや含み、しまりがある。下部には鉄分の沈着が層状に認められる。層厚は30cmを測る。地表下45cm、犬走り部分から53cmの、標高28.46mでⅢ層を確認できた。径３㎜以下の砂礫をやや含む暗褐色シルト質土である（図26、写真60）。このように２トレンチ北端の犬走り部分の端部では、講義棟建設時の攪乱が及んでいない。この地点で余掘り南端は、さらに建物外壁近くにあることになる。

遺物は、Ⅱ層から弥生土器小片が１点出土しているだけである。

(3) ３トレンチ（図26、写真61・62）

１トレンチと２トレンチで講義棟建設時の余掘り幅が異なることから、もう１ヶ所の接地極埋設地点も調査対象とすることとした。１トレンチの東側約２mの地点である（写真61）。現地表下約70cmまで掘り下げたが、この地点では攪乱を受けたⅠ層が続いた（図26、写真62）。遺物は出土していない。

余掘りに関する知見は得られなかったが、３トレンチ全体が余掘り内に位置する可能性が高い。

3　調査のまとめ

今回の調査は、法文学部講義棟建設時の余掘り範囲を特定することを意図したものである。１トレンチでは、犬走り部分から南1.2mに認められた。犬走り部

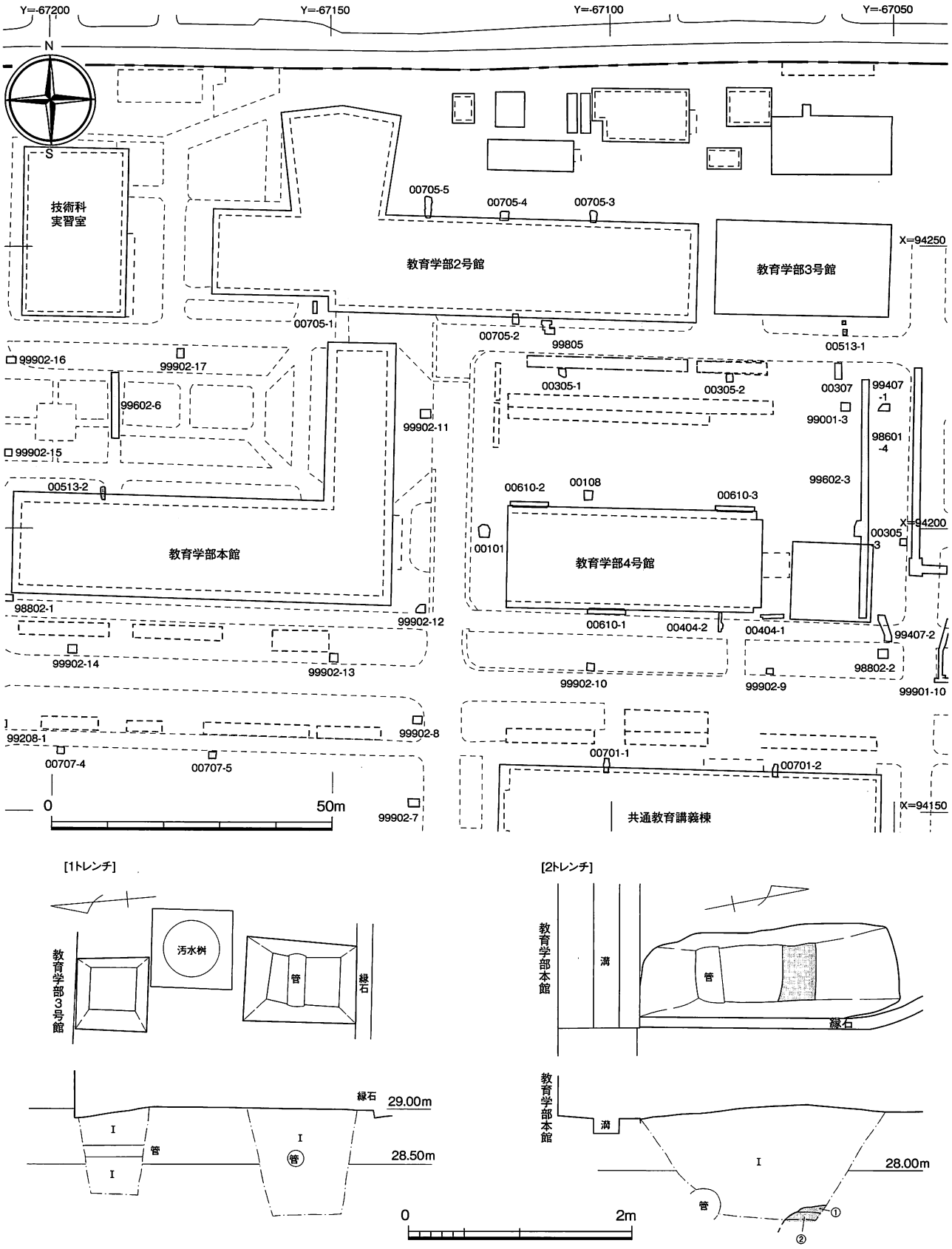


図27　00513調査配置図および1・2トレンチ実測図（縮尺1/1,000、1/50）

分は建物外壁から93cm幅である。ところが、２トレンチでは、建物外壁から96cm離れた犬走り部分の南端直下でも、Ⅱ層以下が攪乱を受けておらず、余掘り南端は、さらに建物外壁近くに位置している。

今後の工事計画と埋蔵文化財保護の調整を図る判断材料として、２トレンチでⅢ層の深度を確認できた意義は大きい。（吉田・三吉）

00513　（城北団地）教育学部２号館等空調設備電源工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　2.7㎡
調 査 期 間　2006年２月28日
調 査 種 別　試掘調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充
依 頼 文 書　施設基盤部施設整備課長発事務連絡
　　（平成18年２月２日）

1　調査にいたる経緯

各部局からの営繕工事が集約され、教育学部２号館等空調設備電源工事について一部埋蔵文化財へ影響が生じる可能性が施設基盤部から埋蔵文化財調査室に報告された。工事は、教育学部３号館南側と教育学部本館北側のそれぞれ１ヶ所で、接地極埋設である。地表下75cmまで掘削され、径14㎜の接地棒が打ち込まれる。

施設基盤部と埋蔵文化財調査室の協議により、同様の工事に対する埋蔵文化財への対応を、以下のようにすることとした。すなわち、まず地表下75cmの掘削工事位置を極力既設建物余掘り範囲内とすること、それができない場合は埋蔵文化財調査を行うことである。

これに基づき、今回の案件においては建物余掘り内に工事範囲を収めることが施設基盤部から提案された。しかし、両地点の建物建設時の余掘り範囲が不明なため、それを特定する試掘調査を行い、その結果に基づき、埋蔵文化財に影響が及ばない範囲で掘削工事を行うこととなった。

2　調査の記録（図27・28、写真63～68）

調査地点は２ヶ所で、教育学部３号館南側の地点を１トレンチ、教育学部本館北側を２トレンチとして調査を進めた（図27）。

(1)　１トレンチ（図27、写真63～66）

１トレンチは、教育学部３号館の南側、建物南東隅から約７ｍの地点に設定した（写真63）。建物外壁と縁石までの２ｍ強の南北長のトレンチとしたが、造成土のⅠ層を薄く剥いだ時点で汚水枡があらわれたため、これを挟んだ南北での調査となった（写真64）。

１トレンチ北半部では、地表下約80cmまで掘り下げたが、造成土のⅠ層が続く（図27、写真65）。南半部も、地表下約100cmまで掘り下げたが、やはりⅠ層が続く（写真66）。このように、トレンチ内では、教育学部３号館建設に伴う余掘り範囲は、特定することができなかった。なお、出土遺物はない。

(2)　２トレンチ（図27・28、写真67・68）

２トレンチは、教育学部本館北側の西端近く、出入口の西側植栽部に位置する（写真67）。

造成土のⅠ層を掘り下げていったところ、トレンチ北部で、褐灰～灰褐色の砂粒を含まないシルト層（①

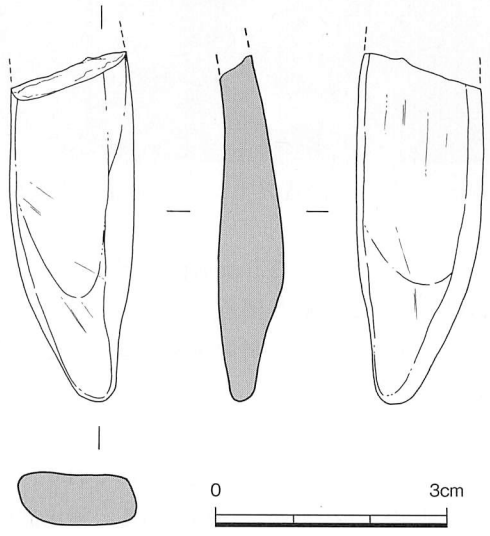


図28　00513調査２トレンチ出土遺物実測図
（縮尺1/1）

写真63　00513調査１トレンチ遠景（東から）

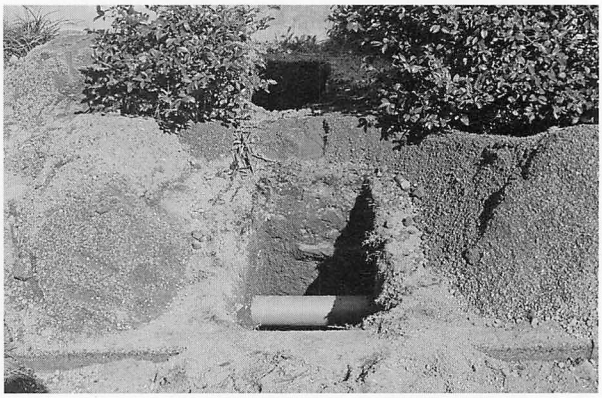


写真64　00513調査１トレンチ（南から）

写真65　00513調査１トレンチ北半部東壁土層（西から）

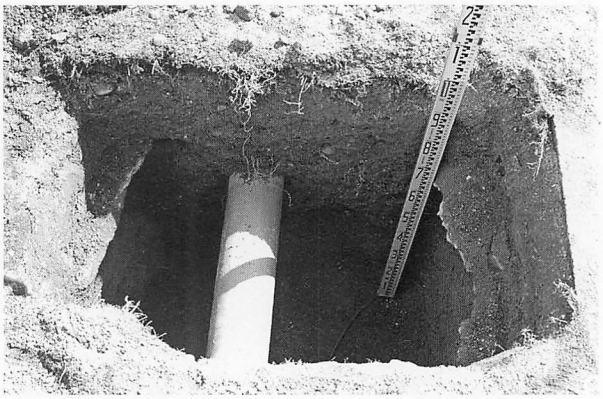


写真66　00513調査１トレンチ南半部東壁土層（西から）

写真67　00513調査２トレンチ遠景（北東から）

写真68　00513調査２トレンチ（南東から）

層）があらわれた。厚さ５㎝前後を測る。その下層により砂粒を含まない灰黄褐色シルト（②層）がみられた。鉄分の沈着により、明黄褐色を呈する部分がある（図27、写真68）。

周辺では、文京遺跡19Ｂ次調査の15トレンチと16トレンチで、灰黄褐色シルトが確認されており、これを城北団地基本層序のⅢ層に含めている。検出高は、15トレンチで標高約27.95m、16トレンチで約28.00mである。①・②層がこれらと一連のものと考えることもできるが、管埋設に伴う攪乱である可能性も残る。以上、少なくとも教育学部本館外壁２ｍまでは建物建設時の余掘り範囲内にある。

なお、出土遺物には、Ｉ層から土師器片１点と磨石１点がある。磨石は緻密な砂岩で、縦断面が軽くＳ字状を描き、各部に擦過痕が残る（図28）。

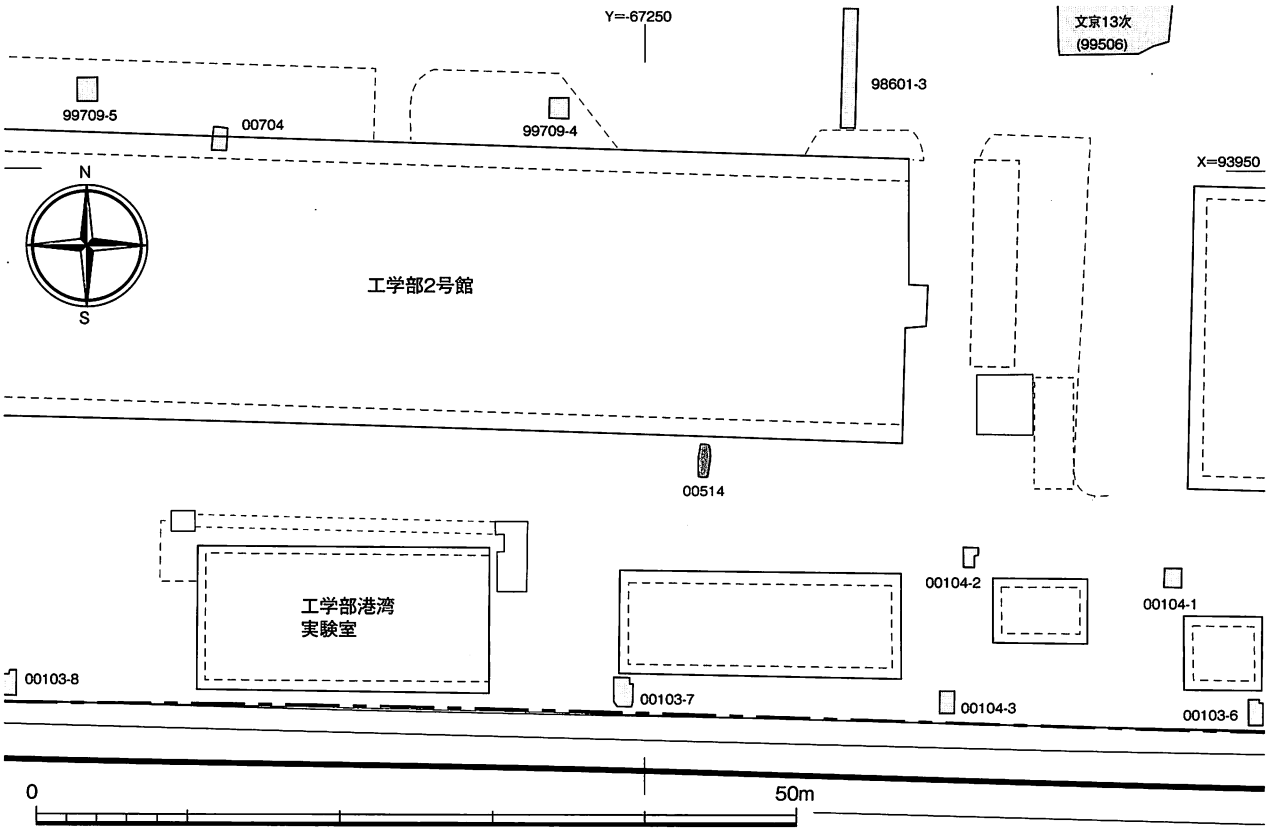
3　調査の成果

今回の調査では、建物建設時の余掘範囲特定を意図したが、いずれのトレンチでも、明確に特定することはできず、それぞれの建物に普遍化できる成果は得られなかった。しかし、工事地点は攪乱の範囲であり、この地点に接地棒打ち込みを依頼し、調査を終えた。

（吉田・三吉・濱田）

00514　（城北団地）工学部２号館２階女子便所改修電気設備工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　1.5㎡
調 査 期 間　2006年２月28日
調 査 種 別　試掘調査
調 査 担 当　吉田広・三吉秀充



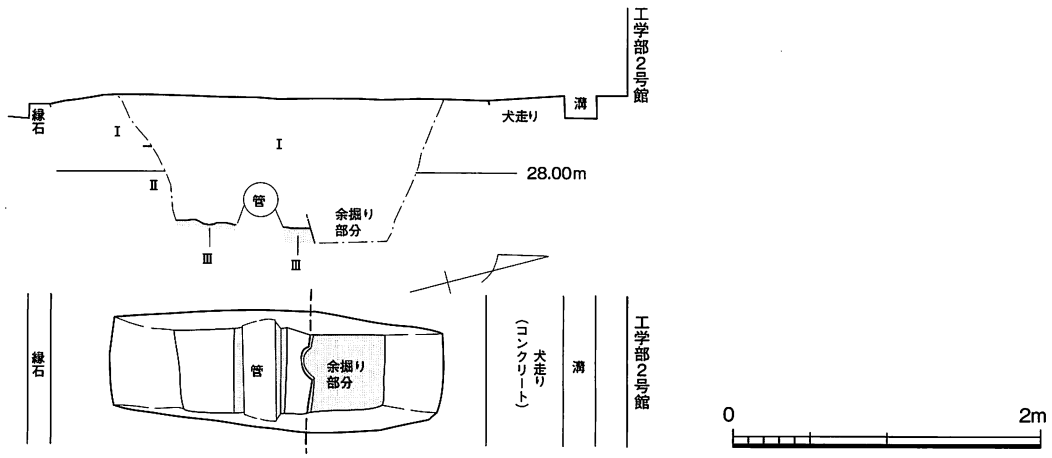


図29　00514調査位置図およびトレンチ実測図（縮尺1/500、1/50）

写真69　00514調査地点遠景（南西から）

写真70　00514調査地点近景（南から）

写真71　00514調査土層（南から）

依 頼 文 書　施設基盤部施設整備課長発事務連絡
（平成18年２月２日）

1　調査にいたる経緯

工学部２号館２階女子便所改修電気設備工事の報告が施設基盤部からあり、建物余掘り範囲を特定する試掘調査を行い、その結果に基づき、埋蔵文化財に影響が及ばない範囲で工事を行うこととなった。

2　調査の記録（図29・30、写真69～71）

調査地点は、工学部２号館南側、建物南隅部から西へ約13mの地点である（図29上段、写真69）。植栽内の樹木の間隙に、建物外壁から南に約1.2m離れ、東西幅60～70cm、南北長約2.2mのトレンチを設定した（写真70）。地表下約55cmまでは造成土のⅠ層が続き、地表下約80cm、高27.68mで、城北団地基本層序のⅢ層があらわれた。また、工学部２号館の建物壁から２mの地点で余掘りの肩部であるⅠ層の落ち込みを確認できた。

Ⅲ層は、上面を検出しただけであるが、暗褐色シルト質土で、１㎜以上の砂粒をあまり含まず、粘性をややおびる（図29下段）。南側の文京遺跡23次調査（調査番号：00103）７トレンチで古墳時代後期の包含層としたⅢ-1層とは、検出高や土質が異なっており、弥生時代から古墳時代前半の包含層とみられる。

出土遺物は、弥生土器・土師器の細片が若干ある。その中から１点が図化できた。弥生土器甕の胴部上半の破片で、頸部から若干下がった位置に突帯が付く甕と考える。突帯には、指頭による押圧刻目を施す。内外面とも磨滅しているが、突帯付近だけに横ナデ調整痕が残る。弥生中期後葉に比定できる（図30）。

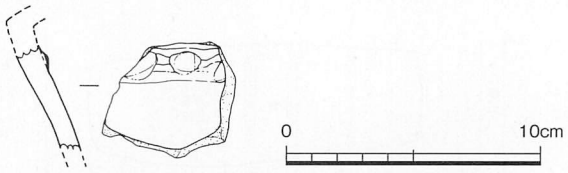


図30　00514調査出土遺物実測図（縮尺1/4）

3　調査の成果

今回の調査では、工学部２号館建物建設時の余掘り範囲は、建物外壁から約２ｍと特定できた。また、城北団地基本層序のⅢ層が現地表下約80cmに良好に存在することも確認できた。

上記した建物建設時の余掘り範囲を施設基盤部に報告し、以後の工事に関して協議を行い、接地棒打ち込み位置を余掘り範囲内とすることとなった。

（吉田・三吉・濱田）

00515　（城北団地）法文学部屋根付き駐輪場設置工事に伴う調査

調 査 地 点　松山市文京町３番
　　愛媛大学城北団地
調 査 面 積　24.2㎡
調 査 期 間　2006年３月１日～３月３日
調査の種別　立会調査
調 査 担 当　田崎博之・吉田広・三吉秀充
依 頼 文 書　法文学部長事務連絡
　　（平成18年２月９日）

1　調査にいたる経緯

法文学部では、講義棟周辺環境整備に伴って、屋根付き駐輪場の設置が計画され、埋蔵文化財調査室に試掘調査の依頼があった（法文学部長発事務連絡、平成17年10月31日）。埋蔵文化財調査室は、工事計画に沿って、法文学部本館南側と総合研究棟２（旧工学部本館）北側で、11月15日に00508調査として試掘調査を行い、建物の余掘り範囲を確認した。この調査結果をうけ、法文学部では、本館南側に沿って全面に屋根付き駐輪場を設置する計画がたてられた。しかし、その東半部はグリーンゾーンとして遺跡の保護を図っている場所にあたる。グリーンゾーンは、将来的には学生・市民の憩いの広場として活用する計画がある。埋蔵文化財調査室では、そうした場所に屋根付き駐輪場を設置することは不適当と考え、その旨を報告するとともに、工事計画の見直しを求めた（埋蔵文化財調査室長発事務連絡、平成18年度２月２日）。

法文学部、工事を担当する施設基盤部とともに、協議を行い、屋根付き駐輪場の設置範囲をグリーンゾーンを避ける形で東側に移動させることとなった。また、これまでの調査成果から、濃密な遺構の分布が予想されるので、できるだけ基礎の設置深度を浅くし埋蔵文化財に影響が及ばないようにすることを確認した。そのため、埋蔵文化財調査室では、工事範囲の現状と既往調査の成果を検討し、地表下35cmまでの掘削深度であれば、弥生時代～古墳時代の遺構と遺物を包含する城北団地全域の基本層序Ⅲ層には影響がないことを、施設基盤部へ報告した。施設基盤部との協議の結果、基礎を設置するための掘削深度を地表下35cmに抑えること、工事に伴って立会調査を実施することとした。

2　調査の記録（図19・31、写真72～84）

今回の屋根付き駐輪場の基礎が設置される地点は、法文学部本館と総合研究棟２（旧工学部本館）の間の20ヶ所である。基礎設置地点の北側列10ヶ所を東から１～10トレンチ、南側列10ヶ所を東から11～20トレンチとして立会調査を進めた（図19）。また、北側列の１～10トレンチでは、Ⅲ層上面までの調査を行い、土層の堆積状況とⅢ層の状況を確認した。その結果、いずれのトレンチでも、地表下38～45cmでⅢ層があらわれた。そこで、南側列の11～20トレンチでは、地表下35cmまで掘り下げ、掘削がⅢ層を破壊しないことの確認を行った。

今回の工事範囲は、南北約14m、東西約53mで、調査地点も連続しているので、図31に個々のトレンチの調査状況をまとめた。前述したように、北側列で計画の掘削深度をこえて掘り下げを行いⅢ層を確認したが、１～３・５～10トレンチでは地表下38～45cmでⅢ層があらわれ、４トレンチではⅢ層はみられず、Ⅱ層直下でⅣ層があらわれた。

また、１・２トレンチでは、攪乱溝壁で土層堆積状況を観察したが、Ⅲ層は厚さ５～18cmで、Ⅳ層の黄褐色シルト塊が斑状に混じる。本報告ではⅢ層としたが、遺構埋土の可能性が高い。また、Ⅲ層下の地表下55～60cmでⅣ層があらわれる。10トレンチでも、攪乱溝壁面で土層堆積状況を観察したが、Ⅲ層は厚さ20cm以上で、遺構の埋土である可能性が高い。

写真72　00515調査地点遠景（西から）

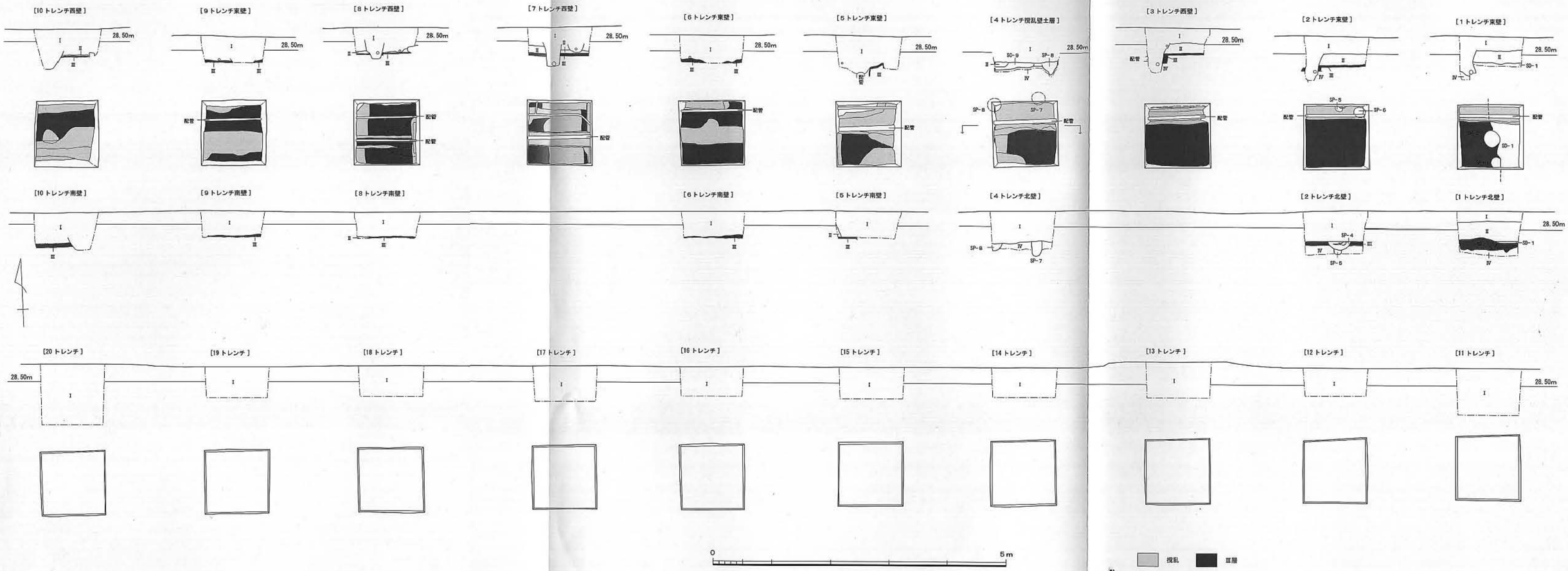


図31　00515調査1～20トレンチ配置および土層断面図（縮尺1/50）

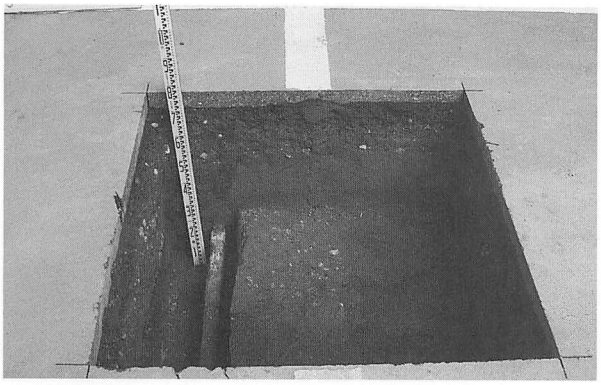


写真73　00515調査１トレンチ（西から）

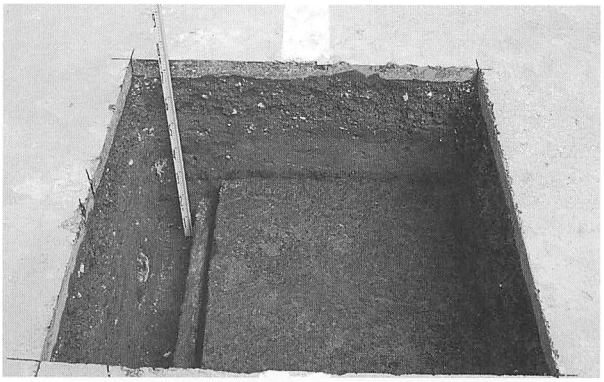


写真74　00515調査２トレンチ（西から）

写真75　00515調査２トレンチ SP-４土器出土状況

写真76　00515調査３トレンチ（西から）

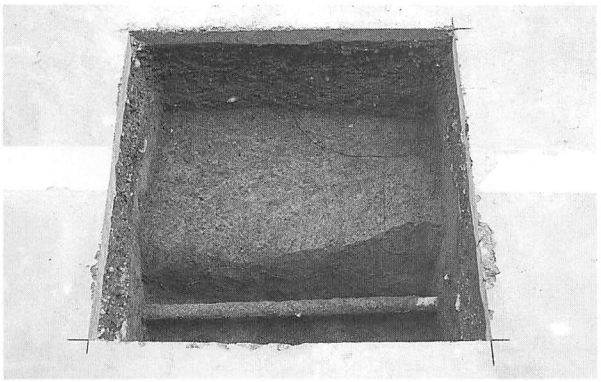


写真77　00515調査４トレンチ（北から）

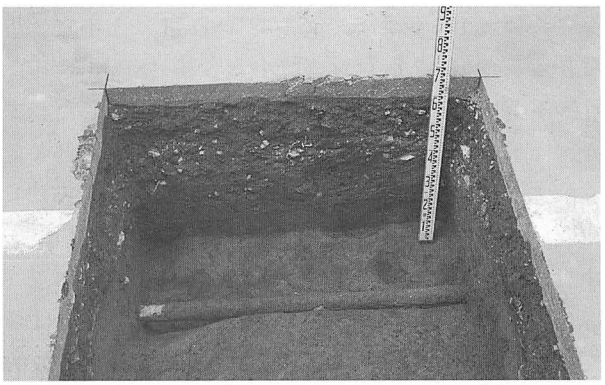


写真78　00515調査４トレンチ北壁土層（南から）

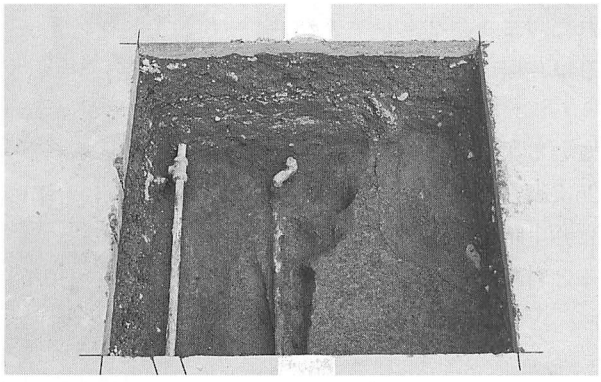


写真79　00515調査５トレンチ（西から）

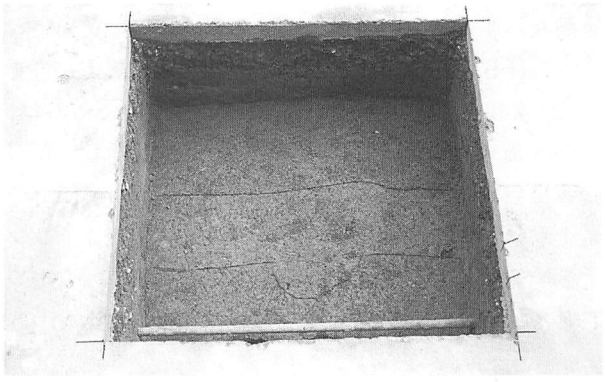


写真80　00515調査６トレンチ（北から）

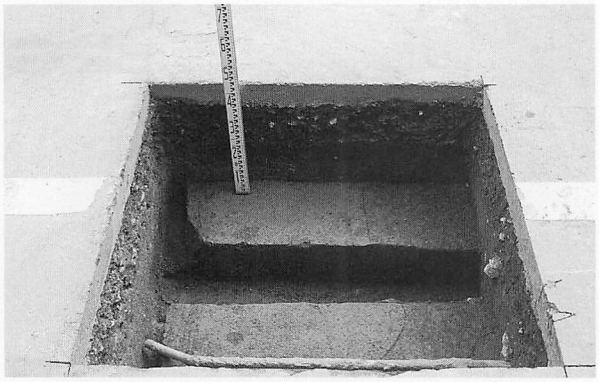


写真81　00515調査７トレンチ（北から）

写真82　00515調査８トレンチ（東から）

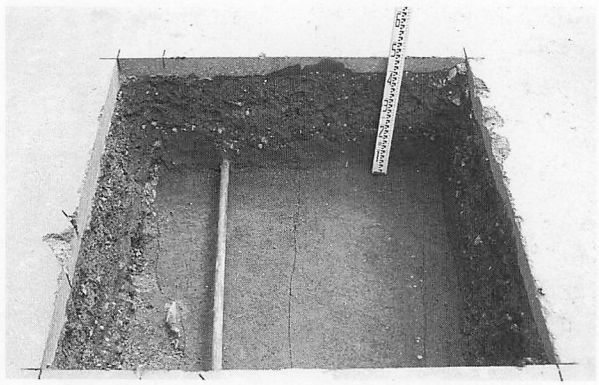


写真83　00515調査９トレンチ（西から）

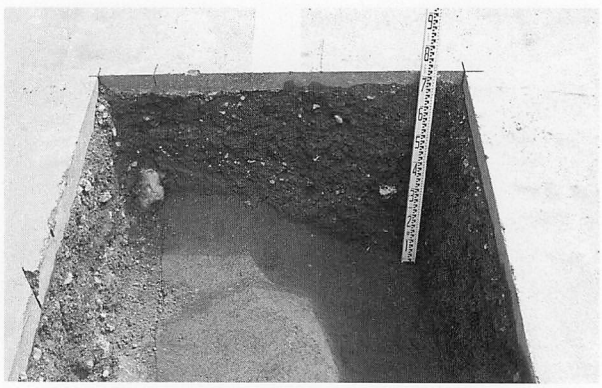


写真84　00515調査10トレンチ（西から）

この他、１トレンチで溝１条（SD-１）と小穴２基（SP-２・３）、２トレンチで小穴３基（SP-４～６）、４トレンチで小穴２基（SP-７・８）が出土した。また、４トレンチの撹乱溝壁面では竪穴式住居跡と考えられる遺構（SC-９）を確認した。１トレンチSD-１は灰白砂礫で埋積され、小指先大の円礫が多く混じる。中世の遺物が多く出土している。１トレンチSP-２・３は、SD-１を切る。２トレンチSP-４は、埋土は暗褐色砂質土を埋土とし、溝状の掘り形をもつ。比較的大きな弥生土器壺の底部破片が出土している。２トレンチSP-５は、SP-４の下層で確認できた。径15cm弱を測り、埋土は暗褐色砂質土である。Ⅳ層の黄褐色シルトの径５～10㎜の塊が混じり、径５㎜の焼土が含まれる。炭化物片が出土している。２トレンチSP-６は、径20m前後の柱穴で、暗褐色砂質土で埋まる。Ⅳ層の黄褐色シルトの径５～10㎜の塊が混じり、径5㎜の焼土が含まれる。炭化物片が出土している。４トレンチSP-７は、褐灰砂質土の埋土で、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックが少量みられる。４トレンチSP-８は、褐灰砂質土の埋土で、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックが少量みられる。SP-７・８は灰色系の埋土であるので、中世以降の小穴と考えられる。４トレンチSC-９は、Ⅲ層と同質の埋土をもち、弥生時代～古墳時代の竪穴式住居跡と考えられる。

３　調査のまとめ

今回の調査は、狭い範囲の立会調査のため、遺構の確認は十分ではない。しかし、１・２トレンチと10トレンチでは、遺構の埋土の可能性が高いⅢ層があらわれた。また、２トレンチSP-４～６と４トレンチSC-９は、埋土の特徴から弥生時代～古墳時代の遺構と考えられ、SP-４からは弥生土器壺の底部破片が出土している。以上の調査成果と、周辺の文京遺跡３・７・26次調査などの成果から考えれば、この地点にも濃密に弥生時代～古墳時代を中心とする遺構が分布していると判断できる。（田崎）

Ⅲ　愛媛大学保管・所蔵の考古資料(2)

2004年度年報で、旧歴史学研究会保管資料の一覧と、その一部である祝谷丸山遺跡採集資料の報告を行った。今回は、その第二段である。

旧歴史学研究会保管資料については、「EU厂研12-03」等と埋蔵文化財調査室での登録番号を与えた。その上で、ラベル・注記などにより採集地の判明した遺跡毎に収納を行い、この遺跡単位で順次報告していく予定である。ところが、先の2004年度年報においては、報告の遺物番号に関わる記述を漏らしてしまっており、以下追記しておく。

報告にあたり、遺跡毎にSを冠した2桁の遺跡番号を与えている。前回の祝谷丸山遺跡がS01であり、今回の長谷遺跡がS02である。これに続けて、実測する遺物毎に3桁の実測番号を与え、遺物には「S02-076」等と別色で注記している。遺物観察表の実測番号がこれにあたり、報告の挿図番号との対照は、この実測番号に拠ることになる。　(吉田)

1　旧愛媛大学歴史学研究会保管の長谷遺跡採集資料

旧歴史学研究会保管資料中、長谷遺跡採集資料はコンテナ約1箱分である（表7）。十亀(1973)によって報告が既になされているが、今日的な視点から以下再報告を行う。

(1) 長谷遺跡の立地と現状

長谷遺跡は、道後城北の南に開けた谷である祝谷の最奥部にあり、山田池の東側、北東から南西に延びる舌状丘陵の南東斜面に位置する（図32・33、写真85・86)。標高は約80～100mである。この丘陵の延長と谷を挟んで対峙する丘陵の間を堤として造成されたのが山田池で、丘陵の南東側裾部には県道20号が走る。これらにより遺跡周辺の地形は一部改変を受けながらも、比較的本来の地形をよく留めている。採集地点は日当たりの良い緩斜面で、歴史学研究会による採集時も現在も、柑橘類の果樹園が広がる。なお、松山市埋蔵文化財包蔵地地図では、「49. 長谷遺跡」・「51. 山田池（祝谷）遺物包含地」として一括される中に位置する。

長谷遺跡より下方においては、山田池から南流する永谷川（大川）を中心に、その永谷川にむかって張り出す尾根や、合流する小河川・開析谷によって、地形的にいくつかのまとまりを形成し、遺跡もその地形区分に対応して展開している。

(2) 長谷遺跡周辺の既往調査

祝谷の既往調査については、吉田・濱田(2006)で詳述したので繰り返さない。以下では、長谷遺跡周辺に

写真85　長谷遺跡遠景(南西上から、2006年5月撮影)

写真86　長谷遺跡遠景（南西から、2006年5月撮影)

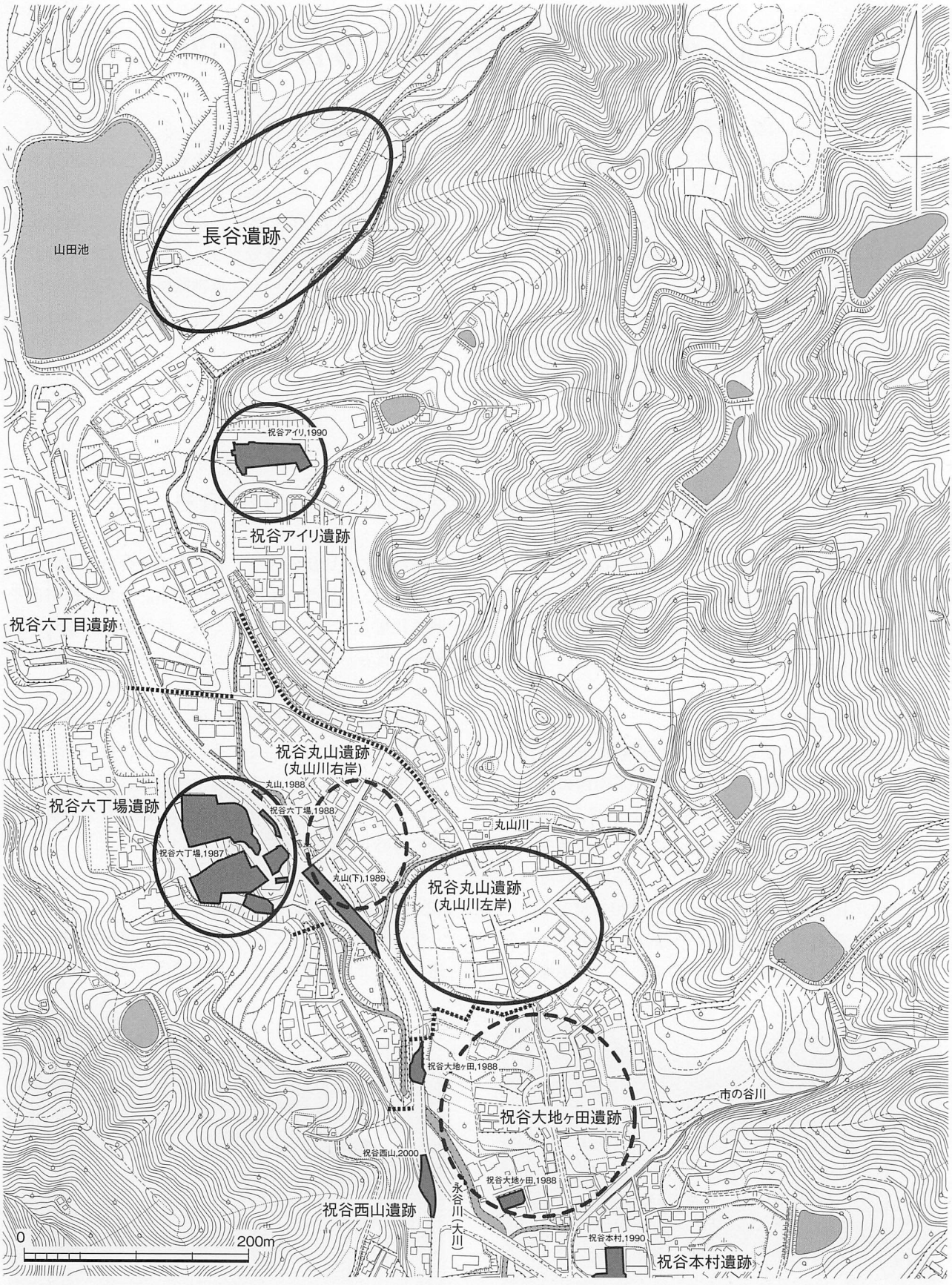


図32　長谷遺跡位置図（縮尺1/5,000）

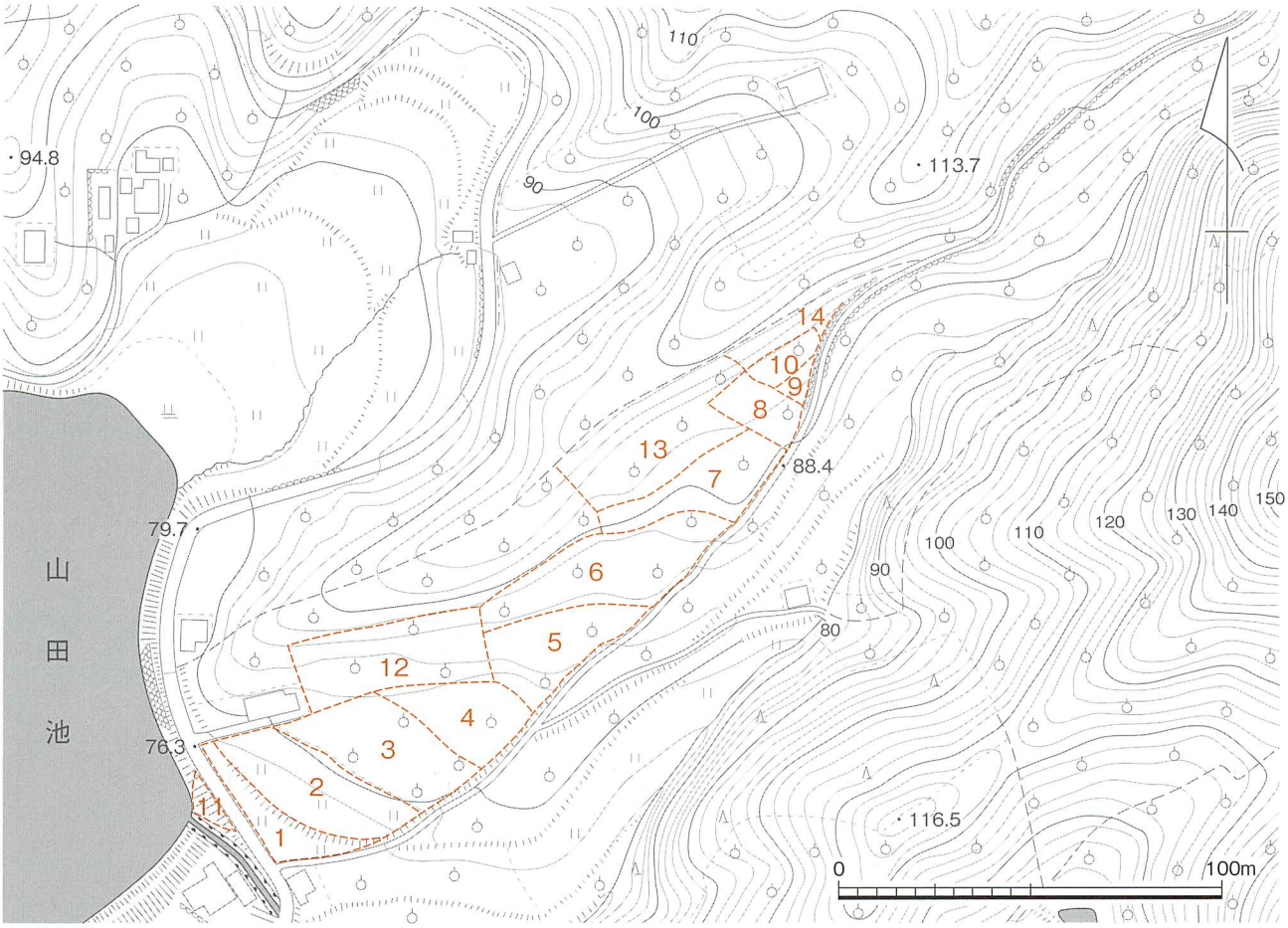


図33　長谷遺跡資料採集地点（縮尺1/2,000、1976年編集松山市都市計画図Ｊ５より作成）

ついてのみ触れておく。

まず隣接する山田池遺跡では、遺物採集の報告はあるものの、詳細は不明である。長谷遺跡と一連の可能性も残る。また、山田池堤の下方では、道路整備に伴って一部発掘調査が行われ、弥生中期から後期の土器・石器が出土するとともに、円筒埴輪や須恵器も出土している（梅木編1989）。

祝谷の谷東側で最も近接するのが、祝谷アイリ遺跡である。長谷遺跡の所在する丘陵と、県道20号が走る谷部を挟んでほぼ平行する丘陵の南側斜面に位置する。長谷遺跡とは約200mを隔てるに過ぎない。弥生中期中葉と後期前葉、古墳後期の遺構・遺物が出土している（梅木編1992）。谷西側では、祝谷六丁目遺跡・祝谷六丁場遺跡があり、南南西約500mを隔てた後者では、弥生中期中葉の遺物が豊富に出土するとともに、平形銅剣Ⅱ式１口が埋納土壙から出土している（宮崎編1991）。

(3) 愛媛大学歴史学研究会による長谷遺跡の調査

愛媛大学歴史学研究会による長谷遺跡の調査は、1973年に遡る。祝谷の遺跡分布調査を進める中で、当該地点においてまとまった遺物を採集したことに端を発する。その後に表面採集による調査を進め、遺物の散布範囲が幅約50m・長さ約300mの斜面に及ぶことを明らかにし、その範囲内を14区に分けて遺物採集を続けている。そして、調査成果は、十亀（1973）において報告され、77点の資料が掲載された。さらに、地区毎の時期別採集状況も提示され、前期から後期にいたる遺跡の消長にまで検討が及んでいる（図39・40）。なお、これ以降の歴史学研究会による活動においても、資料採集の行われたことが、ラベル等から確認できる。

(4) 長谷遺跡採集資料

祝谷丸山遺跡においても同様であったが、表面採集資料のため、表面の磨滅の著しいものがほとんどである。112点を実測した（図34～38、写真87～96、表８）。

１～83は弥生土器、一部古式土師器の可能性の高い

表７　旧歴史学研究会保管長谷遺跡採集資料

番号		資料内容	歴史学研究会整理状況		
			箱書	袋書・ラベル	注記
03	01	弥生中～後期(壺・甕)	'82.2.22 長谷遺跡		長谷
03	02	弥生小片，中世土師器		82.2.22 長谷遺跡	
14	01	弥生中～後期(壺・甕),土師器(高坏),須恵器(坏・甕)		長谷遺跡	長谷
14	02	弥生中～後期(壺・甕)，須恵器(坏・甕・鉢)		長谷遺跡	長谷
14	03	弥生，須恵器(坏・高坏・甕)		長谷遺跡	長谷
14	04	弥生中～後期(壺・甕)		長谷遺跡１区	長谷１区
14	05	弥生(壺底部)１点		長谷遺跡１区	長谷１区
14	06	弥生(壺・甕)，須恵器(坏・甕)		長谷遺跡１区	長谷１区
14	07	弥生中～後期(壺・甕・高坏)，須恵器(坏・甕)		長谷遺跡２区	長谷２区
14	08	弥生中～後期(壺・甕・高坏)，土師器(甕)		長谷遺跡３区	長谷遺跡３区
14	09	弥生，須恵器(壺)		長谷遺跡５区	長谷５区
14	10	弥生(壺・甕・高坏)		長谷遺跡６区	長谷６区
14	11	弥生(甕底部)１点		長谷遺跡９区	長谷９区
14	12	弥生・須恵器小片		長谷遺跡 12 区	長谷 12 区
14	13	弥生(壺底部)１点		長谷遺跡 13 区	長谷遺跡 13 区
14	14	石鏃先端１点		山田池東岸(長谷)集落址 No6 7 区	607 長谷
17	07	土師器，鉄器？		不詳	
24	01	弥生(壺・甕・高坏・器台)	長谷	長谷遺跡	長谷
24	02	弥生，須恵器		長谷遺跡	長谷
24	03	弥生(壺・甕)		長谷遺跡	長谷
24	04	サヌカイト剥片５点		長谷遺跡	長谷
24	05	円柱状？片刃石斧１点		長谷遺跡(山田池東岸住居址) No6-1 区、2 区、4 区	長谷
32	03	弥生，土師器		祝谷 長谷遺跡	
39	37	弥生，土師器	土器類未整理 H .10.3/1	山田池東岸 集落址７区 73 年９月採集	山田池東岸

ものも含む。

１～20は壺。１はヘラ描き沈線２条をもつ胴部上半部。梅木編年のⅠ-3～4様式（以下、梅木（2000）の編年により記述）。２はクシ描き文をもつ破片。Ⅱ～Ⅲ様式か。

３・４は大きく外反する口縁部で、内面に円形浮文をもつ。５は大きく外反して端部を下方に拡張する口縁部。端面には部分的に×字状の沈線文をもつ。６は端部を斜め下方に引き延ばし、７は上下に端部をやや拡張する。８は頸部に断面三角形の貼付突帯をもち、９は頸部の貼付突帯に横長の押圧を施す。10は３条以上の断面三角形貼付突帯をもつ。３～10は、Ⅲ様式に位置づけられる可能性が高い。

11は、外反する口縁部端部に３条の擬凹線を、12は口縁部に擬凹線１条をもつ。13は短く外反する口縁部。14は肩部で、胴部外面に縦ハケ目が一部残り、頸部は横ナデ。15は複合口縁壺。直接接合せず、十亀（1973）では別個体と扱っていたが（図40第４図44・49）、複合口縁接合部に鍔状部を貼り足したのが剥落したものと考え、同一個体とした。複合口縁部に４ないし５条単位のクシ描きによる斜格子文・直線文、鍔状端部に２条の沈線をもつ。16も複合口縁壺の複合口縁部。表面は磨滅するが、平行する凹線状の痕跡が認められる。17はノ字状刺突文とその上に浅い凹線をもつ。複合口縁壺の頸部付近か。18は頸部に扁平幅広の突帯を貼り付け、その上面を斜格子状に刻む。複合口縁壺の頸部とみられる。11・12はⅤ-1様式、13～18はⅤ-2様式前後に位置づけられる。

19はやや立ち気味ながら、二重口縁壺の口縁屈曲部とした。20も同様の部位である。弥生終末から古墳初頭に位置づけられよう。

21～36は甕。21は扁平な破片で傾き不明。３条のヘラ描き沈線をもち、Ⅰ-3～4様式の甕胴部片とした。

22は頸部が直角近くに屈曲する胴部。内面は横ハケ目後ナデ。23は頸部に貼付押圧突帯をもつ。24・25は端部を上方に軽く突出させる口縁部。26は板小口によるノ字状刺突文をもつ胴部。内面下半はハケ目調整前にヘラケズリを行う。27は内外面に縦ハケ目を残し、頸部外面には横ナデを施す。28は胴部の張りが強いが、内面の稜は弱い。29も28同様の器形とみられる。22・

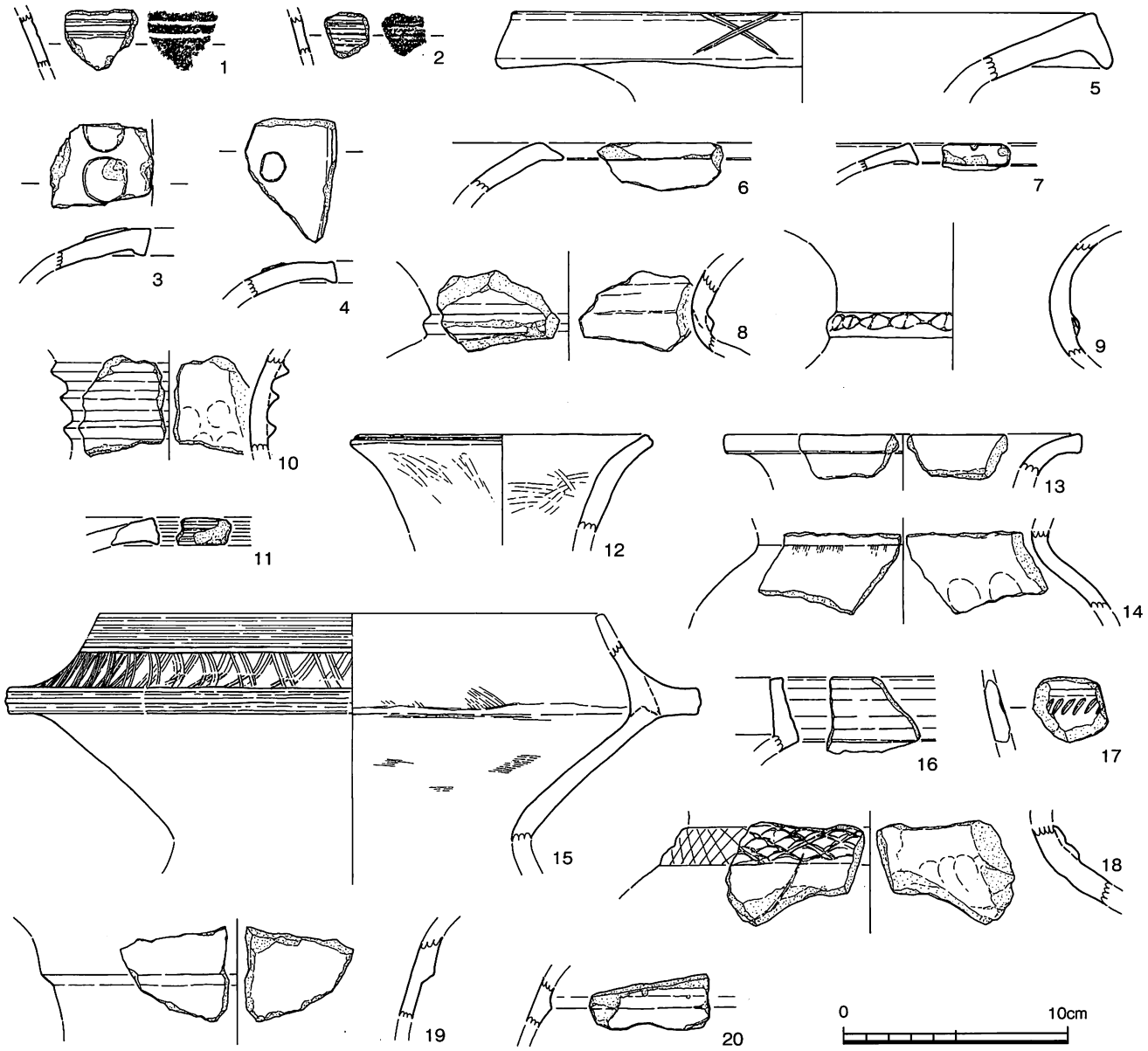


図34　長谷遺跡採集資料（1）（縮尺1/3）

23はⅢ様式、24～27はⅣ様式に、28・29はⅣ～Ⅴ-1様式に位置づけられよう。

30は緩やかに外反する口縁部。端部は横ナデにより凹線状。31はくの字状に屈曲する口縁部で、端部が断面三角形状に肥厚する。32はくの字状に緩やかに屈曲し、33は緩やかに外反する。34はくの字状に屈曲して長く伸びる口縁部。体部には縦方向のハケ目がわずかながら残る。35・36はくの字状に屈曲する口縁部で、鉢の可能性もある。30～32がⅤ-1～2様式、33～36はⅤ-2～3様式。

37～40は鉢。37は内湾する鉢口縁部。器形的に土師器甕とも見えたが、胎土から弥生土器と判断した。Ⅲ様式か。38～40は、短くくの字状に屈曲する口縁部で、内面の稜は不明瞭。39･40は同一個体の可能性がある。Ⅴ-2様式。

41～47は高坏。41はやや低い脚部で、坏底部を円板充填するとともに、下方からも粘土を充填する。42・43は長い脚部。坏底部は円板充填で、脚内面に顕著なシボリ目を残す。43の脚外面は縦方向のミガキが残る。44は脚上部で、径最小部に５条の細いヘラ描き沈線をもち、下部には矢羽根透の一端が認められる。45・46は、脚部上面に坏部を接合するもので、いずれも接合

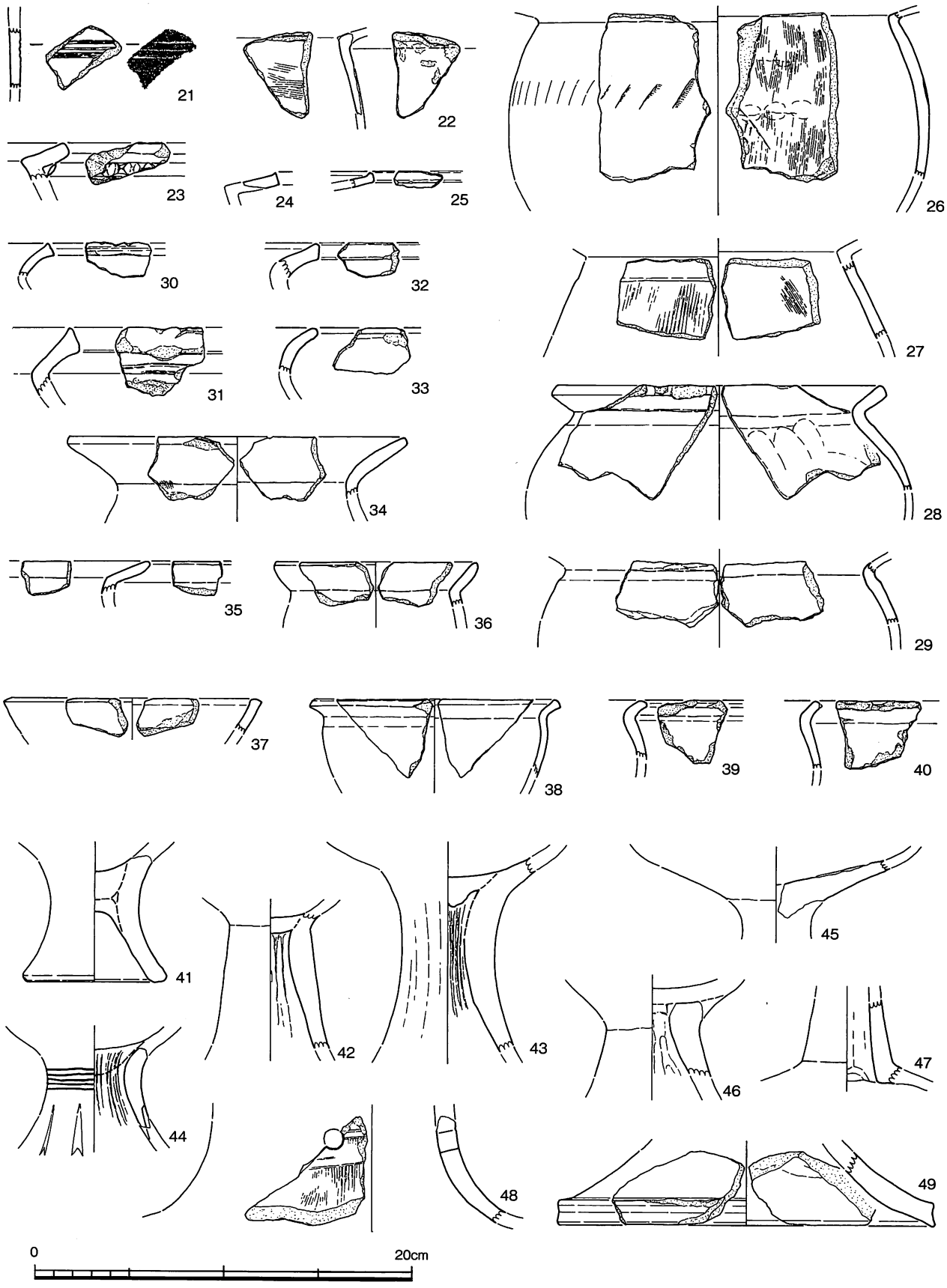


図35　長谷遺跡採集資料(2)(縮尺1/3)

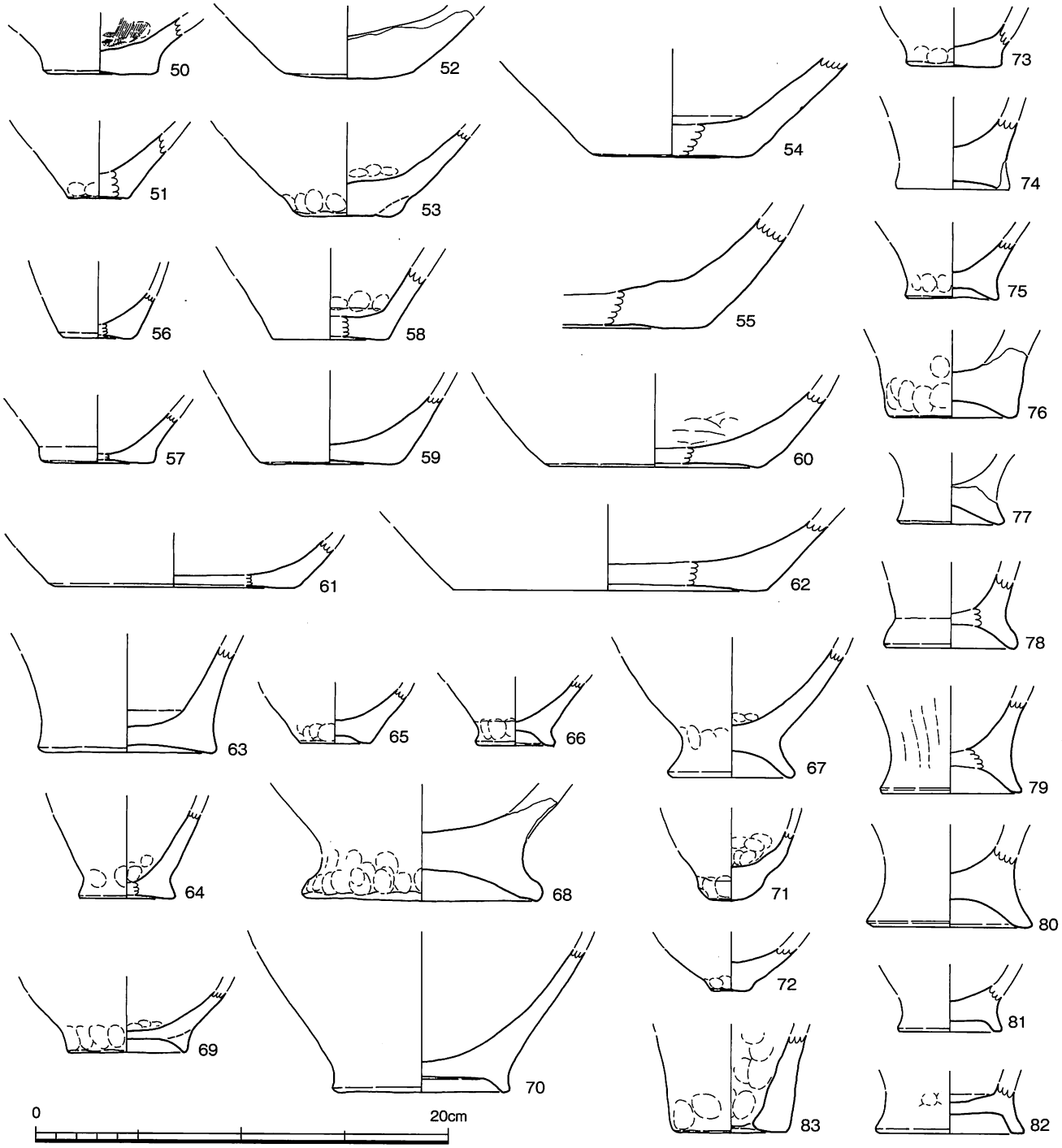


図36　長谷遺跡採集資料（3）（縮尺1/3）

部で剥落する。47は脚屈曲部。内面にヘラケズリは認められない。41～43はⅢ様式。44はⅣ様式。45～47はⅤ-2～4様式。

48は器台筒部裾付近。径1cm強の孔が1箇所残る。体部外面は縦ハケ目。Ⅴ様式。十亀(1973)に掲載された柴村敬次郎氏採集資料（図39第4図2）が類品である。

49はやや厚いが、高坏あるいは脚付鉢の脚端部とした。端部を強く横ナデする。Ⅳ～Ⅴ様式か。

50～83は底部を一括した。50～62が壺の底部。50～55は平底。50は一度上に立ち上がってから胴部へ開き、底内面にハケ目をよく残す。52はやや凸状。53は狭い

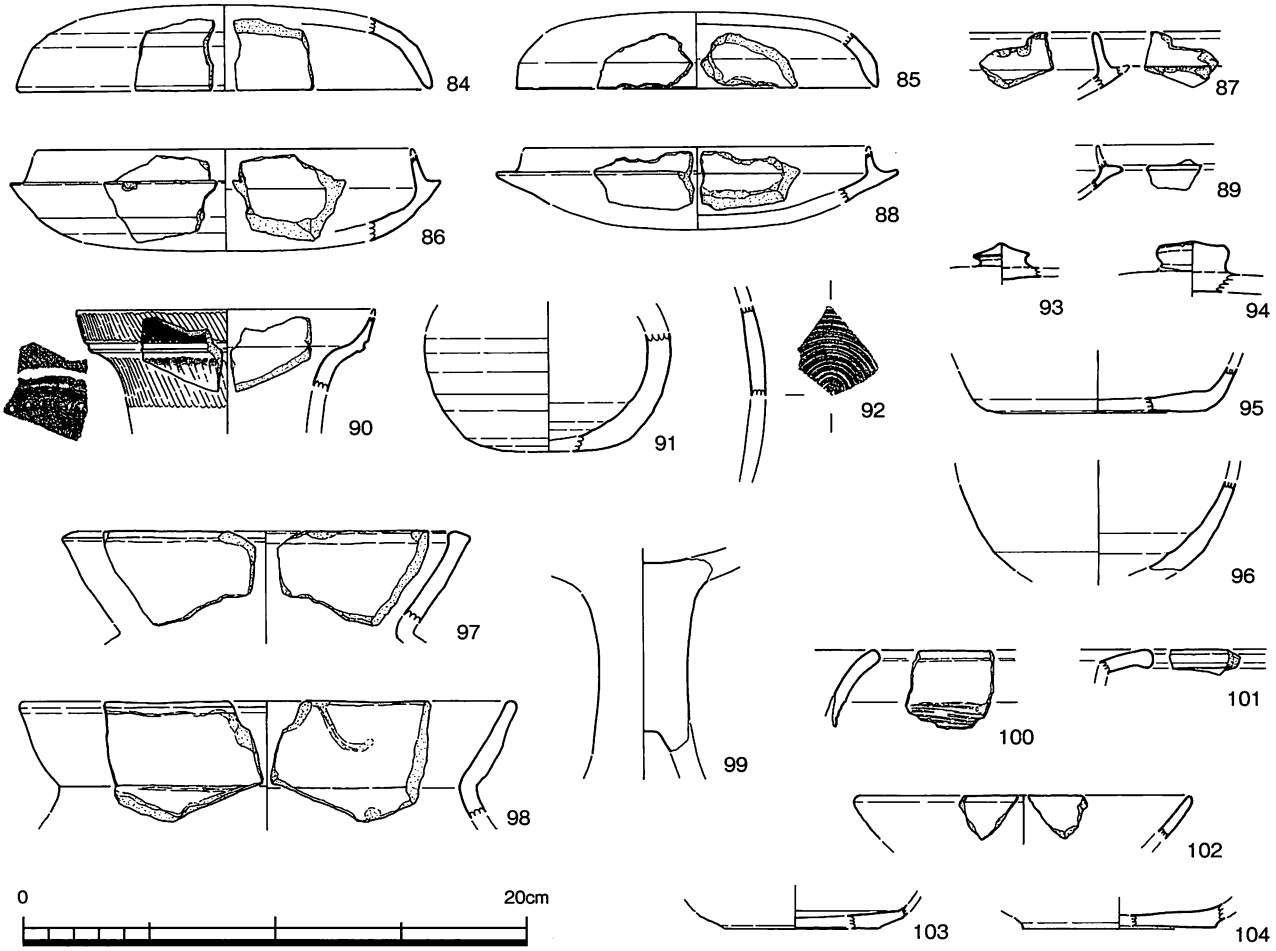


図37　長谷遺跡採集資料(4)(縮尺1/3)

底部外周に粘土紐を貼り足して一回り大きな底部とする。55は大型。56～62はわずかに凹み底。57が一度上に立ち上がる他は、底部から体部へと直接斜めに立ち上がる。50・57がやや古い形状を示す他は、およそⅢ～Ⅴ-2様式の幅で捉えられるものであろう。

63～72は、壺他も含むが、鉢の可能性の高い底部。くぼみ底であるが、63は大きさと急な立ち上がりから、64は外に突出する底部から、ジョッキ形と目される。Ⅲ～Ⅳ様式。65はくぼみ底。66～68はくびれて高台状に立ち上がる上げ底ながら、立ち上がりがやや外開きで、甕とは一線を画す。69・70は高台状の上げ底で、69は断面三角形の突帯を高台状に貼り付ける。65～70はおよそⅢ～Ⅴ-2様式の範疇で捉えられよう。71・72は小型の凸状底部。Ⅴ-3～4様式。

73～82は確実な甕の底部。73は平底で、一度上に立ち上がってから外に開く。74～82はくびれて立ち上がる上げ底、81・82は高台状の上げ底。79は外面に縦方向のナデないしミガキが残る。73がやや古い形状を示す他は、およそⅢ～Ⅴ-2様式の範疇とできる。

83はまっすぐ立ち上がる底部で、内外面にオサエ痕をよく残し、焼成前穿孔がある。甑か。

84～96は須恵器。84・85は坏蓋。84は復元口径16.3cmとやや大型で、焼成はやや軟質。86～89は坏身。86は受け部復元径17.0cmとやや大型。87は径不明ながら、立ち上がりは比較的高い。88は焼きひずみがあり、立ち上がりが低い。89は立ち上がりをほとんど欠く。90は端部と頸部にクシ描き波状文をもつ𤭯口縁部。91は底部外面を回転ヘラケズリする球形の胴部。孔は残らないが𤭯とみられる。やや焼成軟質。92はカキ目の中心部で、提瓶体部とみられる。84～92は6世紀中葉から後葉のものである。

93・94は蓋の宝珠つまみ部。95は坏底部。底部外面は未調整。96は壺体部下半。93～96は7～8世紀代の須恵器である。

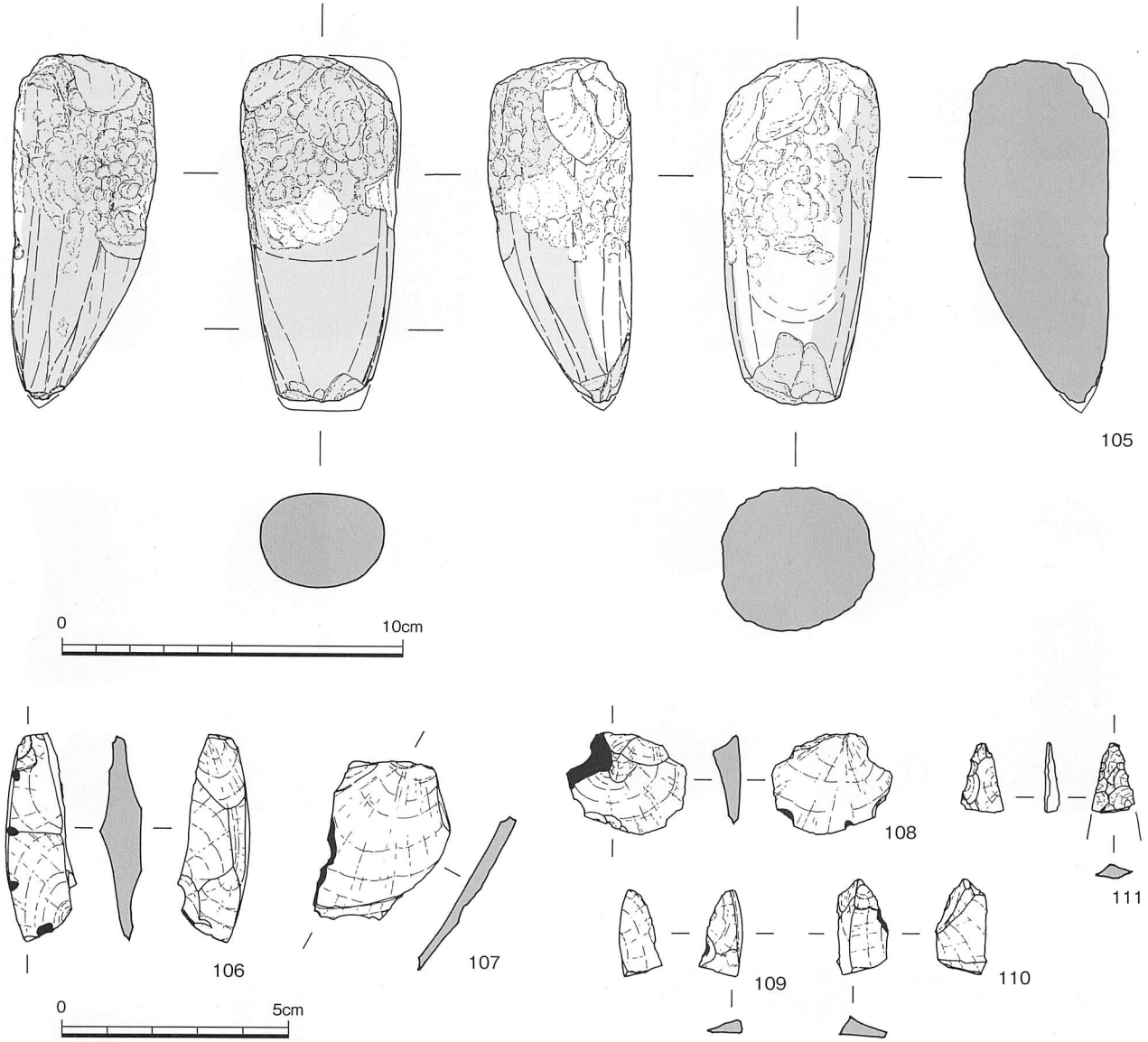


図38　長谷遺跡採集資料(5)(縮尺1/2、2/3)

97～99は土師器。97・98は内湾する甕口縁部。97の端部は若干肥厚する。６世紀代。99は高坏脚部。中実部が長く、上面は坏底面。古代に降るとも考えられたが、隣接する祝谷アイリ遺跡ＳＢ１において同形態のものが出土しており（梅木編1992）、６世紀後葉に位置づけられる。これらは、須恵器の84～92に対応する。

100は土師質土器。緩やかに外反する口縁は丁寧に横ナデされ、体部に深い横ハケ目が残る。101は土師質土器鍋口縁部。102～104は中世土師器坏。102が口縁部で他は底部。104は底部回転糸切りか。

105～111は石器。105は刃部を欠損した柱状片刃石斧とみられるが、石斧としては例外的な砂岩製である。断面円柱状で、身部には敲き石として用いられた際の敲打痕がほぼ全面に及ぶ。表面の約2/3が被熱黒変している。現重量248.3ｇ。

106～111はサヌカイト製石器。106は打点方向を変えて剥離が行われており、残核とみられる。107～110は剥片。特に107と108は薄い剥片で、石鏃等の小型打製石器製作に伴うものとみられる。111は打製石鏃の先端部。残存範囲において、両面とも主要剥離面を残さず、断面も菱形を呈して比較的厚い。現重量0.4ｇ。

今回、再実測・報告する遺物は以上であるが、十亀（1973）とは遺物に異同があるので、解説を付しておきたい。まず、十亀（1973）では掲載されていない遺物である。これには、既に採集済ながら報告を省いた資料と、その後の採集資料がある。前者は、小片な

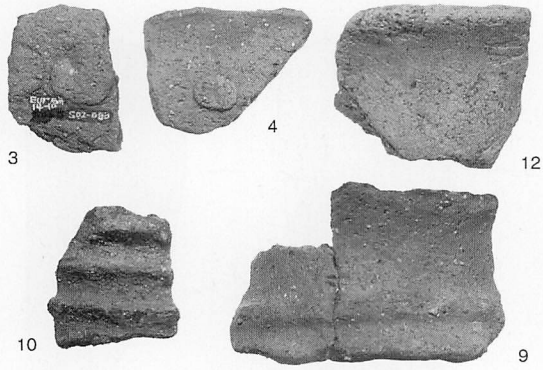


写真87　長谷遺跡採集資料 ①

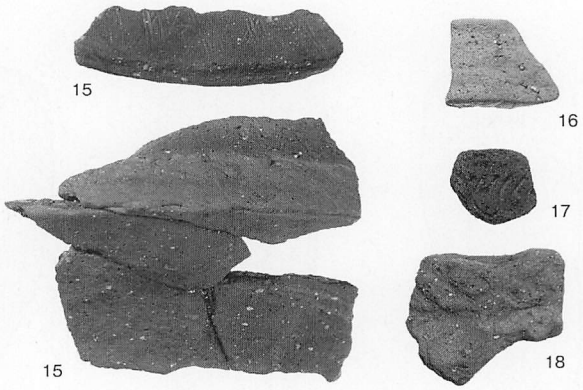


写真88　長谷遺跡採集資料 ②

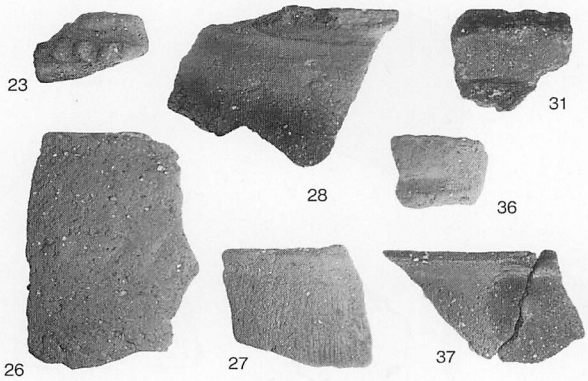


写真89　長谷遺跡採集資料 ③

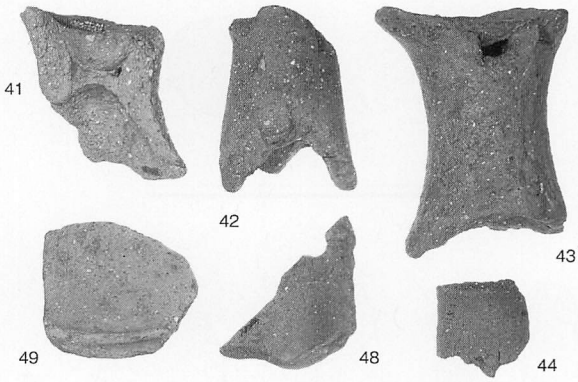


写真90　長谷遺跡採集資料 ④

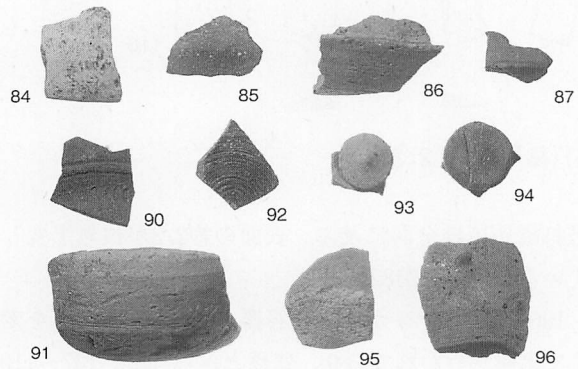


写真91　長谷遺跡採集資料 ⑤

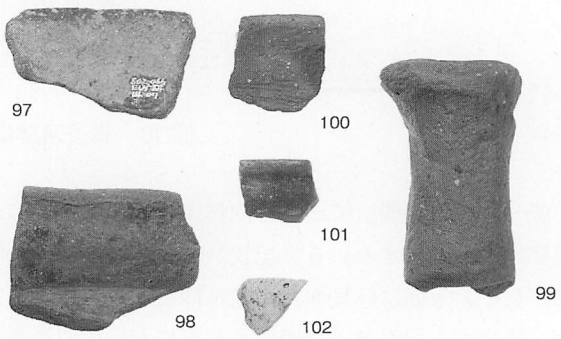


写真92　長谷遺跡採集資料 ⑥

どのため図化しなかった弥生土器23点や石器５点、須恵器13点、土師器他５点である（表８歴研報告番号覧－表記）。古墳時代以降の遺物は基本的に除いていたが、一部は弥生土器として報告されたものがある（97・98・100）。また後者は、「82.2.22長谷遺跡」の箱書あるいはラベルをもつ、登録番号03-01と03-02の資料で、７点が該当する（表８歴研報告番号覧×表記）。

他方、十亀（1973）で報告されながら、現時点で所在不明となっている資料が、番号空きによる掲載漏れ３点（図39第３図15・24・26）を除いても、11点と少なくない。拓本を掲載した遺物（図40第４図35・37・38・40）や、連続する口縁部（図39第３図52～54）であったり、16区採集資料（図39第３図75～77）などである。16区採集資料については、一括して所在不明に

写真93　長谷遺跡採集資料 ⑦

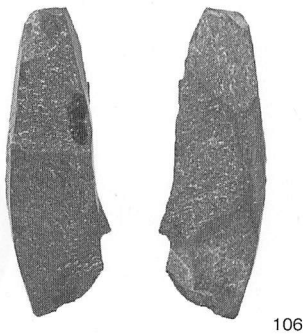


写真94　長谷遺跡採集資料 ⑧

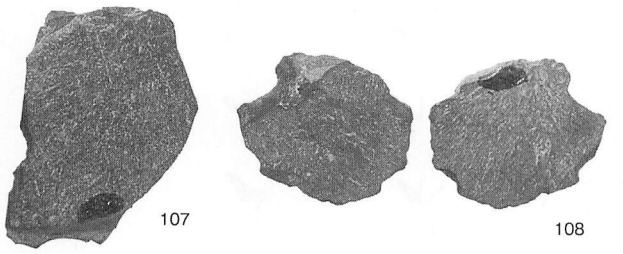


写真95　長谷遺跡採集資料 ⑨

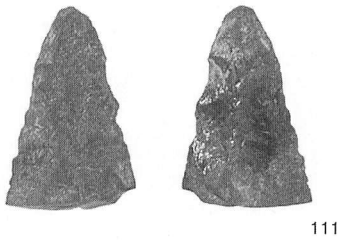


写真96　長谷遺跡採集資料 ⑩

なっていることになるが、石庖丁（図39第３図76）と打製石鏃完形品（図39第３図77）など特徴的な遺物を含む。同様に特徴的な遺物でありながら紛失しているのが、土製円板(図40第４図40)である。図面によれば、中心に小円孔をもち、外周におそらく指押さえを等間隔に配している。類例自体見あたらず、弥生土器かどうかも含めて興味深い資料であるが、残念である。特徴的な遺物が、報告後の保管において遊離してしまった可能性が高いようである。

(5) 長谷遺跡をめぐる諸問題

長谷遺跡採集資料の再整理・報告を行ったが、その成果についてまとめておく。

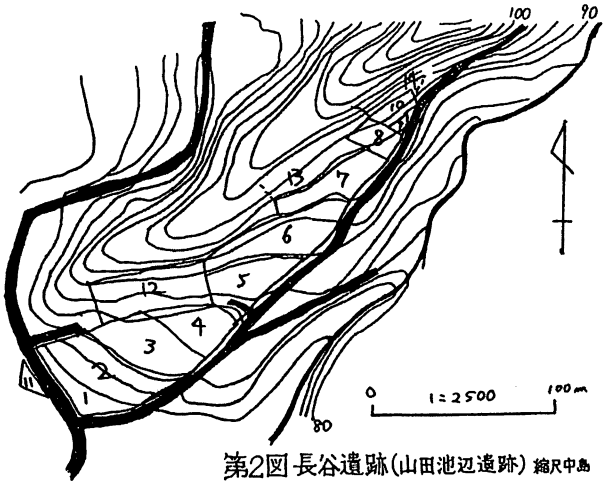
①　遺跡の消長

長谷遺跡採集資料を概観してみると、約８割を弥生土器が占め、弥生中期前葉を遡る遺物が数点、弥生後期後葉から古墳初頭までの遺物が若干の他は弥生中期中葉から後期前葉の遺物が主体を占める。ただし、その期間内でも、中期後葉と見られる遺物は少ない。明らかな壺はなく、甕の体部片と口縁部小片の４点（24～27）と、矢羽根透をもつ高坏（44）１点だけが、確実な該当例に過ぎない。さらに、小破片でも明確な凹線文を伴った端部は認められなかった。採集資料という限界はあるが、これに拠る限り、長谷遺跡の形成は、弥生中期中葉と後期前葉をピークとし、その間の中期後葉は低調であったと判断できる。なお留意点として、鉢と高坏の多さが目立つことも指摘しておきたい。

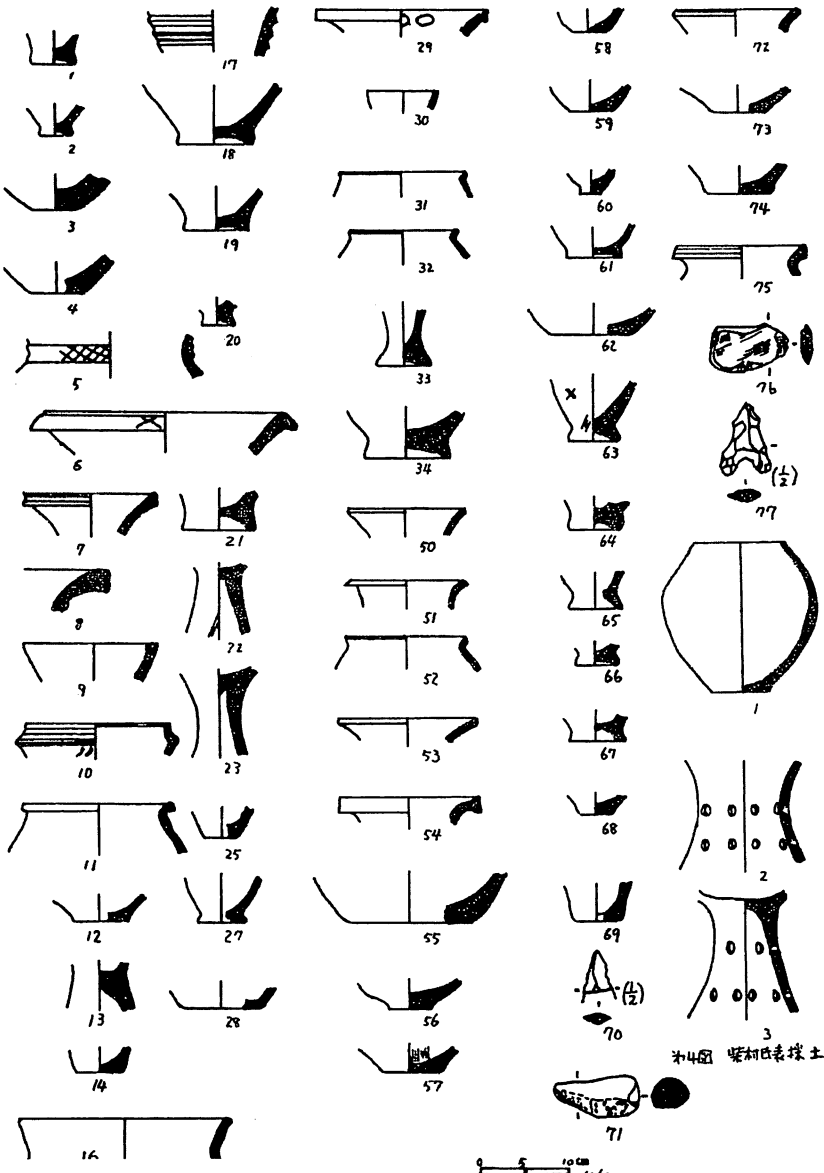
弥生時代以外の遺物としては、須恵器・土師器他があるが、須恵器・土師器は古墳時代後期にまとまる。古墳副葬品の可能性も考えられるが、土師器甕を伴っており、古墳時代後期に生活領域であったことが想定される。古代の須恵器出土もこれに連続するものであろう。この他、土師質土器や中世土師器も出土し、中世に及ぶ遺跡の展開が想定される。

②　遺跡内の様相

十亀(1973)では、採集資料により時期別の地点毎の動向にまで論及しており、同様の検討を今回の報告に基づいても試みた。結果、１～３区と６・７区の、大きく２箇所に採集遺物が集中する傾向を再確認できた。両地点間には、採集資料による限り、遺物分布の希薄な地区を挟む。さらに、遺跡の消長においては、両地点間で明確な差異は認められなかった。十亀(1973)が指摘していた前期段階の差異は、今回３区採集の土器が確認できたことから（21)、現状で想定



第2図 長谷遺跡(山田池辺遺跡) 縮尺中島



第3図 弥生式土器・石器実測図

1-7(1区)8-15(2区)16-24(3区)25·26(4区)27·28(5区)29~34(6区)35~71(7区)72·73(12区)74(13区)75~77(16区)

第4図 柴垣氏表採土器

図39 十亀(1973)報告図(1)

第4図 松山市山田・長谷遺跡-7区出土の弥生式土器

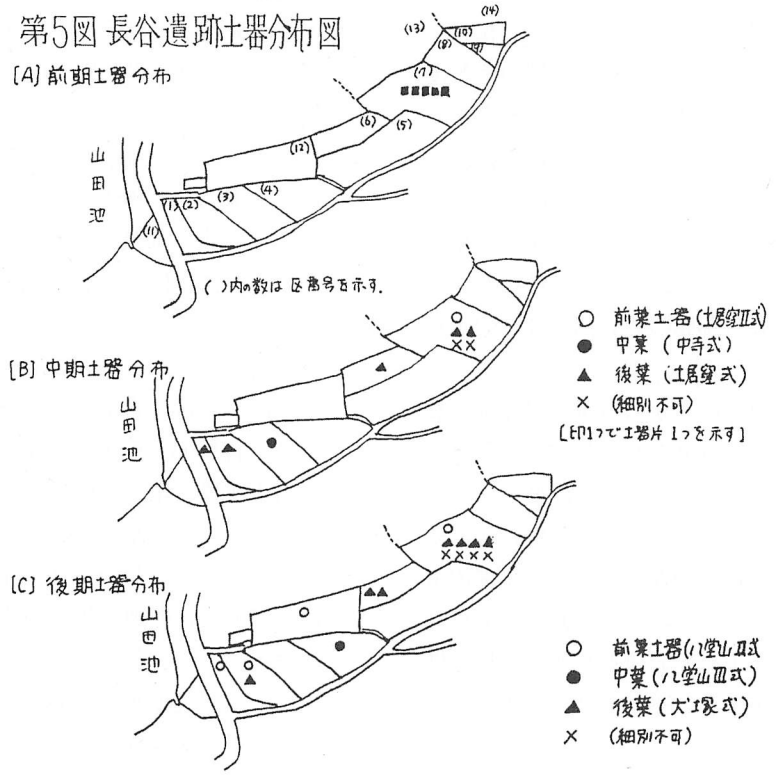


図40　十亀(1973)報告図(2)

するのは難しい。したがって、今回報告している範囲の長谷遺跡においては、その中に２箇所の遺物集中地点が存在し、しかも同様の消長を辿ることが想定されることになる。

１～３区と６・７区の２地点は、南東方向に傾斜する丘陵斜面の中でも、南に斜面が張り出し、一帯の中では最も緩やかな傾斜面である。範囲内において、最も居住に適した地形とできよう。したがって、上記２地点への採集遺物集中は、地形的まとまりに基づいた生活の単位に対応する可能性が高い。長谷遺跡は、二つの単位を内包しながら、両者が同様の消長を辿ることによって形成されたとみることができよう。

③　周辺遺跡との関係

ところで、祝谷地区の遺跡群の展開については、既に吉田・濱田(2006)で概述した。すなわち、中期中葉段階には、小河川に開析された間の各微高地上に、小規模ながら集落が展開していた様子が窺えた。それが中期後葉段階となると、生活痕跡が激減し、後期になって再び盛行するのである。長谷遺跡においても、しかもその内包する２地点ともに、祝谷地区の遺跡群の動向と軌を一にしてることが、今回改めて確認されたことになる。

なお、祝谷地区の遺跡群の中でも、近接する祝谷アイリ遺跡に採集遺物相は最も近い。弥生中期中葉と後期前葉、さらには古墳時代後期における遺跡形成まで一致するのである。谷を挟んで平行する丘陵に対置し、直線距離約200mを隔てる。ただし、ともに南側斜面に位置し、相互に視認関係はなかったとみられ、やはり別単位として認識すべき両遺跡である。それが同一の消長を辿ることは、両遺跡間の強い関係性を想定せずにはいられない。

祝谷地区の遺跡群の中期中葉から後葉への変動においては、その延長に文京遺跡の存在を想定した（吉田・濱田2006)。後期前葉の長谷遺跡と祝谷アイリ遺跡は、その文京遺跡が最盛期を過ぎた段階にあたる。そして、同時期には、文京遺跡の西側、松山大学構内遺跡が形成される（梅木編1991・宮内編1995)。道後城北遺跡群の展開を考える上で、丘陵部の祝谷地区と低地部の文京地区との連動性を、やはり強く示唆するものであろう。

④　石器の製作

そのような連動性・関係性の想定される中で、長谷遺跡採集資料中に、サヌカイト製石器製作に関わる資料の存在することは重要である。サヌカイト製打製石鏃先端の破片であり、打製石鏃等の小型石器製作に伴うとみられる剥片や残核である。未整理ながら、祝谷丸山遺跡でも同様のサヌカイト製石器製作に伴う資料があり、祝谷六丁場遺跡や祝谷畑中遺跡では、姫島産黒耀石や赤色頁岩の石器製作に関わる資料がある（加島2001)。また、祝谷六丁場遺跡では、片岩製の片刃石斧類の製作も行われている。このような、祝谷地区の遺跡における石器製作が、道後城北遺跡群における祝谷地区の遺跡群の性格、さらには動向を左右したことも考慮しておく必要があろう。　　（吉田）

[参考文献]

梅木寛編1989『一般県道「菅沢－松山線」埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』埋蔵文化財発掘調査報告書第33集、㈶愛媛県埋蔵文化財調査センター

梅木謙一2000「伊予中部地域」『弥生土器の様式と編年』、木耳社

梅木謙一編1991『松山大学構内遺跡－第２次調査－』松山市埋蔵文化財調査報告書第20集、松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター

梅木謙一編1992『祝谷アイリ遺跡』松山市埋蔵文化財調査報告書第25集、松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

加島次郎2001「松山平野にみる姫島産国耀石と赤色硅質岩～東九州と南予から伝わった石器素材～」『愛媛大学考古学研究室第１回公開シンポジウム資料　字和の古代文化を解剖する～九州・瀬戸内・南海文化の十字路に立って～』愛媛大学考古学研究室

十亀幸雄1973「松山市長谷遺跡の分布調査と考察」『歴史学研究月報』第58号、愛媛大学歴史学研究会

宮内慎一編1995『松山大学構内遺跡－第３次調査－』松山市埋蔵文化財調査報告書第49集、松山市教育委員会・松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

宮崎泰好編1991『祝谷六丁場遺跡―調査報告1－』松山市埋蔵文化財調査報告書第24集、松山市立埋蔵文化財センター

吉田広・濱田美加2006「旧愛媛大学歴史学研究会保管の丸山遺跡採集資料（その１）」『愛媛大学埋蔵文化財調査室年報－2004年度－』愛媛大学埋蔵文化財調査報告ＸＶ

表8　長谷遺跡採集遺物観察表

番号				表採地点	種別	器種	部位	形状・文様・調整・色調・胎土・焼成などの特徴
挿図	実測	整理	歴研					
1	039	14-02	39	長谷７区	弥生土器	壺	体部	ヘラ描沈線２条以上。内外面ナデか。内外面にぶい黄色。２㎜以下の石英・長石やや含む。
2	040	14-02	36	長谷７区	弥生土器	壺	体部	クシ描文。内外面灰白色。微細な石英・長石・雲母含む。
3	083	14-10	29	長谷６区	弥生土器	壺	口縁部	口縁内面円形浮文。口縁部横ナデ。内外面橙色。２㎜以下の石英･長石･雲母・赤色粒やや多く含む。
4	035	14-02	43	長谷７区	弥生土器	壺	口縁部	口縁内面円形浮文。内外面磨滅、口縁部横ナデ。内外面明赤褐色、断面浅黄橙色。２㎜以下の石英・長石やや、微細な雲母・赤色粒含む。
5	045	14-04	6	長谷１区	弥生土器	壺	口縁部	下垂口縁。口縁部部分的に×字状沈線文。口縁部横ナデ、内外面ナデ。内外面灰黄褐色。２㎜以下の石英・長石やや多く含む。
6	100	24-02	－	長谷	弥生土器	壺	口縁部	内外面磨滅。内外面浅黄橙色。２㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒少し含む。
7	063	14-07	－	長谷２区	弥生土器	壺	口縁部	口縁部横ナデ。内外面褐色。２㎜以下の石英･長石･雲母･赤色粒含む。
8	005	03-02	×	長谷	弥生土器	壺	頸部	頸部断面三角形貼付突帯。内外面横ナデ。内外面にぶい黄橙色。１㎜以下の石英・長石・雲母含む。
9	093	24-01	－	長谷	弥生土器	壺	頸部	頸部貼付押圧突帯。内外面磨滅。外面にぶい黄橙色、内面褐灰色。５㎜以下の石英・長石多く含む。
10	070	14-08	17	長谷３区	弥生土器	壺	頸部	３条以上の断面三角形貼付突帯。内面オサエ。外表面明赤褐色（赤塗りか）、外面浅黄橙色、内面黄橙色。３㎜以下の石英・長石多く含む。
11	101	24-02	－	長谷	弥生土器	壺	口縁部	３条の擬凹線。外面褐灰色､内面橙色。１㎜以下の石英･長石少し含む。
12	010	14-01	50	長谷７区	弥生土器	壺	口縁部	口縁端部１条の擬凹線。内外面横～斜ミガキ。内外面浅黄橙色。３㎜以下の石英・長石やや、微細な雲母・赤色粒含む。
13	011	14-01	51	長谷７区	弥生土器	壺	口縁部	内外面磨滅。内外面橙色。３㎜以下の石英・長石多く含む。
14	038	14-02	－	長谷	弥生土器	壺	頸部	外面頸部横ナデ･体部縦ハケ目、内面オサエ。外面にぶい褐色･有黒斑、内面明褐色。２㎜以下の石英・長石、微細な雲母多く含む。
15	034	14-01	44	長谷７区	弥生土器	壺	口縁部	複合口縁。複合口縁部に４ないし５条単位のクシ描による斜格子文・直線文、鍔状部に２条の沈線。内面横～斜ハケ目。外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色､鍔状部片灰黄褐色。５㎜以下の石英･長石やや多く、微細な雲母・赤色粒含む。
		14-02	・	長谷７区				
		17-07	49	不詳				
		24-01		長谷				
16	060	14-07	10	長谷２区	弥生土器	壺	口縁部	複合口縁部。条数不明ながら口縁部に沈線。内外面磨滅。内外面浅黄橙色。２㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。
17	105	24-03	47	長谷	弥生土器	壺	頸部？	複合口縁か。ノ字状列点文。内外面明赤褐色。２㎜以下の石英･長石やや、微細な雲母多く含む。
18	046	14-04	5	長谷１区	弥生土器	壺	頸部	頸部幅広の斜格子状沈線を施す貼付突帯。内外面磨滅。外面にぶい橙色、内面褐灰色。２㎜以下の石英・長石・赤色粒やや含む。
19	098	24-01	－	長谷	土師器？	壺	口縁部	二重口縁部か。内外面磨滅。内外面浅橙色。３㎜以下の石英・長石・赤色粒やや多く含む。
20	099	24-01	－	長谷	土師器？	壺	口縁部	二重口縁部か。内外面磨滅。内外面浅黄橙色。２㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。
21	073	14-08	－	長谷３区	弥生土器	甕	体部	３条のヘラ描沈線。外面にぶい黄橙色、内面褐灰色。２㎜以下の石英･長石・雲母やや含む。
22	095	24-01	－	長谷	弥生土器	甕	体部	外面剥落、内面横ハケ目・ナデ。内外面明赤褐色。２㎜以下の石英・長石やや多く含む。
23	037	14-02	41	長谷７区	弥生土器	甕	頸部	頸部貼付押圧突帯。内外面磨滅。外面橙色、内面にぶい黄橙色。２㎜以下の石英・長石・赤色粒含む。
24	007	03-02	×	長谷	弥生土器	甕	口縁部	内外面浅黄橙色、表面明赤褐色。２㎜以下の石英・長石、微細な雲母・赤色粒含む。
25	115	32-03	－	長谷	弥生土器	甕	口縁部	口縁部横ナデ。内外面橙色。２㎜以下の石英・長石・雲母含む。
26	002	03-01	×	長谷	弥生土器	甕	体部	体部板小口によるノ字状押圧文。外面磨滅、内面下半オサエ・ヘラケズリ・縦ハケ目、内面上半オサエ・縦ハケ目。内外面橙色。３㎜以下の石英・長石・赤色粒やや多く含む。
27	022	14-01	48	長谷７区	弥生土器	甕	体部	外面頸部横ナデ・体部縦ハケ目、内面縦ハケ目。内外面にぶい黄橙色。２㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。外面下半煤付着。
28	062	14-07	11	長谷２区	弥生土器	甕	上半部	口縁部横ナデ、内面オサエ･ナデ。外面にぶい黄橙色、内面にぶい橙色。２㎜以下の石英・長石含む。
29	108	24-03	－	長谷	弥生土器	甕	頸部	内外面磨滅。内外面にぶい褐色。２㎜以下の石英･長石･雲母やや含む。

番号				表採地点	種別	器種	部位	形状・文様・調整・色調・胎土・焼成などの特徴
挿図	実測	整理	歴研					
30	102	24-02	−	長谷	弥生土器	甕	口縁部	口縁部１条の凹線か。内外面磨滅。内外面にぶい橙色。２㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。
31	059	14-07	8	長谷２区	弥生土器	甕	口縁部	口縁部横ナデ、頸部外面横ハケ目。内外面褐色。２㎜以下の石英・長石・赤色粒を多く、特に雲母の微細粒多く含む。
32	118	39-37	−	長谷	弥生土器	甕	口縁部	内外面磨滅。内外面褐色。２㎜以下の石英・長石・赤色粒を多く、雲母を特に多く含む。
33	094	24-01	−	長谷	弥生土器	甕	口縁部	内外面磨滅。内外面橙色。２㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。
34	106	24-03	−	長谷	弥生土器	甕	口縁部	内外面磨滅、外面体部縦ハケ目。内外面にぶい黄橙色。２㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。
35	021	14-01	−	長谷７区	弥生土器	甕？	口縁部	口縁部外面横ナデ。内外面明褐色。１㎜以下の石英・長石・赤色粒やや含む。
36	107	24-03	−	長谷	弥生土器	甕？	口縁部	内外面磨滅。内外面にぶい黄橙色。２㎜以下の石英・長石・雲母含む。
37	084	14-10	30	長谷６区	弥生土器	鉢	口縁部	内外面磨滅。内外面灰白色。１㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。
38	001	03-01	×	長谷	弥生土器	鉢	上半部	口縁部横ナデ。内外面橙色、外面有黒斑。内外面橙色。３㎜以下の石英・長石多く、微細な雲母・赤色粒含む。
	006	03-02	×	長谷				
39	085	14-10	31	長谷６区	弥生土器	鉢	口縁部	口縁部横ナデ、内面ナデか。内外面明赤褐色。１㎜以下の石英・長石やや、微細な雲母やや多く含む。086と同一個体の可能性あり。
40	086	14-10	32	長谷６区	弥生土器	鉢	口縁部	口縁部横ナデ、内面ナデか。内外面明赤褐色。２㎜以下の石英・長石やや、微細な雲母やや多く含む。085と同一個体の可能性あり。
41	087	14-10	33	長谷６区	弥生土器	高坏	脚部	坏部円板充填。内外面磨滅。脚内外面・坏外面浅黄橙色、坏内面橙色。３㎜以下の石英・長石多く含む。
42	076	14-08	22	長谷３区	弥生土器	高坏	脚部	坏部円板充填。外面磨滅、内面シボリ目。３㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。
43	077	14-08	23	長谷３区	弥生土器	高坏	脚部	坏部円板充填。外面縦ミガキ、脚内面シボリ目、坏内面ナデ。３㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。
44	042	14-02	42	長谷７区	弥生土器	高坏	脚部	脚上部に５条の細いヘラ描沈線、下部に矢羽根状透。坏部円板充填、脚内面シボリ目。内外面明赤褐色。１㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。
45	103	24-02	−	長谷	弥生土器	高坏	坏部	内外面磨滅。脚との接合部で剥落。内外面橙色。１㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや多く含む。
46	004	03-01	×	長谷	弥生土器	高坏	脚部	外面磨滅、内面シボリ目・ナデ。内外目灰白～褐灰色。３㎜以下の石英・長石やや、微細な雲母含む。
47	096	24-01	−	長谷	弥生土器	高坏	脚部	外面磨滅、内面シボリ目・オサエ。内外面橙色。１㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む。
48	097	24-01	45	長谷	弥生土器	器台	筒部	円形透。外面縦ハケ目。内外面橙色。１㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。
49	052	14-04	7	長谷１区	弥生土器	高坏？	脚裾部	脚端部横ナデ。外面にぶい橙色、内面灰白色。２㎜以下の石英・長石やや含む。
50	014	14-01	57	長谷７区	弥生土器	壺	底部	外面ナデ、内面オサエ・ハケ目。外面明赤褐色、内面褐灰色。１㎜以下の石英・長石含む。
51	056	14-06	−	長谷１区	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅、底部外側面オサエ。内外面橙色。３㎜以下の石英・長石やや含む。
52	047	14-04	3	長谷１区	弥生土器	壺	底部	外面磨滅、内面剥落。外面橙色。５㎜以下の石英・長石多く、微細な雲母含む。
53	013	14-01	56	長谷７区	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅、底部内外面オサエ。内外面にぶい黄橙色、底外面有黒斑。３㎜以下の石英・長石、細かい雲母・赤色粒含む。
54	048	14-04	4	長谷１区	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。内外面橙色。２㎜以下の石英・長石含む。
55	012	14-01	55	長谷７区	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅、底部内面オサエ。外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙色。３㎜以下の石英・長石多く、微細な雲母含む。
56	020	14-01	68	長谷７区	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。外面黒褐色、内面橙色。１㎜以下の石英・長石・雲母含む。
57	061	14-07	12	長谷２区	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。外面灰白色、内面浅黄橙色。２㎜以下の石英・長石やや多く含む。
58	079	14-09	28	長谷５区	弥生土器	壺	底部	外面磨滅、内面オサエ。外面褐灰色、内面明赤褐色。１～３㎜大の石英・長石多く、微細な雲母・角閃石やや多く含む。

番号				表採地点	種別	器種	部位	形状・文様・調整・色調・胎土・焼成などの特徴
挿図	実測	整理	歴研					
59	091	14-13	74	長谷13区	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。内外面明黄褐色、底部有黒斑。3㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。
60	019	14-01	62	長谷7区	弥生土器	壺	底部	外面磨滅、内面ナデ。外面にぶい橙～橙色、内面浅黄橙色。2㎜以下の石英・長石やや、微細な雲母含む。
61	016	14-01	59	長谷7区	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。外面黒褐色、内面褐灰色。1㎜以下の石英・長石・雲母含む。
62	080	14-09	－	長谷5区	弥生土器	壺	底部	内外面磨滅。内外面明赤褐色。3㎜以下の石英・長石・赤色粒やや多く含む。
63	072	14-08	19	長谷3区	弥生土器	ジョッキ形	底部	内外面磨滅。外面橙色、内面にぶい黄橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母をやや含む。
64	081	14-09	27	長谷5区	弥生土器	ジョッキ形	底部	底部内外面オサエ。内外面にぶい黄橙色、底部外面有黒斑。2㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。
65	015	14-01	58	長谷7区	弥生土器	鉢？	底部	内外面磨滅、底部側面オサエ。外面にぶい黄橙色・底部有黒斑、内面浅黄色。精良な胎土に、微細な石英・長石・雲母含む。
66	051	14-04	2	長谷1区	弥生土器	鉢	底部	底外側面オサエ・横ナデ、内面ナデ。外面橙色、内面にぶい黄橙色。3㎜以下の石英・長石・雲母やや多く含む。
67	023	14-01	63	長谷7区	弥生土器	鉢	底部	内外面磨滅、底部内外面オサエ。外面明赤褐色、内面黒褐色。3㎜以下の石英・長石多く含む。
68	053	14-05	34？	長谷1区	弥生土器	鉢	底部	内外面磨滅、底部外側面オサエ。内外面にぶい黄橙色。5㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む。
69	018	14-01	61	長谷7区	弥生土器	鉢？	底部	内外面磨滅、底部内外面オサエ。外面浅黄橙色、内面黒褐色。2㎜以下の石英・長石やや多く、微細な雲母含む。
70	071	14-08	18	長谷3区	弥生土器	鉢？	底部	内外面磨滅。外面明黄褐色、内面にぶい橙色。1～5㎜大の石英・長石多く、微細な雲母・赤色粒やや多く含む。
71	003	03-01	×	長谷	弥生土器	鉢	底部	内外面オサエ。内外面にぶい黄橙色、外面有黒斑。3㎜以下の石英・長石多く含む。
72	017	14-01	60	長谷7区	弥生土器	鉢	底部	内外面磨滅、底部外側面オサエ。外面橙色、内面灰白色。1㎜以下の石英・長石・赤色粒含む。
73	054	14-06	－	長谷1区	弥生土器	甕	底部	底部外側面オサエ。外面橙色、内面灰褐色。2㎜以下の石英・長石やや、微細な雲母やや多く含む。
74	064	14-07	13	長谷2区	弥生土器	甕	底部	内外面磨滅。外面明赤褐色、内面灰白色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。
75	050	14-04	1	長谷1区	弥生土器	甕	底部	底部外側面オサエ・横ナデ、内面ナデ。内外面明赤褐色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む。
76	024	14-01	64	長谷7区	弥生土器	甕	底部	外面オサエ。内外面明赤褐色、外面有黒斑。5㎜以下の石英・長石多く含む。
77	075	14-08	20	長谷3区	弥生土器	甕	底部	外面磨滅、内面剥落。外底面明赤褐色、外面橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。
78	025	14-01	65	長谷7区	弥生土器	甕	底部	内外面磨滅、底部外面横ナデ。外面にぶい橙色、内面灰白色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む。
79	055	14-06	－	長谷1区	弥生土器	甕	底部	外面縦方向のナデか。外面橙色、外底面褐灰色、内面灰白色。1㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒含む。
80	074	14-08	21	長谷3区	弥生土器	甕	底部	内外面磨滅。外面にぶい橙色、内面褐灰色。2㎜以下の石英・長石・雲母やや含む。
81	026	14-01	66	長谷7区	弥生土器	甕	底部	内外面磨滅。外面橙色、内面黒褐色。2㎜以下の石英・長石多く含む。
82	027	14-01	67	長谷7区	弥生土器	甕	底部	外面オサエ・横ナデ、底部ナデ、内面ナデ。外面明赤褐色、外底面黒褐色、内面褐灰色。2㎜以下の石英・長石、微細な雲母含む。
83	041	14-02	69	長谷7区	弥生土器	甑？	底部	底部焼成前穿孔。内外面オサエ。内外面にぶい橙色。5㎜以下の石英・長石・雲母多く含む。
84	029	14-01	－	長谷7区	須恵器	坏蓋	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰白色、断面浅黄橙色。微細な石英・長石含む。焼成やや軟質。
85	104	24-02	－	長谷	須恵器	坏蓋	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰色。石英・長石の細粒少し含む。
86	030	14-01	－	長谷7区	須恵器	坏身	口縁部	内外面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ。内外面灰白色。微細な石英・長石含む。
87	031	14-01	－	長谷7区	須恵器	坏身	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。微細な石英・長石含む。
88	043	14-03	－	長谷	須恵器	坏身	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰白色。1㎜以下の石英・長石含む。
89	068	14-07	－	長谷2区	須恵器	坏蓋	口縁部	内外面回転ナデ。内外面灰色。1㎜前後の石英・長石少し含む。

番号				表採地点	種別	器種	部位	形状・文様・調整・色調・胎土・焼成などの特徴
挿図	実測	整理	歴研					
90	044	14-03	−	長谷	須恵器	甕	口縁部	内外面回転ナデ。口縁部クシ描波状文、頸部クシ描波状文。内外面灰色。1㎜以下の石英・長石含む。
91	082	14-09	−	長谷5区	須恵器	壺	底部	底部回転ヘラケズリ、内外面回転ナデ。内外面灰白色。1㎜以下の石英・長石含む。
92	058	14-06	−	長谷1区	須恵器	提瓶	体部	カキ目中心部。内外面灰色。石英・長石の微細粒わずかに含む。
93	067	14-07	−	長谷2区	須恵器	坏蓋	つまみ	やや扁平な宝珠つまみ。内外面灰白色。微細な石英・長石わずかに含む。
94	057	14-06	−	長谷1区	須恵器	坏蓋	つまみ	扁平な宝珠つまみ。外面灰色、内面灰白色。石英・長石・雲母の細粒少し含む。
95	032	14-01	−	長谷7区	須恵器	坏	口縁部	内外面回転ナデ、底部未調整。内外面灰白色。微細な石英・長石やや含む。焼成やや軟質。
96	069	14-07	−	長谷2区	須恵器	壺	体部	底部回転ヘラケズリ、内外面回転ナデ。内外面灰白色。微細な石英・長石少し含む。自然釉点状に付着、焼膨れあり。
97	066	14-07	9	長谷2区	土師器	甕	口縁部	内外面磨滅。外面から口唇部赤灰色、内面明赤褐色。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。
98	078	14-08	16	長谷3区	土師器	甕	口縁部	内外面横ナデ。内外面橙色。石英・長石・雲母・角閃石の微細粒やや含む。
99	028	14-01	−	長谷7区	土師器	高坏	脚部	中実。表面磨滅。表面橙色。2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒やや含む。
100	090	14-12	72	長谷12区	土師質土器	甕	口縁部	口縁部横ナデ、体部外面横ハケ目。外面にぶい褐色、内面褐灰色。2㎜前後の石英・長石少し、雲母の微細粒やや含む。
101	033	14-01	−	長谷7区	土師質土器	鍋	口縁部	口縁部横ナデ。内外面褐灰色。微細な石英・長石・雲母・赤色粒含む。
102	116	32-03	−	長谷	中世土師器	坏	口縁部	口縁部横ナデ。内外面灰白色。微細な石英・長石わずかに含み、精良。
103	009	03-02	×	長谷	中世土師器	坏	底部	内外面横ナデ。内外面にぶい黄橙色。精良な胎土に微細な石英・長石・雲母・赤色粒含む。
104	117	32-03	−	長谷	中世土師器	坏	底部	内外面磨滅、底部回転糸切りか。内外面浅黄橙色。微細な石英・長石・雲母・赤色粒含む。
105	114	24-05	71	長谷7区	石器	柱状片刃石斧	全形	断面円柱状。基部側半身は全面に敲打痕顕著に残す。被熱黒変、刃部欠損。砂岩製。現重量248.3 g。
106	109	24-04	−	長谷	石器	残核		サヌカイト製。現重量6.8 g。
107	111	24-04	−	長谷	石器	剥片		サヌカイト製。現重量5.0 g。
108	110	24-04	−	長谷	石器	剥片		サヌカイト製。現重量2.6 g。
109	113	24-04	−	長谷	石器	剥片		サヌカイト製。現重量0.6 g。
110	112	24-04	−	長谷	石器	剥片		サヌカイト製。現重量1.3 g。
111	092	14-14	70	長谷6区	石器	打製石鏃	先端部	主要剥離面残さない。サヌカイト製。現重量0.4 g。
−	008	03-02	×	長谷	中世土師器	坏	底部	内外面磨滅。内外面にぶい黄橙色。2㎜以下の石英・長石・赤色粒やや含む。
−	036	14-02	46	長谷7区	弥生土器	壺？	体部	文様に見えたのは出土時の傷。実測せず。
−	049	14-04	−	長谷1区	弥生土器	壺	底部	底径復元不可により、実測せず。
−	065	14-07	14	長谷2区	弥生土器	甕	底部	残存不良により、実測せず。
−	088	14-11	−	長谷9区	弥生土器	甕	底部	底径復元不可により、実測せず。
−	089	14-12	73	長谷12区	弥生土器	壺	底部	底径復元不可により、実測せず。
−	−	−	15	長谷2区	−	−	−	十亀(1973)第3図に掲載なし。
−	−	−	24	長谷3区	−	−	−	十亀(1973)第3図に掲載なし。
−	−	−	25	長谷4区	弥生土器	壺？	底部	該当個体見あたらず。
−	−	−	26	長谷4区	−	−	−	十亀(1973)第3図に掲載なし。
−	−	−	35	長谷7区	弥生土器	甕	口縁部	該当個体見あたらず。
−	−	−	37	長谷7区	弥生土器	甕？	胴部	該当個体見あたらず。
−	−	−	38	長谷7区	弥生土器	甕？	胴部	該当個体見あたらず。
−	−	−	40	長谷7区	弥生土器？	土製品		該当個体見あたらず。
−	−	−	52	長谷7区	弥生土器	鉢？	口縁部	該当個体見あたらず。
−	−	−	53	長谷7区	弥生土器	壺	口縁部	該当個体見あたらず。
−	−	−	54	長谷7区	弥生土器	壺	口縁部	該当個体見あたらず。
−	−	−	75	長谷16区	弥生土器	壺	口縁部	該当個体見あたらず。
−	−	−	76	長谷16区	石器	石庖丁	完形	該当個体見あたらず。
−	−	−	77	長谷16区	石器	打製石鏃	完形	該当個体見あたらず。

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

— 2005年度 —

愛媛大学埋蔵文化財調査報告　XⅦ

2007年11月30日

発　行　愛媛大学埋蔵文化財調査室
〒790-8577　松山市道後樋又10－13
TEL・FAX　089-927-9127

印　刷　岡田印刷株式会社
〒790-0012　松山市湊町7－1－8
TEL　089-941-9111㈹　FAX　089-932-1199

R100 本文には古紙配合率100%の再生紙を使用しています。